

國立臺灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis



大江健三郎文学における絶望と希望

—初期から中期までの転換を中心に—

The Despair and The Hope in Kenzaburō Ōe's Works
-Focus on the Transformation Occurred from the Early-
term to the Middle-term

楊士豪

Shih-hao Yang

指導教授：范淑文 博士

Advisor: Shu-wen Fan, Ph.D.

中華民國 107 年 6 月

June 2018





致 謝

大江健三郎雖為日本近代文學的代表作家之一，但意外地在台灣相關研究並不多。在人生的諸多難題及煩惱之中，大江文學所表現出來的不逃避，誠實面對問題的姿勢著實給予了筆者許多的啟發。

在此，首先必須感謝的，必須是將這些思想反映在眾多優秀作品中的大江健三郎氏。即便其深奧的哲理筆者雖未能完全參透，但仍期望能藉由此次的研究，對同樣在各種難題中徬徨著的朋友們，能引起些許的共鳴。也讓大江氏的作品能獲得更多人的認知及討論，如此便已是萬幸。

本篇論文得以完成仰賴了眾多人士的幫助，若非大學時期受到交通大學藍弘岳老師的指導，筆者在研習日本文學及文化的路途上肯定更加艱難與挫折。謹向藍老師致謝，感謝其耐心及仔細的教導，帶領著筆者踏入日本研究的領域。而在臺灣大學就讀期間，對本篇論文不遺餘力地給予指導的范淑文老師，不僅僅只是在學術研究上詳盡教導，更是筆者的一個在人生及生活上商量的對象，也因此從各方面受到老師的激勵與支持，對范老師的感激無以言喻，僅在此以幾句話聊表謝意。而擔任此次口試委員的東吳大學林雪星老師及賴雲莊老師，亦給予了許多實質詳細的建議及指導。在林老師的建議下，加強了大江氏與魯迅之間關係的論述；在賴老師縝密且精確地修正下，也對本篇論文的各種細節有了非常完善的修飾。非常感謝兩位老師，因為如此精闢的意見，才能順利的將大江氏的文學整理出一個有邏輯的論點。另外，辻本雅史老師、陳明姿老師、林慧君老師等，其他眾多師長的幫助下，此篇論文才得以成立，能接受如此薰陶，學生實感榮幸，謹此誠摯地向各位師長致謝。

最後也感謝在這三年中遇見的各位同學們，還有即便在限定的情況下仍容許、支持我完成自己想做的事情的家人們。需要感謝的人太多，因篇幅關係無法一一列舉，實屬遺憾，僅於此稍做表示。希望這篇論文也能在未來幫助到其他人，延續這份珍惜與感激。

摘要



本論文著眼於大江健三郎文學從初期至中期發生的首次轉換，透過分析其小說中登場人物的力量關係，來解讀故事內容從絕望轉向希望的過程和原因。具體的研究方法如下：首先，確認作家的出發點為「戰後世代」的問題意識，即在權力體制中對「死與身分認同」的喪失感到恐懼的絕望。基於此論點，選擇處女作《奇妙的工作》、第一次引入 1963 年事件的《空中的怪物阿古伊（原文:アグイー）》、以及被認為是開啟中期階段的《個人的體驗》等三部作品，作為研究對象進行考察。

關於《奇妙的工作》，將分析其中所描寫的「戰後世代」及「戰中世代」的形象，並論述權力體制所製造出來的「監禁狀態」是如何作用於戰後社會，將絕望帶給主角們的問題。其次將剖析角色們無法從此狀態中脫離的原因，並探討作家所追求，源自於魯迅之希望的概念。1963 年「殘疾兒童」及「廣島旅行」的經驗所帶給大江氏的影響關係著《空中的怪物阿古伊》的創作。考察此作品時，將聚焦於「世代」與「個人」連結的描寫，並且解讀從初期作品繼承而來的技巧與意識透過敘事者「我」，被音樂家 D 和「阿貴」的問題所挑戰，最終連結至從廣島的被爆者身上所習得之「正統人類」思想的過程，進而確認大江文學於此開始轉換。緊接著，強調《個人的體驗》主角「鳥」的「個人」特性，並著重於分析「鳥」和其他人物間的關係變化。在此說明「鳥」將戰後世代的絕望與「殘疾兒童」的問題重疊，並開始將威士忌做為「自我欺瞞」的道具去依賴時的內心葛藤。結尾中他拒絕酒精，選擇了「正統」地活下去。解釋如此的結果為對「愛和希望」的期待，並紮根於社會的一種解答。

經過上述分析，可以得知大江文學從初期至中期的轉換，是對戰後世代的問題意識，以持有「社會性」的「個人」意識作為回答的過程。

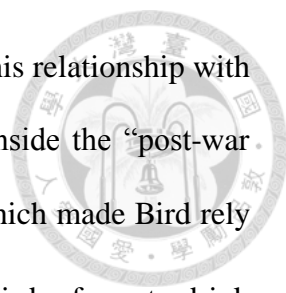
關鍵字： 大江健三郎、絕望、希望、戰後世代、魯迅、廣島、力量關係

Abstract



This thesis focuses on the initial transformation occurred in Kenzaburō Ōe’s Works from the Early-term to the Middle-term. Following the research method of analyzing the changes of power relationship among the characters in novels, I will interpret the meaning of the course and cause of the story from the despair turning into the hope. Research sequence will be as follows: first, the study will confirm the writer’s starting point is the consciousness problem of the “post-war generation”. And it means that under the power structure, being afraid of losing “death and identity”, the “post-war generation” is in fearful despair. Thus, the three works: the debut novel “The Strange Work”, the novel “Aghwee the Sky Monster” which was influenced by the 1963 incident, and, the “A Personal Matter”, which is considered initiating works of the Middle-term, will be chosen as targets to research.

In this thesis, the image of “post-war generation” and “the war generation” depicted in “The Strange Work” will be analyzed first. And next, it will be discussed how “the imprisonment situation” created by the power structure affects the post-war society and brings the despair to the main characters. Then, I will analyze the reason why they can’t escape from the situation and the writer’s pursuit of the hope originated from Lu Xun. The experience of “disabled child” and “HIROSHIMA” in 1963 affecting much on Mr. Ōe are related to the creation of “Aghwee the Sky Monster”. This part will focus on the connection between “the generation” and “the individual” depicted in this novel; and explain the process that the narrator “I” reveal the technique and senses inherited from the Early-term’s works, which were challenged by the musician D and “Aghwee”, and finally end in learning “the standard person” thought from atomic bomb victims. I will interpret the whole process and further confirm the time when Ōe’s Works began to change. Then the emphasis will be laid on the main character, Bird’s “individual”



characteristic of the “A Personal Matter”, as well as the changes of his relationship with other characters. In this thesis, I will explain the despair hidden inside the “post-war generation” combined with the problems of “disabled child”, and which made Bird rely on whisky as the tool of “self-deception” for his conflict. Finally, Bird refuses to drink alcohols, and decides to live on “standard”. This could be explained as the answer of the expectation of “Love and Hope” to be rooted in the society.

Viewing from the above statements, it can be concluded that the transformation in Kenzaburō Ōe’s Works during the Early-term and the Middle-term, is the process to answer the problems of “post-war generation” with the concept of “individual linking to society”.

Keywords: Kenzaburō Ōe, Despair, Hope, Post-war generation, Lu Xun, Hiroshima,

Power relationship

要 約



本論文は大江健三郎文学における初期から中期までに発生した最初の転換に着眼し、小説に登場した人物たちの力関係の推移を切り口に、物語の性質が絶望から希望へ向かう過程と意味を解明する。具体的な手順として、まず、作家の出発点である「戦後世代」の問題意識は権力体制の中に生じた「死とアイデンティティー」の喪失に対する恐怖の絶望を確認したうえ、デビュー作の「奇妙な仕事」、初めて1963年のことを扱った「空の怪物アグイー」および、中期の入り口である『個人的な体験』の三つの作品を研究対象として考察を進める。

「奇妙な仕事」については描かれた「戦後世代」と「戦中世代」のイメージを分析し、権力体制が作り上げた「監禁状態」がいかにか戦後社会に働き、主人公たちに絶望を与えるかを論じる。そして、そこからの脱出が不可能な原因、および、魯迅に基づく希望の概念が追求されていたことを明らかにする。1963年の「障害児」と「ヒロシマ」の経験が大江氏にもたらした影響は「空の怪物アグイー」の作成に関連している。この作品で表された「世代」と「個人」の連結に注目し、初期作品から引き継いだ手法と意識が語り手「ぼく」を通して、音楽家Dと「アグイー」の問題に挑まれ、最終的に広島^{バード}の被爆者から学んだ「正統的な人間」に繋がる過程を解明する。大江文学の転換がここから始まったという位置づけも確かめる。『個人的な体験』の主人公鳥^{バード}の「個人」的な特性を強調し、ほかの人物との関係性の変遷を取り上げる。心に潜む「戦後世代」の絶望を「障害児」の問題に重ね、ウイスキーという「自己欺瞞」の道具に頼ってしまう鳥^{バード}の葛藤を説明する。アルコールを拒絶し、「正統的に生きる」という選択に至った結末を「愛と希望」に期待し、社会に根付いていく答案と読み解く。

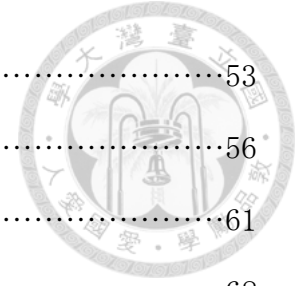
以上、大江文学における初期から中期までの転換は、「戦後世代」の問題意識に対し、「社会性」を持つ「個人」という答えに至るまでの過程であると見受けられる。

キーワード： 大江健三郎、絶望、希望、戦後世代、魯迅、広島、力関係

目次



致謝	i
摘要	ii
Abstract	iii
要約	v
序論	1
1. 研究動機	1
2. 先行研究	4
2.1. 「奇妙な仕事」について	5
2.2. 「空の怪物アグイー」について	8
2.3. 『個人的な体験』について	10
3. 研究方法	13
4. 論文構成	14
第一章 大江文学の出発点—「戦後世代」の問題意識について	21
1. 大江文学の出発点をめぐって	21
2. 「戦後世代」の成立背景について	21
3. 戦争中に過ごした少年時代	25
4. 「敗北」と占領と民主	31
5. まとめ—作家の人生と文学	38
第二章 「奇妙な仕事」における「戦後世代」の絶望と希望	40
1. 「奇妙な仕事」の問題点について	40
2. 登場人物の力関係について	41
3. 「敗北」に絶望する若者たち	44
3.1. 「僕」の怒りと「犬」への期待	46
3.2. 「僕」と「女子学生」の絶望および徒労	49



3.3.	犬が象徴する「性的」な問題	53
4.	特権階級と「戦中世代」の「卑劣的な英雄意識」	56
5.	魯迅の「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」	61
6.	まとめ	68
第三章	「空の怪物アグイー」における「障害児」の絶望から「ヒロシマ」 の希望へ	70
1.	「空の怪物アグイー」の問題点について	70
2.	1963年の大江健三郎—「障害児」と「ヒロシマ」	71
2.1.	「威厳」と「屈辱、恥」のモラル	75
2.2.	「ヒロシマ」の「正統的な人間」	78
3.	「空の怪物アグイー」における語り手「ぼく」と音楽家D	82
3.1.	朝鮮戦争と「戦後世代」の背景	85
3.2.	権威と対峙する「ぼく」とD	88
4.	Dと「同化」していく「ぼく」の「アグイー」との決別	91
4.1.	Dと「ぼく」の「同化」	91
4.2.	「アグイー」との決別	94
5.	まとめ	98
第四章	『個人的な体験』における絶望と希望—「障害児」と「ヒロシマ」 体験をめぐって—	100
1.	『個人的な体験』の問題点について	100
2.	ウイスキーを飲み始める前の主人公	102
2.1.	^{バード} 鳥の少年時代に潜む「戦後世代」の問題意識	107
2.2.	^{バード} 赤んぼうの出産前夜における鳥	111
3.	ウイスキーにまつわる絶望	115
4.	ウイスキーを拒絶する主人公	121

5. まとめ	125
結論	127
参考文献	135



序 論



1. 研究動機

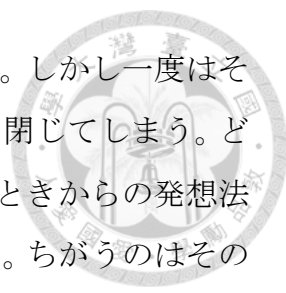
戦後文学の代表者の一人と言われた大江健三郎はこれまで戦後の日本社会と文化を始め、多様なアプローチで彼自身が意識していた世界と関わる問題に関心を向けて筆を執ってきた。そのような氏の作品は大まかに三つの段階に分けて考察することができる。「奇妙な仕事」(1957年、『東京大学新聞』)、「死者の奢り」(1957年、『文学界』)、『われらの時代』(1959年、中央公論社)などの一連の小説を活発に発表した作家デビュー初期、氏が1963年に障害者の息子の誕生を境目に書き上げた「空の怪物アグイー」(1964年、『新潮』)、『個人的な体験』(1964年、新潮社)、『万延元年のフットボール』(1967年、講談社)などの著作が順次に上梓されてから、1993年に当初「最後の小説」と決めていた『燃えあがる緑の木』(1993年、新潮社)を経て休筆し、94年にノーベル賞受賞までの中期、最後に1999年の『宙返り』(1999年、講談社)で執筆再開し、その後の文学活動を「後期の仕事(レイト・ワーク)」と自称して今に至るまでの時期がその三つの区切りと思われる。というのも、デビュー以来戦時の体験と戦後の社会を中心に著された小説は63年以後、「障害児」と広島経験、核社会を軸に話が組み込まれるようになり¹、さらに93年に「老年の入口でそれを検証」²するために書かれた長編三部作を境目に、その後の作品は「晩年」³を強く意識し始めた。このように、三つの時期にはそれぞれの文学特徴が存在し、かつ扱う題材も大きな相違が見られる。

今までの先行研究では、異なる時期や作品の比較と分析が盛んに行われ、多岐にわたる切り口でそれぞれの特徴と描写がもたらす意味が論述されてきた。その中で初期作品について、開高健の次の評価は代表的だと言える。

¹ 大塚英治が『初心者のための「文学」』(角川書店、2006年)で「大江に障害を持った長男が生まれ、彼の小説が大きく変容していくことで後半の仕事についての評価は大きく分かれます」と指摘したように、最初のこの転換は明白であり、すでに広く認められている。

² 大江健三郎『大江健三郎小説』(新潮社、1996年)パンフレットによる。

³ 「96年には武満徹さん、97年には伊丹十三さんが亡くなられたということもあって、自分にとっての晩年を意識した小説を書くことに気持ちが向かっていきました」と大江氏が述べたように、90年代後半の転換は著しいものと思われる。「大江健三郎 Interview long Version 2005年9月号」(<https://ddnavi.com/interview/23089/a/>)、『ダ・ヴィンチニュース』2005年9月1日掲載、2018年6月20日閲覧)



一つの環境がある。閉じていて、どこにも逃げ道がない。しかし一度はその壁が破れかける。けれどつぎの瞬間にはふたたびそれが閉じてしまう。どうしようもない。絶望だ。…というのが大江君の処女作のときからの発想法らしい。どの作品を読んでもすべてこの式が使われている。ちがうのはそのときどきによって場所や人物や職業だけで、項は変化しても式そのものはすこしもかわらない。⁴

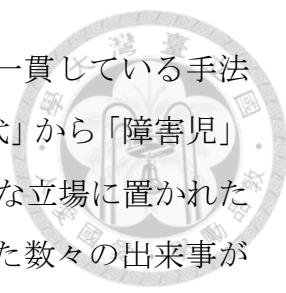
大江氏自身も1957年のほぼ後半に書き上げた初期短編を「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが一貫した僕の主題でした」⁵と説明したように、閉塞感⁶と絶望感が溢れる当時の社会状況に合わせて、そこで生きている作家と同時代の青年たちの苦悩を描いていたと思われる。この同時代に対する問題意識はデビュー後まもなく、大江氏が自分たちを「戦後世代」と捉え、「戦後」に対するイメージを積極的に発言したことから、本論文では「戦後世代の問題」として見なし、それを定義した上で論述していきたい。

さて、この「戦後世代」の絶望が作品に反映した結果、まず挙げられるのは一人称語り手の主人公の受動的な特質である。「奇妙な仕事」、「死者の奢り」など最初期の短編作品で見られるように、男子大学生の「僕」はずっと消極的に行動しており、たとえ不合理に要求、対応されても抵抗しなかったが、最終的に迎えたのは徒労な結末だけであった。もう少し時間を後に巻いて、1959年に出版された、初めて「性」の概念を意識的に物語に取り入れた長編小説『われらの時代』においても、主人公とその弟はそれぞれこの閉塞な時代性に対抗し、そこを脱出しようとしたものの、無力に終わった。そして、こういう主人公と同世代の登場人物たちも全員、無為に終わるのが常であるが、彼らに不当な制圧を施した人物たちのほとんども外部からの更なる大きな圧力によって悲惨な運命に見舞われる。こうして見れば、大江氏の初期作品に満ちている「絶望」は人物関係の形成から崩壊までの過程を通してよく表されていると言えよう。

⁴ 開高健「変わらぬ発想法」(『読売新聞夕刊』1959年8月6日3面)

⁵ 大江健三郎『死者の奢り』(文芸春秋新社、1958年)302頁。

⁶ 閉塞感の評価について、大塚英治が『初心者のための「文学」』(角川書店、2006年)で「戦後社会」をこのようにある決定的な閉塞感をもって描き出すという視線を強烈に示したのは戦後文学に於いては誰よりも大江健三郎であった」と指摘したように、当時においても、大江文学の特徴であるため、数多な評論と研究に取り上げられていた。



こうした関係性の構図は初期に限らず、大江文学において一貫している手法であり、たとえ中期以後、物語のテーマが戦後の「社会」、「世代」から「障害児」と共生する「個人」に変わってもそれが崩さず、極めて受動的な立場に置かれた弱者とその対極において能動的に振る舞う強者の間で発生した数々の出来事が物語を編み出してきた。しかし、この上下関係⁷の描写は消えることがなかったとしても、役割を担っていた人物が確実に時間と共に変化していたとうかがえる。主人公に集中して見ると、初期作品の「戦後世代」が抱いていた絶望の宿命は『個人的な体験』において、青年一鳥^{バード}が最終的に絶対弱者の「障害児」との共生を選択し、現実と向き合うことにより希望へ転じさせた。このような絶望から希望への進展を三島由紀夫みたいに急激なものだという批判⁸も少なくないが、作家が前の年に広島で経験したことを参照すれば、この結論の到達はやはり「戦後」の問題と結びついており、合理的だと考えてもよいだろう。そして、結末において、主人公は父親という家族における上位の立場を引き受けた同時に、「障害児」によって自身の内面が救済され、精神的な力関係⁹の逆転が行われていたとも見受けられる。

このように考えると、人物の力関係の変遷は大江世界観の中軸である以上、無視することができない。そして、こうした関係性の変化は大江氏が思う「戦後世代」の絶望から「弱者との共生」の希望になる変化と繋がると考えられ、それを解明しないと彼の文学脈絡を精確に読み解くことも難しいと推測できる。しかしながら、これまで力関係に着目し、大江氏の全作品にわたった分析を行った研究はほぼ見当たらない。その絶望と希望についての言及も主人公以外の人物の変化が見落とされている。従って、本論文は先達の研究成果を踏まえ、大江氏自

⁷ 「上下関係」について、『日本国語大辞典 第二版 第七巻』（小学館、2001年）の「上下」項目に記された「順序や序列を含むものの先のものと後のもの。1. 位や官職の上の者と下の者、また、身分の高い人と低い人を合わせたすべての人びと」という解釈に従う。本論文では主に両者の間に明らかに存在する直接的な順序（主従、雇用などの強制力がある場合）の関係を示す時に用いる。

⁸ 三島由紀夫「すばらしい技倆、しかし…—大江健三郎氏の書下し「個人的な体験」『週刊読書人』1964年9月14日号（読書人、1964年）

⁹ 「力関係」について、『日本国語大辞典 第二版 第八巻』（小学館、2001年）に記された「能力、力量、武力などの優劣による、二つ、またはそれ以上のものの関係。力の釣りあい」という解釈に従う。本論文では主に両者を並ぶ時に現れる強弱の関係（家族圧力、権力、アイデンティティーなど、必ず直接に制圧しているわけではないが、間接的にプレッシャーをかけることになる場合も含める）を示す時に用いる。

身が宣言した「戦後世代」の定義から着手し、処女作「奇妙な仕事」を始め、初めて「障害児」をテーマにした「空の怪物アグイー」と中期に本格的に「障害児」との共生を題材にした『個人的な体験』の三つの作品を中心に、登場人物たちの力関係の推移を通して、氏の絶望と希望の概念の読み解きを試みる。

2. 先行研究

1935年で愛媛県喜多郡の谷間にある大瀬村（現在の内子町）に生まれた大江健三郎は9人家族で育ち、そして十歳の頃に戦争の終結を迎えた。この間の出来事を大江氏は作家デビュー後まもなくの1959年に書いたエッセイ「戦後世代のイメージ」で、彼自身が体験したことを「天皇」、「負けと終わり」、「国家」と「英雄」などのいくつかのテーマに分け、同世代の共通経験としてかなり詳しく語っていた¹⁰。その同世代の連帯意識については前述のように、「戦後世代」あるいは「新・戦後派」に属するものだと大江氏自身が言及している。そうして彼も後に新聞から「戦後世代の旗手」¹¹と見なされるようになった。大江健三郎文学はまさにこの世代論的な問題意識から出発したものであり、その著作を分析するには見落としはならない部分と言わざるを得ない。となると、「戦後世代」が持つ問題意識を精確に捉えるため、「戦後世代」という言葉に含まれた意味を更に具体的に定義する必要がある。

一方、このような世代論に対して異議をもっている研究者は少なくない。例えば、邦高忠二は氏の戦中派論に対して、「なにかこのなかには、世代の代表を意識した過剰な自認があるし、戦中派の表現を不当に低くみようとする世代マニア的対抗性も感じられる」¹²と指摘している。月村敏行も氏の小説「孤独な青年の休暇」（1960年、『新潮』）を例に、「作品としてみればそのイメージも世代にアクセントをおいたモチーフによって、いささかちぐはぐな印象のなかに浮かんでしまうのはとどめがたい。それはそもそもの自己確立が世代論を根底にしな

¹⁰ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980年）（初出『週刊朝日』1959年1月4日号—2月22日号）

¹¹ 大江健三郎「希望訪問 戦後世代の旗手 風に向かって進む魅力」（『読売新聞朝刊』1966年9月25日18面）。松原新一「大江文学の魅力 戦後世代の渴望と象徴」（『読売新聞朝刊』1967年10月8日18面）。など。

¹² 邦高忠二「大江健三郎の反抗と常識—『厳粛な綱渡り』をめぐって—」（『日本文学研究資料刊行会編安部公房・大江健三郎』（有精堂、1974）165頁。（初出『新日本文学』1965年5月号）

ければならなかったために、いわば当然の結果である」¹³と厳しく論評した。こうした論議は基本的に大江氏の世代マニア的な部分についての疑問であるが、その世代論の当否はさておき、本論文は大江文学の変化を視座に据えた以上、大江氏が思う「戦後世代」に内包された様々なイメージを時代性と合わせてさらに把握しなくてはならない。

2.1. 「奇妙な仕事」について

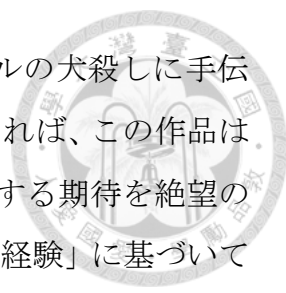
前述した様々なイメージを全部取り上げるのは更なる紙幅を要するが、前に提起した開高氏の「絶望感」や「閉塞感」の論点と大江氏の「監禁状態」の説明に絞りたい。そういった問題を扱ったのは最初の処女作「奇妙な仕事」に明白に見られる。それについて、野間宏は次のように論じていた。

大江健三郎の出発点はたしかに監禁されている状態、そこに閉じ込められている人間を、監禁されている人間の身体を媒介にして捉えるところに置かれている。すでに彼の出発点に於て彼はこのような状態からの脱出をモチーフとしているので、彼はこのような状態に戦争と敗戦と占領を通じて置かれた人間の視覚、聴覚、嗅覚、触覚などとその背後に動く人間の欲望との関係、さらにその上におおいかぶさってくるものとの関係を明にしなければならぬところに立たされているのである。(中略) それは人間の存在の根底にまで及んでいるので、その根までくぐり入って、そこからそこに及んでいる変化を見とどけ、その回復をくわだてるほかには方法がないという考えは、すでに出発点に於て彼のものとなっている。それはその「奇妙な仕事」のなかに反語的に語られている。¹⁴ (下線は筆者による。)

1954年大江氏が東京大学文科二類に入学し、三年後の1957年で五月祭賞を受賞した作品「奇妙な仕事」を『東京大学新聞』の5月22日号に掲載した。それは男子大学生、女子学生、私大生の三人の「戦後世代」が学校の付属病院が飼っ

¹³ 月村敏行「世代論の逆説—大江健三郎論—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974) 172頁。(初出『文学界』1966年4月号)

¹⁴ 野間宏「方法の問題」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974) 155頁。(初出『群像』1958年7月号)



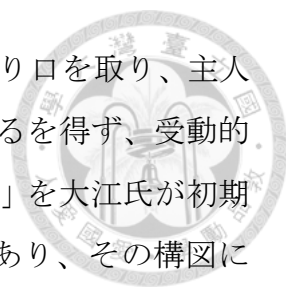
ていた実験用犬を殺すアルバイトを受け、プロフェッショナルの犬殺しに手伝うことを内容にした短編小説である。上掲の引用文の内容によれば、この作品は大江氏の出発点にあたる「監禁状態」を表現し、そこから脱出する期待を絶望の結末を通して反語的に語ったのであり、そのモチーフは「敗戦経験」に基づいていることがうかがえよう。言うまでもなく、その経験は「戦後世代」の問題意識の源の一つであり、戦後40、50年代の社会状況と結びついている。そこで青春を過ごしてきた大江氏が自身の体験を基にイメージし、「監禁されている状態」を作りあげたのは明らかであろう。しかし、「監禁」というのは「戦後世代」の閉塞感に繋がると言っても、それが一体どういう状況であるか、どこから触発され、そしてなぜ絶望以外に道がないのかなどは、はっきりされていない。

柘植光彦がそういう状態のイメージを「サルトルの「出口なし」や「壁」にカミュの「ベスト」を加えた設定の上に、「自由への道」の“猶予”する男マチウを立たせるという仕組みだった¹⁵と推定したように、大江氏がフランス文学を専攻し、サルトルを研究した事実も含め、フランス実存主義との影響関係はすでに多く論及されていた。また、森川達也もサルトルの脈絡を認めた上で、「監禁状態」は敗戦を契機として発生したが、その本質は「対自存在としての人間の、本質的なく自由>にかかわり、そこに究極の根拠を置くものである¹⁶と主張したように、状態そのものに対して様々な捉え方が見られる。確かにこうした一つの観念的な「監禁」のイメージについて分析する論点としては卓見であるが、実際「監禁」され、絶望していくという登場人物の構図に気を配らない傾向が顕著であるのも事実である。前でも言及した通り、人物の力関係において、独特な大江氏の設計図が存在し、それに沿いながら辿ってみると、新しい事実を発見する可能性もある。

「奇妙な仕事」に対して、それぞれの人物像を取り上げて論じた説は、まず、勝又浩の研究が挙げられる。氏は「僕」、「私大生」、「女子学生」の呼び方に気づき、固有名詞ではないことを指摘し、それぞれを「東大生」、「官学構造の反映」、「戦後新時代の反映」と一応の位置をづけようとしたが、彼自身も納得できず、

¹⁵ 柘植光彦「大江健三郎—戦後世代の文学のキーノート—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974) 218頁。(初出『国文学 解釈と鑑賞 1969年9月号』)

¹⁶ 森川達也「監禁状態の定着—初期作品を中心として—」『国文学 第24巻第2号』(學燈社、1979年) 79頁。



日本近代史と結びつく解読に問いをかけた¹⁷。それと異なる切り口を取り、主人公の変化に注目し、「能動的であろうとすれば、受動的たらざるを得ず、受動的であることで何とか能動的たろうとする」という「二重の姿勢」を大江氏が初期作品から出発する時の態度と捉えた加藤典洋の論点が重要であり、その構図には「彼方からかすかな希望の光がおりてくる」¹⁸と指摘していた。希望がある限り、理想的な結果は作家の思想に潜んでいるはずであり、初期作品は絶望だけではない一面をうかがわせたと言えよう。この「二重の姿勢」が後に、1963年以後の広島経験により、主人公が「受動的」から「能動的」に移行するようになった、つまり、その「二重性」を一旦忘れたようであると加藤氏が指摘している。この説で、「監禁状態」における「僕」と「私大生」の力関係の働きを解析していたが、他の人物には触れず、そして主人公たちに「もてあま」(14頁)された「私大生」を広島の「決して絶望せず、しかも決して過度の希望をもたず」¹⁹「正統的な人間」と同様の「能動性」を持つ人物として論じた点にはまだ疑問があると思う。

では、他の人物をさらに取り上げるとどうなるだろうか。「奇妙な仕事」における「監禁状態」を登場人物たちの力関係を通して見ると、「監禁されている」のは「戦後世代」のみならず、戦場から生き残って復員した「戦中世代」の「犬殺し」と飼いならされた「犬」も含まれていることに気づくだろう。ここの犬には実は「性的イメージ」が潜んでおり、後に大江氏に提出された「政治と性」の論点²⁰と関連していることも重要であり、監禁される時の無力感に繋がると思われる。

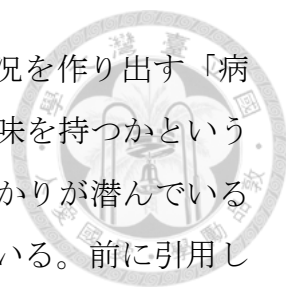
そして、その「監禁」は大きな枠である「社会」から、「学校の病院」、「職場」、「犬を囲む檻」までにさまざまな形で表わしている。言い換えれば、「監禁状態」というのは単に社会において違和感を覚える世代の問題に止まらず、一人一人の人物における力関係の変化から読み取れる幾つか重なった異なるサイズの「檻」がそこに存在していると言えよう。この多重の檻の構造はすべてが徒労に

¹⁷ 勝又浩「作家の発期と文学活動—大江健三郎」『国文学 解釈と鑑賞 第43巻12号』(至文堂、1978年)98-101頁。

¹⁸ 加藤典弘『文学地図 大江と村上と二十年』(朝日新聞出版、2008年)236頁。

¹⁹ 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』(岩波書店、1965年)91頁。

²⁰ 大江健三郎「われらの性の世界」『大江健三郎 同時代論集1』(岩波書店、1980年)(初出『群像』1959年12月号)など。



終わり、絶望に至る原因になると推論できるが、こうした状況を作り出す「病院」、「肉ブローカー」と「警察」などの力強き者はどういう意味を持つかという問題も考える価値があるはずであろう。そして、希望への手がかりが潜んでいるこの絶望もサルトルなどの実存主義と異なる源が求められている。前に引用した先行研究には討論されていなかった問題の細部を、本論文で検討していくつもりである。

2.2. 「空の怪物アグイー」について

1964年1月に出版された「空の怪物アグイー」は大江氏が前の年に「障害児」の長男の誕生と広島への旅を基に、一連の「障害児」をテーマに書いた最初の短編小説と思われる。同年の8月に発表された長編『個人的な体験』と相似した人物の構図を持っており、同様に「障害児」に関する苦悩をめぐって話が進んでいくため、「空の怪物アグイー」を独立の視点で論じた研究はあまり多くなく、言及したものもほとんど後の『個人的な体験』との関連を踏まえた上の比較論が大半を占めている。しかし、大江氏自身も両作を「それまでの私の短編を書く技術で、この主題をとらえる」と「全く新しいもの」²¹に分けて説明していたように、両者は確かに同じく「障害児」とその父親を語り、結末だけで異なっているが、両作品間にあるのは連続の関係ではなく、並列の関係で見なすべきであろう。「障害児」を受け入れるまでの悩みを語る『個人的な体験』に比べ、「空の怪物アグイー」は「障害児」を見殺した後から物語が始まる。こういう意味において、両作はそれぞれのベクトルを持っていると考えられよう。

この両作の前後関係を捉えたのは、渡辺広士である。氏は「アグイー」を「現実世界の恐怖」と定め、そこからの「逃亡欲求が肯定されるとも否定されるともつかず」、決着が付いたのは『個人的な体験』とした²²。また、松原新一は両作の共通点を「出産」の要素に目を付け、渡辺氏と同じく日常に恐怖が潜んでいることを提出した。

不具の赤ん坊の誕生という出来事をモチーフとした『空の怪物アグイー』

²¹ 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（新潮社、2007年）90頁。

²² 渡辺広士「解説」『空の怪物アグイー』（新潮社、1972年）286頁。

一』(昭三九)という短編や『個人的な体験』(同)という長編小説には、出産という世にありふれた出来事のなかにかくに恐ろしいものがふくまれているかという戦慄がながれている。『空の怪物アグイー』の主人公は、奇形児を医師と共謀して死に至らしめたあと、ついに正常な意識をうしなう羽目におちこみ、結局は死んでいくしかなかった。(中略) 大江健三郎の作品は、実存としての人間がまことに脆い存在であって、いつなんどき「壊れる」かわかったものではないという存在的不安を読者に感知させるのである。

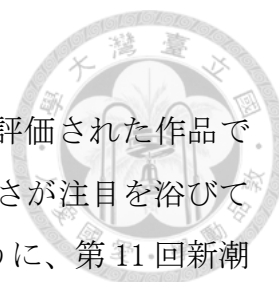
²³ (下線は筆者による。)

恐ろしいものは死んだ赤んぼうのイメージ「アグイー」であり、出産という当たり前の人間活動が含まれている。そして、主人公(引用によれば音楽家Dにあたるが、語り手の「ぼく」は別に存在するのを見ると、再考すべきと思われる。)は「正常な意識」をうしない、人間の「存在的不安」を表していると論じられた。こうして初期作品のモチーフの「監禁状態」に通ずる「破滅と喪失の不安」も本作に貫いており、大江氏の言葉の裏付けとなった。

しかし、主題が「戦後世代」の問題から「障害児」に変わった時、同じく絶望の結論に至ったと決めつけるのがよいのであろうか。「アグイー」は恐怖そのもののだとしたら、最後に語り手の「ぼく」が彼と決別する場面は希望の表れと言えるのではなからうか。また、音楽家Dの行動を含め、登場人物たちには明らかに上下関係の意識をうかがえるが、初期短編からどのような変化を遂げたかも一度考察する価値がある。

「空の怪物アグイー」の執筆時期を考えると、作家はすでに広島での取材で原爆の被爆者たちと対面し、交流を果たした。この広島の経験は彼と彼の息子に多大な影響を与えたのは改めて言うまでもなく、「戦後世代」の思想にも衝撃を加えたのであろう。その間の記録は『ヒロシマ・ノート』で丹念に記されており、本作を分析する際、それを参照していきたい。以上の先行研究に踏まえ、本作の登場人物たちの力関係の構図をもう一度検討し、そこから絶望と希望の痕跡を探り出す必要があるのであろう。

²³ 松原新一「大江健三郎」『昭和の文学』(有斐閣、1972年)305頁。



2.3. 『個人的な体験』について

『個人的な体験』は作家の文学生涯の分水嶺として一般に評価された作品であり、今まで盛んに討論され、特に最後の主人公の決断の唐突さが注目を浴びている。本章冒頭で言及していた三島由紀夫の厳しい評価のように、第11回新潮文学賞選評で亀井勝一郎が「最後の第十三章の、主人公の心の転換ぶりは実に安易である」²⁴と述べ、山本健吉が「結末の安易さが惜しまれる」²⁵と語ったことから当時の批判の声が決して小さくなかったろう。ところが、奥野健男が「この小説はついに爆発せず、正統的な生き方へ強制されて行くが、その挫折（ごせつ）ゆえに芸術的迫力がかえって作品に内在化されている。主人公の鳥（バード）と同じように、作者もこの作品体験によって、たくましい大人（おとな）になったように思われる」²⁶と評価したように、肯定的な論点も相次いで提出されるようになり、近年の論及もほぼ賛同する意見が多くなってきた。

この長編の主旨は黒古一夫が論じた通り、「作品の軸に「社会的弱者（障害者）との共生」と「核状況下の世界」を置いて」²⁷きたのであり、そして、栗坪良樹の「大江の実生活を基底にした、個人的な不幸から広島不幸へ、さらに人類にかかわってくるような不幸へ想像力的に飛躍してゆくという意志がはっきりあったということは言えると思うわけです」²⁸という発言みたいに、「個人」から「世界」へ繋がる絶望との対応が潜んでいる。こういう意味において、「障害児」と広島など、前の「空の怪物アグイー」と似たような要素も当然含まれている。利沢氏はこの両作を対比し、もっとも重要なテーマは現実に向き合うことでの生き方であると主張した。

『個人的な体験』とこの短編とを対比させてまず問題となるのは、一方では赤ん坊を生きさせるのに、他方では殺してしまい罪の意識に悩んでいる

²⁴ 亀井勝一郎・河上徹太郎・河盛好蔵・小林秀雄・中島健蔵・中村光夫・山本健吉「第11回新潮文学賞『個人的な体験』選評」『国文学 解釈と鑑賞第452巻』（至文堂、1971年）133頁。

²⁵ 同上、135頁。

²⁶ 奥野健男「精神の自由と社会 “怪物赤ん坊”を通じて」（『読売新聞夕刊』1964年9月10日9面）

²⁷ 黒古一夫『黒古一夫書評集 戦争・辺境・文学・人間 大江健三郎から村上春樹まで』（勉誠出版、2010年）15頁。

²⁸ 秋山駿・栗坪良樹・柘植光彦・山田有策「共同討議 大江健三郎の作品を分析する」『国文学第24巻第2号』（學燈社、1979年）49頁。

ということではない。それは単に結果にすぎない。重要なことは、長編の中では青年がよきオルガスムの機会を得て自己を恢復し、逃げかくれせず現実に立向うことが出来たのに、短編の中ではそうした機会に恵まれなかったために現実を回避して生きなければならず、生きることが不可能だったことを強調しているということである。²⁹

前節でも提起した「空の怪物アグイー」の語り手「ぼく」の希望という問題はここでも飛ばされたが、音楽家 D が現実に生きられないことを的確に指摘し、さらに『個人的な体験』の主人公鳥^{バード}の自己救済を見出した。それは今まで「世代」の問題を捉えてきた大江氏が「政治的人間」と「性的人間」の分け方から「正統的な人間」、広島^{広島}の被爆者と原爆病院の医師のイメージに移行しようとする証であると利沢氏が説明し、『個人的な体験』の最後の三頁が、作者にとって意味を持つのはその時である。態度決定によって自分の回復を成し得た鳥^{バード}（もはや鳥ではない）の生きる道は、《希望》をもち、しかし《忍耐》することによって、正統な人間として生きることであると指摘した³⁰。これは誠に鋭い見解と思われ、本作の執筆動機を見通したと言えよう。

しかし、「戦後世代」の問題意識、つまり「監禁状態」および他の数々のイメージは本作においてももう表れていないかという、そうでもないようである。主人公の鳥^{バード}を中心に見ていくと、閉塞感が溢れだす事件を言えば、まずはかつてアルコールに溺れていたことで大学院を退学し、義父に予備校の教師のポストを探してもらったという背景が目に入る。その理由を「自分自身の生活の内なる何か欠けるものと根源的な不満について徹底して考えてみることを自分が避けている」(296頁)と考えた鳥^{バード}であるが、結局理由を探し出さなかった。その後、彼は結婚生活と「障害児」の誕生に苦しみ始めたため、それが原因だと結びつきやすいが、そもそもアルコールを飲み始めたのはその前のことだと考えると、「根源的な不満」は鳥^{バード}自身から発するものと言えよう。これに対して、山田博

²⁹ 利沢行夫「自己救済のイメージ—大江健三郎論 I—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂出版、1974) 195頁。(初出『群像』1967年6月号)

³⁰ 同上、196頁。

光は次のように論じた。



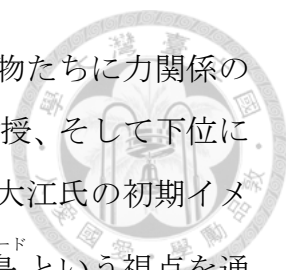
鳥^{バード}の内面の根源的な不満とは、妻や結婚生活そのものに対する不満というより、昭和三十年代後半の大衆社会的状況、すなわち、経済的にある程度まで恵まれていても、魂の欠けた、根元的な生きがいを喪失した社会に対する不満であると推察される。その対極としてのアフリカは、冒険であり、脱出であり、自由であり、青春でさえある。³¹

引用の通り、「障害児」の煩惱を語る以前、主人公の鳥^{バード}はとっくに昭和三十年代（1955—1965年）で生きる青年たちの「戦後世代」の問題意識を抱え込んでいたと言えよう。こういう意味において、彼と同世代かつ性関係を持つ女友達の火見子はまさに「性的なイメージ」をもたらす役割を果たしていると推測できる。山田氏は彼女をアフリカのイメージと連結し、「監禁状態」からの脱出と論じたが、筆者はむしろ「性的人間」であるため、アフリカを象徴とする自由を渴望したのではないかと考えたい。そして、なぜアフリカはそういう効果を持つかについても更に考察する必要がある。また、石原千秋も鳥^{バード}と火見子の性交を「性の成熟への道と見なし、「それは、惨めさや敗北や嫉妬や、そうしたあらゆる人間の醜さを孕んだ性交を引き受けることに他なら」³²ないと述べたように、火見子はおそらく山田氏が言うほどのポジティブなイメージを持ってないのであろう。最後に山田氏は鳥^{バード}の政治の無関心について疑問をかけたが、「奇妙な仕事」などの初期作品の主人公を見ると、そう驚くべくことでもないかもしれない。ただし、今回で希望を得ようとした鳥^{バード}の無関心は「無力感」ではなく、「政治的人間」でもないという方向性を示し得たのではなかろうか。

アルコールの話に戻ると、実は本作を通して、ウィスキー（あるいはアルコール）は主人公鳥^{バード}が現実の絶望から逃げようとした時に必ず使用される象徴の品

³¹ 山田博光「大江健三郎・主要作品の分析『個人的な体験』『国文学 解釈と鑑賞第 452 巻』（至文堂、1971年）111頁。

³² 石原千秋「反転する帝国—大江健三郎『叫び声』、『個人的な体験』『テキストはまちがわな』（筑摩書房、2004年）141頁。



物であり、「飲む」と「飲まない」の間に、彼と関わる登場人物たちに力関係の構造も同様に存在しているとうかがえる。上位に立つ医師、教授、そして下位にいる「戦後世代」の火見子と菊比古など、それぞれのモデルは大江氏の初期イメージから一貫して表していると見受けられる。そこで主人公^{バード}鳥という視点を通じて、絶望と共鳴する人間と希望を持って生きようとする人間が露見しているように感じられる。従って、本論文は主人公とアルコールに出会うタイミングを境目に、人物たちの力関係を位置づけた後に、絶望から希望に移行する^{バード}鳥との関係変化に注目していきたいのである。

3. 研究方法

本論文は大江健三郎の初期から中期の初め頃に至るまでの作品に焦点を絞り、最初の絶望的な雰囲気醸し出す小説から1963年以後、希望の結末を見出せるように転換した物語の性質を人物たちの力関係を通して解明する。最初の短編小説「奇妙な仕事」、転換を始めた時の「空の怪物アグイー」と変化を遂げた長編『個人的な体験』を研究対象にする。それらの作品を考察する前に、当時の時代背景および大江文学の出発点—大江氏の世代、いわゆる「戦後世代」の問題意識について分析していきたい。その意識を念頭に置き、三作に貫いている問題に注目しながら、各ストーリーの中で行われた人物たちの関係性の変化を考察する。

「奇妙な仕事」で受動的に動かされた主人公と「女子学生」、そして能動的に行動する「私大生」と「犬殺し」などの人物が構築した力関係の様相を手がかりに、「監禁状態」がもたらした絶望感の内実とかすかな希望の痕跡を明らかにしてみる。そうした閉塞感に支配された初期作品を継承し、「空の怪物アグイー」についても上下関係から模索し、さらに広島での経験がいかに活用されていたかを探った上で、具体的な希望のモデルを考えてみる。最後は最も明らかに変化した『個人的な体験』を取り上げ、作家が成し遂げた問題意識の回答を広島の「正統的な人間」の生き方と結びつける。

以上のように、まとめて言えば、本論文の研究方法としては人物たちの力関係の推移を介して、初期作品の絶望から出発し、中期作品における希望的な結末に

到達するまでの過程を究明し、論述を進める。



4. 論文構成

前述した研究動機、先行研究と研究方法を含め、更に今節の論文構成を加えたのは本論文の序論の内容になる。続きの章立ては「戦後世代」の時代背景を最初に説明し、「奇妙な仕事」、「空の怪物アグイー」と『個人的な体験』の順序で、三つの作品をそれぞれ一章の紙幅を割り、絶望と希望について分析していく。次は各章の概要について紹介する。

第一章 大江文学の出発点—「戦後世代」の問題意識について

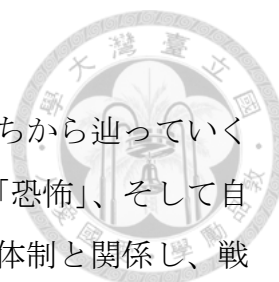
第一章では、まず大江健三郎が定義した彼らの世代である「戦後世代」について考察し、その成長の環境にあたる昭和二十、三十年代（1945年—1965年）の日本の社会状況に迫る。そこから「戦後世代」が臨む閉塞感に溢れる「出口なし」の問題を考察し、絶望を孕みながら突破しようとした若者であった彼らが持つイメージ、そして思想の形成について究明する。

1. 大江文学の出発点をめぐって

大江健三郎文学の転換を探究するために、まずは彼の出発点まで遡り、その成立の経緯を辿る必要がある。1957年からデビューした以来、作家が持つ独特な世代論と発想はどういうものか、そして、小説にどう反映され、当時の社会に影響を呼んだかをここで説明する。

2. 「戦後世代」の成立背景について

「戦後世代」は1930年代生まれ、戦時体制で国民学校に通い、戦後にて中学校に入学、民主主義の教育を受け、1950年に発生した朝鮮戦争で再び衝撃を受けた人々と定義した上で、彼らを育てた「戦後」、つまり40から60年代の社会現実に起っていた急速な変化に関心を向ける。本節ではこの時代の流れについて考察し、いくつ重要な事件を取り上げて「戦後世代」の成立背景を探究する。



3. 戦争中に過ごした少年時代

「戦後世代」自身の思想を理解するため、まずはその生い立ちから辿っていく必要がある。大江氏の経験を基に、彼が少年時代から感じた「恐怖」、そして自己を正当化できる「冒険」の意味を分析する。「恐怖」は権力体制と関係し、戦争と結びつくことが分かる。「冒険」に関わる英雄と卑劣のモラルも戦場経験に対する想像に由来するため、ここで戦争の影響に注目したい。

4. 「敗北」と占領と民主

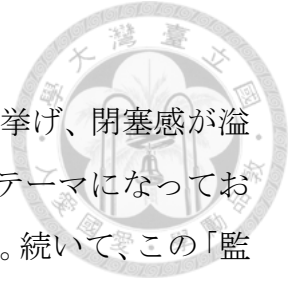
敗戦は少年の大江氏に「破滅」と「屈辱」のイメージをもたらした。「破滅」は喪失の恐怖と繋がり、「屈辱」は支配権力の再構築により屈伏感と解放感が相まって、「戦後世代」に「不決断」の「あいまい」性を与えた。その混乱を越え、新しい秩序となった新思想である民主主義はまもなく大江氏たちの信条となったが、50年代の朝鮮戦争などですぐにも挫折に出会い、反米運動のきっかけとなった。それがデビュー作「奇妙な仕事」の背景となったことに目を止める。

5. まとめ—作家の人生と文学

「戦後世代」が成立する時代背景を始め、大江氏の少年時代および青年時代の経験をまとめ、大江文学の出発点は強権への対抗にあるという論点を繰り広げる。初期作品の「監禁状態」から脱出できずに絶望する原因もこの「戦後世代」の内面にあると確認しておく。なお、作家自身の経歴と創作された作品の関連性を強調し、大江文学における作家の反語的な視点の重要性を重視していく。

第二章 「奇妙な仕事」における「戦後世代」の絶望と希望

第二章は大江氏のデビュー作である「奇妙な仕事」を取り上げ、そこに描かれていた各人物によって構成された関係図を解析する。前章で論じた「戦後世代のイメージ」を参考にしながら、それらを通して、「戦後世代」の人物たちが直面した絶望の実態を把握し、更に出口がない物語においての希望の痕跡を探ってみる。



1. 「奇妙な仕事」の問題点について

「奇妙な仕事」が発表された当時に受けた評価および論評を挙げ、閉塞感が溢れる「監禁状態」に生きる「戦後世代」の「虚無的」な心情がテーマになっており、大江文学の起点として方向づけられていたことを確かめる。続いて、この「監禁状態」を構成する多重的な「檻」の構造に注目し、その成立の理由と絶望以外の道についての疑問を掛けてみる。

2. 登場人物の力関係について

名前がない人物の特性にまず目を向け、個人ではなく、世代の各側面を表していると言語学の命名論を用いて推論する。その上で人物たちの間で権力による上下関係が作り出したいくつのサイズの「檻」が存在することを指摘し、その構造について分析し、無力感が存在する理屈も明らかにする。

3. 「敗北」に絶望する若者たち

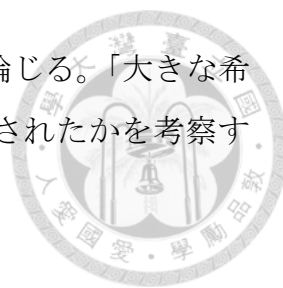
本作の主演にあたる「戦後世代」の「僕」と「女子学生」について検討し、そして学生たちと比喻され、殺され続けた犬たちが持つ意味をも論及する。彼らが受動的に絶望を受け入れるしかない理由をここで詳しく説明し、その抵抗がなぜ希望に到達しないかに関しても解いてみる。「私大生」は「犬殺し」と同じく比較相手になるため、後に譲る。

4. 特権階級と「戦中世代」の「卑劣的な英雄意識」

特権階級と認められた「私大生」および「戦中世代」の「犬殺し」の相似と相違を比較し、両者が能動的に動きながら、対抗し合う原因を検討する。また、両者の「自己欺瞞」による「卑劣さ」は戦時からの「英雄意識」と関係していると論じ、さらなる外力によって「敗北」する結果を見出す。最後に再び「戦後世代」の「僕」と比較し、「二重的姿勢」のジレンマを論議する。

5. 魯迅の「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」

絶望だけではなく、希望への追求も潜んでいた大江氏の作品に、サルトルなどの西洋由来の思想以外に、アジア的な源が求められている。作家自身も影響を受



けていると認めた中国文学者の魯迅はそれにあたるここで論じる。「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」という言葉がいかに大江氏に理解されたかを考察する。

6. まとめ

本章の論述を踏まえ、「奇妙な仕事」における「戦後世代」の絶望の成立、そして、希望を求め、現状から脱出しようとした彼らが失敗する理由を整理する。さらに理想的な希望の形を魯迅に遡り、大江氏の中期作品の転換に繋がることを結論として付ける。

第三章 「空の怪物アグイー」における「障害児」の絶望から「ヒロシマ」の希望へ

第三章で1963年大江氏の脳障害を持つ息子が誕生した以後、その経験をテーマにした作品「空の怪物アグイー」を考察の対象とする。「戦後世代」の問題を中心に執筆してきた大江文学はここで「個人」である「障害児」の絶望に転向し、閉塞的な状況を突破する方法も広島への旅によって変った。その過程を本作の分析を通して究明してみる。

1. 「空の怪物アグイー」の問題点について

「空の怪物アグイー」の執筆背景に「障害児」と広島への旅が重要であると確認し、さらに先行研究が『個人的な体験』との比較が大半を占めている事実を指摘する。その中で、あまり討論されなかった「戦後世代」の意識、語り手「ぼく」の目線と力関係の構造に着目し、初期作品との繋がりを検討する必要性を強調する。よって、本作を単独作品として読み解き、大江文学における位置づけを試みる方針を立てる。

2. 1963年の大江健三郎—「障害児」と「ヒロシマ」

まず、1963年の出来事について触れてみたい。「障害児」の問題に出くわした時に大江氏が感じた苦悩、そして一つの答えとして現れた広島の被爆者たちの生き方はこれからの作品に大きな影響を与えた可能性が考えられよう。ここで

「屈辱」、「恥」と「威厳」にまつわるモラルの論点を取り上げ、「決して絶望せず、しかも決して過度の希望をもたない」広島の「正統的な人間」の意義を考察する。ここで大江氏の思想の変化に注目したい。



3. 「空の怪物アグイー」における語り手「ぼく」と音楽家D

作中で主役を担う二人の主従、語り手の「ぼく」と音楽家Dが各人物との交流は物語の本筋となっているため、二人に集中して考察を行う。両者が後に深い共鳴を起こした事実を気づいたことから、双方に共通した部分があるとうかがえる。権威を持つ人物と対峙した時の反応を通して、両者の個性を解析し、引き継がれた「戦後世代」の意識を明らかにしてみる。

4. Dと「同化」していく「ぼく」の「アグイー」との決別

赤んぼうの幻影である「アグイー」が持つ意味、そして「ぼく」が結末においてなぜ彼と決別したかという問題に迫る。広島での経験がいかに生かされ、「ぼく」に音楽家Dの最後と異なる道を歩み出す力を与えたかを明らかにする。最後、広島「正統的な人間」のモデルが描出されたことを論証する。

5. まとめ

第三章の分析を整理し、「空の怪物アグイー」は今までの初期の短編小説の問題意識を継承し、「障害児」と「ヒロシマ」経験を活用し、絶望から脱出して希望へ向かう道を発見した作品であると論じる。「絶望と希望」という大きな枠において『個人的な体験』と併行する本作であるが、抽象的な手法が結末の理解を妨げるため、ここから転換を始めたという位置付けを試みる。

第四章 『個人的な体験』における絶望と希望—「障害児」と「ヒロシマ」体験をめぐって—

第四章では長編作品『個人的な体験』を取り扱い、その中で描写された各人物の力関係を分析した結果を通して、主人公の鳥が「障害児」の誕生に対する恐怖と絶望から逃げ回った最後、「正統的に生きる」と決めた急変^{バード}について探究する。アルコールの摂取が変化のタイミングを暗示していることを察知したため、

その意味をも考察する。



1. 『個人的な体験』の問題点について

『個人的な体験』の結末について催した議論を説明し、その中に力関係を切り口とする論点が欠けていることに気付いたため、初期短編からの人物関係の推移を方法として解釈する方向性を目指す。また、本作が作家に「最初の長編小説」と言われた所以も考察し、長編小説が表現すべき「愛」と「希望」が込められていると推論する。最後に主人公の変化とウイスキーの関係に注目し、その役割を解明することによって、大江文学の転換の意味を捉えられると考える。

2. ウイスキーを飲み始める前の主人公

物語中にウイスキーを飲み始める前の主人公について考察し、渾名の検討から彼は独立した「個人」として設定されたことを論証する。その上、主人公が少年時代に感じた「不満足」、および、かつて家庭生活に入る前に、ウイスキーに浸った理由である「根源的な不満」、そしてアルコールが担った役割を解明する。大江氏の経験との相似性を取り上げ、「戦後世代」の問題意識が潜んでいることを指摘する。「喪失」の「恐怖」とアフリカへの「冒険」の自己正当性がここでもう一度作家に使用されたため、第一章の内容と照らし合わせて解釈する。

3. ウイスキーにまつわる絶望

「障害児」の問題に出くわした^{バード}鳥の苦悩が「世代」から「個人」の絶望に集中していく過程について考察する。本格的にウイスキーを飲み始めた主人公が逃避し、赤んぼうを見殺そうとした行動の理屈を論じる。そして、火見子という人物が象徴する「性的なイメージ」と「救済」がどういう風に主人公の^{バード}鳥に影響したかを討論し、二人の性交渉が持つ「自己発見」の意味を解明する。

4. ウイスキーを拒絶する主人公

結末において、赤んぼうを受入れようとした主人公の決断はウイスキーの拒絶と共に発生した。前に論じたウイスキーの意味を踏まえ、主人公をこうした転

換を遂げさせた二人、デルチェフと菊比古の役割、そして広島での体験がもたらした実際の影響を分析した上で、「正統的に生きる」という希望に到達した原因を究明する。



5. まとめ

第四章の内容をまとめ、『個人的な体験』が成し遂げた「戦後世代」の絶望と「個人」の絶望に繋がり、そして広島の「正統的な人間」としての生き方の希望的な結果に転換した成果は大江氏の初期作品からの問題意識に対する回答であることを論述する。そのような『個人的な体験』が「愛」と「希望」の光を見つけた最初の長編小説という位置づけを確認する。

結論

「奇妙な仕事」から『個人的な体験』まで、「戦後世代」の絶望を持つイメージと希望への憧憬、1963年以後の「障害児」がもたらした苦悩と広島の「正統的な人間」としての生き方が象徴する希望の光は本章でまとめ、それぞれの変換過程を改めて確認し、初期から中期までの作品中の人物関係の推移を整理し、三つの結論を挙げてみる。そして、中期以後、大江健三郎における希望の更なる発展をも少々触れ、今後の課題として提出する。

第一章 大江文学の出発点―「戦後世代」の問題意識について



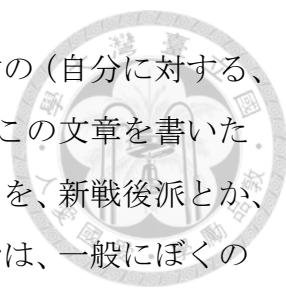
1. 大江文学の出発点をめぐって

本論文の主な目的は大江健三郎文学の最初の転換期、すなわち、初期から中期までの変遷について探究することにある。それを達成するためには、その出発点まで遡行し、彼の文学を形成させた経緯を辿りながら理解する必要がある。1935年生まれの大江氏は57年に作家デビューし、作品の独特な発想が直ちに反響を呼び、注目の新人作家と見なされていた。それ以来、彼と同世代の人たちが当時の社会に生きているうちに会った問題について盛んに発言し、いろいろな見解を繰り広げ、多くの論争を起こしていた。そうした思想も彼の小説に反映され、初期から「虚無的」な心情、「監禁状態」による「閉塞感」と「絶望感」が溢れると評価されている。

そして、59年から自分たちを「戦後世代」と呼び付け、新しい「戦後」の世代論を掲げた。その中に提出された各種な問題意識が彼の文学性を醸し出す最初の論理になった。言い換えれば、「戦後世代」のことは作家の出発点となったのであり、彼の人生で経験した出来事と結びついていると思われる。また、それらが持つイメージは後の作品の中にも長く深く影響し、重要な役割を果たしているため、大江文学を分析する前に、「戦後世代」について詳しく検討しなければならない。従って、本章はその定義を始め、「戦後世代」の成立と意味に少し触れておく。

2. 「戦後世代」の成立背景について

さて、大江氏たちの世代に関心を向けた以上、まずはその時代の背景を確定しなければならない。彼たちが「戦後世代」と広く呼ばれるようになったのは主に1959年に大江氏がエッセイ「戦後世代のイメージ」で言及してからだと思われる。このエッセイは元々「無分別ざかり」という仮のタイトルで『週刊朝日』に連載したものであり、大江氏の最初のエッセイ集『厳粛な綱渡り』で改称した原因を「第一部のためのノート」にて解説し、「戦後世代」の定義を次のように説明していた。



ぼくはこの一連の文章で、戦争がおわった夏のぼく自身の（自分に対する、また、世界全体に対する）イメージを再現しようとした。この文章を書いたころぼくは一種の世代マニアにかかっている、自分のことを、新戦後派とか、純粹戦後世代とか呼んで位置づけようとしていた。現在では、一般にぼくのように一九三五年生れで、戦後に中等教育を受けたような年齢のものを、戦後世代と呼ぶことが常識となったようである。¹

そして、同書に収録された「憲法についての個人的な体験（講演）」で「そういう、時代区分の境目の人間として、ぼくの世代と、それ以後の人たちのことを戦後世代と呼びたい」²と大江氏に語られたが、このエッセイ集の発売に伴い、新聞社から受けたインタビューで「たとえば一九五〇年という歴史の転換期以降に教育を受けたものは、もう戦後世代とはいえないと思うのです。（中略）ぼくらから戦後世代のように、新憲法を生き生きとしてうけとってはいません。いわばぼくらは、戦後の短い蜜月時代に育った、特異体験者の立場に立たされているのかもしれない」³と作家がさらに限定して述べた。こうした言論を整理すると、「戦後世代」は広義的に言えば、大江氏たちの世代とその後の全部の人間を指すが、厳密に言うと、常識的に認識されたのは1930年代あたりに生まれで、戦時体制で国民学校に通い、そして戦後にて中学校に入学、民主主義の教育を受け、新憲法を大切にしながら、1950年に発生した朝鮮戦争で衝撃を受けた人々と判断できよう。この世代で後の1950年代に文学者として登場した人は大江氏以外に、石原慎太郎と開高健などが挙げられる。その三人の文学を紹介するため、磯田光一は「戦後世代」の精神を育てた昭和二十年代（1945年—1955年）の状況を以下のように述べていた。

戦後における最初の十年間は、日本に残存する旧秩序を破壊し、そこに「個人」の自由に立脚した民主主義の樹立をめざそうとする動向が支配的であった。これはアメリカの占領政策と新憲法の理念とにもとづく旧秩序

¹ 大江健三郎「第一部のためのノート」『厳粛な綱渡り』（講談社、1965年）7頁。

² 大江健三郎「憲法についての個人的な体験（講演）」『大江健三郎 同時代論集1』（岩波書店、1980年）67頁。（初出『朝日新聞』1964年7月16日—18日）

³ 大江健三郎「僕らはいまや少数派 戦後の蜜月育ち」（『朝日新聞朝刊』1965年3月31日8面）

の破壊というかたちで、現実面にあらわれており、また思想的には、丸山眞男氏ら進歩的知識人、およびコミュニズムへの共感者たちの言論のうちに、時代の動向を見ることができる。⁴



この時期にて、アメリカとともに日本社会に染み入った民主主義が時代の潮流を導いており、さらに共産主義の思想が知識人を引き寄せたことが当時の社会の実態を反映していると思われる。しかし、それはあくまでも知識人の範疇に限る話であり、一般的な若者たちは逆に戦後資本主義の急速な発展で自由と解放を手に入れ、「私的利益」を迫及するようになったと磯田氏に指摘されていた⁵。さらに、共産党は1950年の党内分裂を経て、55年の運動方針の転換により、知識人の偶像としての象徴が崩れているようでもある。従って、こうした時代性を引き継いだ昭和三十年代（1955年—1965年）の特色について、磯田氏は「社会的に急速な近代化・工業化が促進され、また知識人の精神状況の問題としては、日共神話の解体によって価値意識の相対化が進行した時代」⁶だと見ていた。言い換えれば、大江氏たちの「戦後世代」はこのような社会の急変に刺激されながら成長してきたということになる。しかし、この急変と裏腹に、加藤周一が「政治制度の急激な変化に、政治的な意識と行動様式の変化がただちに伴ったのではない。権力と人民との関係においては、伝統的な「官尊民卑」の風習が残り、今日なお日本社会は、市民革命を経過した社会と異なる」⁷と説明したように、民衆の間にはやはり権力体制という伝統的な意識が未だに存在しているとうかがえる。この権力との関係が後に大江文学における重要なテーマとして語られており、「戦後世代」の成立に大きな役割を担っていると考えられよう。

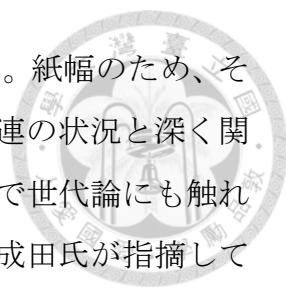
40・50年代を更に検討した『戦後日本スタディーズ1』において、岩崎稔、小森陽一と成田龍一の対談でいくつかの重要な事件を取り上げている。年代順でまとめれば、「敗戦」から「米軍占領と憲法制定」、「49年中国革命」、「朝鮮戦争」、「日本共産党の混乱」、「米軍基地反対運動」、「五五年体制」と「60年安保闘争」までが一つの過程であり、その中でいずれも絡んでいたのは「戦争責任」、「占領

⁴ 磯田光一「解説」『日本の文学76』（中央公論社、1968年）538頁。

⁵ 同上。

⁶ 同上、539頁。

⁷ 加藤周一『日本文学史序説 下』（筑摩書房、1999年）505頁。



と支配」、「民族とアイデンティティ」などの要素と思われる。紙幅のため、その内容についてはここで詳述しないが、「戦後世代」はこの一連の状況と深く関わっていることをまず念頭に入れておきたい。また、この対談で世代論にも触れており、50年代が「ちょうど世代の切れ目」になっていると成田氏が指摘していた⁸。具体的な例は前に言及した三人以外に、江藤淳なども挙げられ、さらに、「敗戦」や「民主主義」との関係が次のように説明されていた。

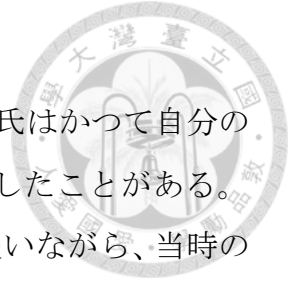
小森 敗戦のときにいったい何歳だったのかということや戦争に対する関わり方の深さや浅さによって微妙な違いが現れてきて、文学シーンにしる芸術シーンにしる、大きな対立や論争のきっかけにもなっていくんですね。

成田 そうです。戦後民主主義を担った層は、言ってみれば一九〇〇年代生まれの「大正デモクラシー」の時代に青春を送った人々と、一九三〇年代生まれの戦時において少国民であり敗戦を経てデモクラシーを教わっていた人たちの二つの世代が主流になっている。ようやく一九五〇年頃から戦中派が口を開くようになりますが、戦中派は両者（大正デモクラシー世代と少国民世代）に対して独自のスタンスを持っており、まさに世代が重要になるんですね。⁹

引用が示したように、1935年生まれの大江氏は「少国民」として、10歳で経験した敗戦をもとに「戦後世代」の世代論を掲げたのもそういう境目になった50年代の時代背景に影響されていた。そして、このように戦後民主主義の教育を受けた彼と同世代の人々は戦中派と向かい合っている一面を持つと推察できよう。では、こうした時代変化の真ただ中に生きてきた大江氏は一体何を感じ取り、「監禁状態」を書き上げたのであろうか。そこで「戦後世代」と「戦中世代」の関係についても検討する必要があると考えられ、それらに関しては彼の生い立ちから辿っていききたい。

⁸ 岩崎稔・小森陽一・成田龍一「ガイドマップ」『戦後日本スタディーズ 1』（紀伊國屋書店、2009年）39頁。

⁹ 同上、39—40頁。



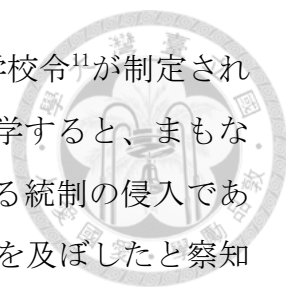
3. 戦争中に過ごした少年時代

前に提起したエッセイ「戦後世代のイメージ」も含め、大江氏はかつて自分の少年時代と十歳から経験した敗戦の過程について頻繁に発言したことがある。そうしたインタビューやエッセイをもとに、彼の生い立ちを追いながら、当時の時代背景が「戦後世代」思想の形成に与えた影響を考察していきたい。まず、愛媛県喜多郡大瀬村（現在の内子町）に生まれ、9人家族を持つ大江氏は戦争中に過ごした少年時代に影響を与えた小説について、次のように語っていた。

それは不幸なさきの大戦のさなかでしたが、ここからはるかに遠い日本列島の、四国という島の森のなかですごした少年期に、私が心底魅惑された二冊の書物がありました。『ハックルベリ・フィンの冒険』と『ニルス・ホーゲルソンの不思議な旅』。前者には、世界を恐怖が襲うようだった時代に、私が谷間の小さな家で夜をすごすより、森に登り樹木に囲まれて眠ることに安息を見いだす子供であったことの、自己正当化の根拠があると感じられました。そして後者の、少年が小人となり、かつ鳥の言葉を理解して、冒険にみちた旅をする物語には、いくつものレヴェルの官能的な喜びが隠されていたのでした。¹⁰（下線は筆者による。）

ここで提起された二作はどちらも少年の冒険譚を描いたものであり、幼い大江氏は谷間の森という自然が溢れる故郷を自分の根拠地と見做し、そこで冒険の想像を行うことにより、官能的な刺激を受け、また、「自己正当化」を図っていたのである。「正当化」する必要があるということは、言い換えれば、そうした行動は「不正」な疑いを招く恐れが存在するのであろう。世界が戦争の恐怖に囲まれていた中で、独りで森に安らぎを得られることに対して、小さな子供は不安に感じ、冒険譚の主人公のようにその行動を「正当化」できる理屈を求めていたのである。それにしても、実際戦場に臨んだこともなかったのに、そこまで抱いた恐怖心はどこから来たものであろうか。おそらくそれは軍国教育と戦時体

¹⁰ 大江健三郎「あいまいな日本の私」『あいまいな日本の私』（岩波書店、1995年）1頁。



制と無関係とは言い難い。1941年の戦時体制に対応した国民学校令¹¹が制定された以降初めて義務教育を受けた大江氏の世代が国民学校に入学すると、まもなく開戦を迎えた。そこから始まったのは一連の国家権力による統制の侵入であり、単純な村社会に大きな衝撃を与え、子供の大江氏にも影響を及ぼしたと察知できる。例えば、日本語の言葉遣いの差異に気づいた彼はあの早い段階で権力による上下関係をすでに感じていたことを、以下の発言から垣間見られる。

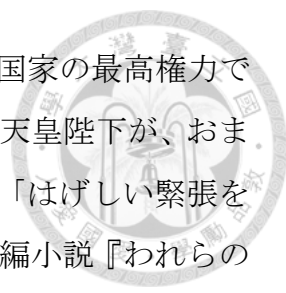
私の生まれ育った四国山脈の中央部に近い村—愛媛県喜多郡大瀬村（現在は内子町大瀬）ですが、この小さい村で、子供の私は二つの言葉があると感じたことを思い出します。ひとつは毎日話す言葉で、そのような言葉は、権力を持っていない弱い人間の言葉として作られている、という印象があったのです。偉い人が話しかけてくる。それに答える村の大人の言葉が、本当に卑屈な感じのものだった。自分の論理を通すという感じがしない。こういう言葉が生きている人間は進歩しないんじゃないかと、子供ながら私は思ったことがあるんですよ。¹²（下線は筆者による。）

下線部に取り上げられた「偉い人」は無論、戦時体制に入り、都市からやって来た役人や軍人のことを指す。彼らの言葉には上位の立場から押し付けるような力を感じ取ることができ、弱い者としての自分の村と家族はどうしてもそれに抵抗できなかつたという大江氏の幼い頃の記憶があった。言葉の問題であったが、戦争中の権力構造の現れであり、それを幼い大江氏が早く気づいたのである。そして、この構造の源を遡っていくと、当時の社会体制と国民学校で受けた戦時教育が「日本は軍国主義的な君主制でした。天皇陛下が上にひとりいて、その下にすべての国民がいて天皇のために働く、天皇のために死ぬという教育でした」¹³と大江氏に説明されたように、軍国主義の国家意識と天皇制の存在が顕著に現れているのは明らかであろう。大江氏は当時の学校風景を思い出し、天皇

¹¹ 文部科学省「小学校令改正（抄）（昭和十六年三月一日勅令第百四十号）国民学校令」『学制百年史 資料編』（文部科学省、1981年）

¹² 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（新潮社、2007年）14頁。

¹³ 大江健三郎「「きみたちにつたえたい言葉」質問と答え」『鎖国してはならない』（講談社、2001年）264頁



は「おそれ多い、圧倒的な存在だった」¹⁴と回想した。天皇は国家の最高権力であり、帝国日本の体制の頂点と思われる。当時学校の教師に「天皇陛下が、おまえに死ねとおおせられたら」と質問されたときに、大江少年は「ほげしい緊張を思い出し、「切腹して死にます」と答えるしかなかった¹⁵。長編小説『われらの時代』（1959年、中央公論社）を材料に、氏の戦後認識の形成を分析した時に提出した「天皇＝戦争＝死」¹⁶という蘇明仙の観点を参照すれば、ここで彼を襲った恐怖は、天皇という強大な権力に殺されるかもしれない状況からきたものであり、死に追い込まれる弱い者にとっての出口なしの社会状況であった。「監禁状態」の原型はこうして戦時体制の中から見出せるのであろう。

ところで、黒古一夫がこの頃の反応を「絶対的な権威として人々の頭上に君臨していた絶対主義天皇制の本質を、子供の大江が本能的に見抜いていたことを伝えている」¹⁷と指摘したが、その同時に、1960年に発表された氏の長編小説『遅れてきた青年』から以下の内容を引き、「陛下の赤子」である「皇国少年」としての主人公「わたし」が「戦後世代」の少年期の大江氏と「ほぼ等身大の経験と思想を持」¹⁸つ人物であるため、そうした一面も作者の中に潜んでいると論じた。

日本人でなくなること、天皇の子でなくなるのが、なにより恐ろしいからだ。それは死よりも恐ろしい。ぼくが死ぬことを恐くないのは、ぼくが死んでも天皇陛下は生きつづけるからだ。天皇陛下が生きつづけることは、ぼくが永遠に無になることがないということだからだ。それを教師がおしえてくれるまで、ぼくは戦死が恐かったのだ。しかし今は、死ぬことも恐くはなくなった。（「遅れてきた青年」『大江健三郎全作品 4』、34頁）

確かに、「戦後世代共通の体験を描いた半自伝的小説」¹⁹というキャッチコピー

¹⁴ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980年）9頁。
（初出『週刊朝日』1959年1月4日号）

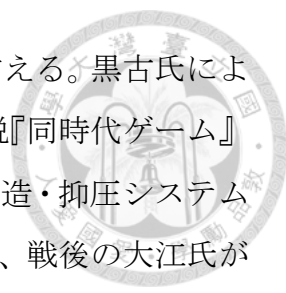
¹⁵ 同上。

¹⁶ 蘇明仙「『われらの時代』論：戦後認識を中心に」『Comparatio. 4』（九州大学大学院比較社会文化研究科比較文化研究会、2000年）31頁。

¹⁷ 黒古一夫「天皇制—デモクラット大江健三郎の決意」『日本文学研究論文集成 45』（若草書房、1998年）31頁。（初出『社会文学 3』日本社会文学会、1989年）

¹⁸ 同上、32頁。

¹⁹ 大江健三郎『遅れてきた青年』（新潮社、1970年）の帯による。



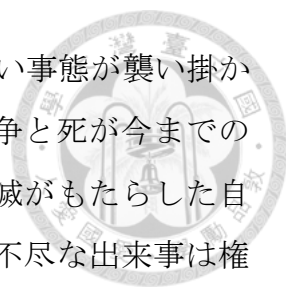
を付けられたように、本作は大江氏の少年期の経験の記述と言える。黒古氏によれば、このような天皇制に対する二重性の討論は1979年の小説『同時代ゲーム』まで続いており、後に民主主義の思想を頼りに、強大な権力構造・抑圧システムと正面から対抗できた²⁰。こうした論点には異論がないものの、戦後の大江氏がどう天皇制に抵抗してきたかはともかく、戦時の「皇国少年」が天皇に感じた憧憬と恐怖の矛盾から、もっと深く考える必要がある。引用の段落から見れば分かるように、最初に抱いた「戦死の恐怖」は、戦時教育を受けた後に「日本人でなくなること」の恐れに変えられ、その理由が天皇の子でなくなることは「永遠に無になること」と等しいからである。そこで「皇国少年」の天皇崇敬の論理が成立すると見受けられるが、恐怖が消えたというわけではなく、むしろ、「死」から「存在」そのものの欠落に対する恐怖に置き換えられたようにうかがえる。換言すれば、日本人としての「アイデンティティ」の喪失を恐れていたのであろう。こうして考えれば、天皇制は「戦後世代」の少年たちが強大な権威に殺され、あるいは戦争の想像による死の恐怖に襲われた同時に、それを抑制するために民族や国家のアイデンティティも付与した。そして、それらは大江氏が考えた「戦後世代」が天皇制を頂点とする権威への二面性を持つ理由と考えられよう。

しかし一方、死の恐怖は必ずしも強権と直接に関わるのではなく、時には理不尽な現実からもたらし、時には遠い戦場の情報から伝わる。戦争末期の1944年、大江氏の祖母の死に次いで、父親も死去した。戦争状況の悪化と共に体験したこの家族の崩壊、生活の不安を彼は次のように顧みた。

昭和十九年で、国のやってる戦争が恐ろしい状態になってるのは、子供らにも伝わってくるんです。(中略) 父が亡くなって、自分らの生活はどうなるかわからない、国がどういうふうになるのかもわからない。そういう不安な、恐ろしい、こちらの抵抗などすぐにもはねつけてしまいそうな、暴力的な「現実」。そういうことを知ったのが、昭和十九年と二十年の二年間でした。²¹

²⁰ 黒古一夫「天皇制—デモクラット大江健三郎の決意」『日本文学研究論文集成 45』(若草書房、1998年) 42—43頁。(初出『社会文学 3』日本社会文学会、1989年)

²¹ 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』(新潮社、2007年) 21—22頁。



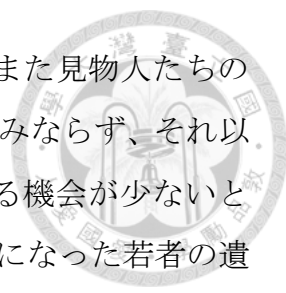
暴力的な「現実」、つまり、どうしようもない、反抗できない事態が襲い掛かってくる予感が周囲の変化から大江氏に伝わった。それは戦争と死が今までの生活と居場所への破壊に対する恐怖、さらに国＝天皇制の破滅がもたらした自分自身のアイデンティティーの動揺と言えよう。こうした理不尽な出来事は権力の下に発生したものではあるが、権力者自らの手で作った悲劇というより、一連の権力構造の中で犠牲されてしまった弱者の哀れみと思われる。こうして、大江氏の少年時代を森で「冒険譚」を読み、「自己正当化」するまでに迫ってきた恐怖は、死や自己喪失という破滅の結果に繋がるものであり、それは戦時の権力構造が作り出した閉塞な四国の村を通して語られている。

しかし、「冒険譚」の主人公の行動論理がもたらした正当性は戦時において大江氏の心に働きかけた原因はまだ不明なままである。戦時体制のもとで死と隣り合わせる民衆たちの恐怖を克服させるために、国家のためという理由が使われた。このような天皇制に与えられた「日本人」としての動機とは別に、「冒険」で得られたのはそういった押し付けられた理屈ではなく、未知の不安を自ら切り開く英雄性ではなからうか。そして、この「英雄的」であることは戦場に出た若者たちしか得られない自分を見極める機会、そこでじっくりと検証するものだと大江氏は次のように述べていた。

戦場で、若者たちは、望みさえすれば、どんなに英雄的であることも、どんなに卑劣的であることもできたにちがいない。または、戦場でかれらは、英雄的でならざるをえなくされ、卑劣ならざるをえなくされていたはずである。とにかくかれらは、英雄的であるか卑劣的であるか、どちらかではあることができた。²²

戦場に出た「戦中世代」の若者たちは戦争という大きな「冒険」の中で自分の行いを一度検証する機会を与えられ、そこで「英雄的」と卑劣の二つのモラルに分けることができた。それに比べ、危険な冬山を登ったり、自動車を早い速度で走らせたりした「戦後世代」の若者たちは、「英雄的なムードをかもしだすこと

²² 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980年）23頁。
（初出『週刊朝日』1959年2月1日号）



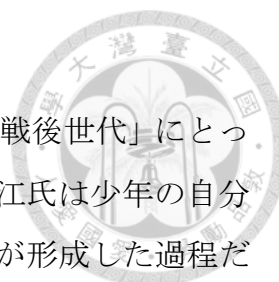
によって現実における英雄的なものの欠如を、自分自身にもまた見物人たちのためにも、おぎなっているのである」²³。「戦後世代」のみならず、それ以後の現代日本人には自分の英雄的か卑劣的かの性質を見極める機会が少ないと大江氏が続けて語った。戦争が終わりに近付いた時、「英霊」になった若者の遺骨を迎えるために出た子供の大江氏らの眼に映ったのは特別で絢爛な変身であり、それに伴って復員で帰ってきた、どこでもいる普通の平民への失望も更に大きくなった。戦場で特別な状態、つまり、英雄になれる機会に恵まれた状態に居続けた「戦中世代」にとってはなおさら挫折感が深く、戦後になってから度々当時の手柄話を語ることでその輝きの回復を図っていると大江氏が観察していた。

「戦中世代」の人々の意見及び大江氏のこうした論点の正確性はともかく、少なくとも 50 年代後半から 60 年代前半において氏の考え方として、戦場は若者たちのアイデンティティー＝英雄と卑劣のモラルを確立させることができる機会であり、そこで発見される英雄性は「冒険」がもたらした自己正当化の効果＝ヒロイズムと同様であると推論できる。英雄になれなかった人間は卑劣になり、それを認められない人間は自分のアイデンティティーに戸惑い、かつて戦場で英雄であったことを唱えながら「自己欺瞞」²⁴をする。

以上で論じたように、「戦後世代」の少年期は戦時の権力構造の中で閉じ込められ、死と喪失の恐怖を感じながら、アイデンティティーを確立できる「冒険」を望んでいた。その「冒険」は元々将来赴く戦場そのものになるはずだが、「戦後世代」はそこで英雄のイメージに憧れながら、戦争に死の恐怖も抱いていたとうかがえる。ところで、1945 年以後の「敗北」を経て、戦時の権力体制から解放されたはずだったが、「監禁状態」は破壊されなかった。「奇妙な仕事」以後に「監禁状態」が更なる発展を遂げたという描写から、「戦後世代」の問題意識は戦後から更に顕著になったと推測できる。従って、次は戦後の起点となる 1945 年の「敗北」を中心に検討していきたい。

²³ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980 年）23 頁。（初出『週刊朝日』1959 年 2 月 1 日号）。

²⁴ 柘植光彦「大江健三郎—戦後世代の文学のキーノート—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』（有精堂、1974）216 頁。（初出『国文学 解釈と鑑賞 1969 年 9 月号』）にて、「現実からの逃避を自己欺瞞」と考える大江氏の態度を説明していた。



4. 「敗北」と占領と民主

1945年は日本全国にとっては重要な分水嶺になっており、「戦後世代」にとっても例外ではない。戦争に敗れ、外国人に占領された経験を大江氏は少年の自分にとって「決定的な体験」²⁵と回顧し、「戦後世代」の問題意識が形成した過程だったと語った。かつて遠いところから知識として覚えた戦争の結果を実際に体験し、そこから初見の外国人に服従するという経験は大江氏たちの世代から見れば新しい人生の始まりと言っても過言ではない。その体験がもたらした衝撃と混沌に向き合い、「終戦」と「敗戦」の二つの解釈が当時の日本社会中に浮かんできた。それに関しては以下のように大江自身が言及している。

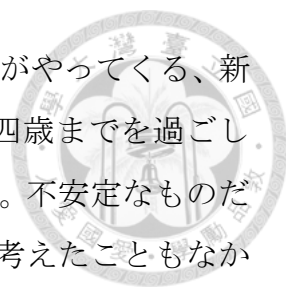
敗戦という言葉は、小学生のぼくの心に、破滅とか屈辱とかのイメージ、もうどうしようもない、絶望的な状態のイメージをよびおこした。

そして、終戦という言葉は、終結とか、安息とかのイメージ、働き終わって休息して再出発しようとする、もの悲しいが、静かなイメージをもたらすものだったのである。²⁶

無分別な小学生であった大江氏は、学校で教わった戦時教育を通して自分の国と戦争に関する根本的な概念を建立した。そして、戦争の結末を迎え、今まで頼ってきた社会の構造が崩壊し始めたことに直面すると、どうしても抵抗できない暴力的な「現実」、すなわち、未知な未来がもたらした不安と動揺に恐怖を感じずにはいられなかったであろう。そうした感覚を解消できるのは引用の通り、終戦という言葉の持つ雰囲気である。しかし、負けか終わりかの討論は今でも定論に至らず、進駐した外国軍がもたらした違和感は子供だけではなく、当時の大人たちの間でも混乱と動揺を引き起こした。日本という国に深い影響を残していたことを考えると、終戦の字面通りの終結の意味には程遠い発展方向へ社会が徐々に進んでいた。実際、この頃の社会の変動について大江氏は以下のように語っていた。

²⁵ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980年）34頁。
（初出『週刊朝日』1959年2月22日号）

²⁶ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980年）12頁。
（初出『週刊朝日』1959年2月1日号）



戦争があった、それが敗戦で終わった。進駐軍、占領軍がやってくる、新しい国家の体制が始まる、大きい変動の中で十歳から十四歳までを過ごした。それで、私らは社会は動くものだということを知った。不安定なものだという気持ちを持った。安定した未来や社会の繁栄など、考えたこともなかったですよ。戦争、敗戦前後の大きい変化が、私ら小説家や劇作家を作った。

27

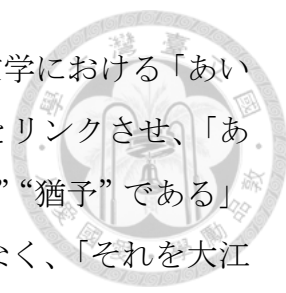
ここで示したように、不安定と変動が「戦後」の雰囲気支配しており、「戦後世代」の大江氏たちにとって「終結」の穏やかなムードより、「敗北」の絶望的な状態の方が将来直面しなければならない現実に近いと推察できる。少なくとも、大江氏は決して戦争の「敗北」の一面を避けて通ろうとしていなかった。同じく「敗北」を体感した「戦中世代」と比べ、「ぼくらの世代のものたちは《戦後》にのみ、生きたと言ってもいい」²⁸と断言したぐらいに「戦後世代」としての大江氏のこうした姿勢から見ると、両世代の「敗北」の受け止め方はやはり決定的に異なっていると言わざるを得ない。

では、大江氏たち「戦後世代」が「敗北」に感じた「破滅」と「屈辱」という絶望のイメージはどういうものであったろうか。前の論点を踏まえれば、「破滅」とは権力構造の崩壊による日本人としてのアイデンティティーの喪失、戦場で自分を見極める機会の消失及び死に対する恐怖と結びつくのである。要するに、国家権力のもとで教育を通して付与した皇国民としてのアイデンティティーは天皇の「玉音放送」によって破綻し始め、少年であった「戦後世代」は権威に対してもはや憧憬できず、いつか訪れる死の恐怖だけが残っていた。そして、戦場あるいは「冒険」の消失で自分のモラルを見分けられないまま、彼たち「虚無的」な心情を抱くようになったとうかがえる。

そうした「戦後世代」の状況を大江氏は「あいまい」という言葉を用いて、彼の初期作品に頻りに形容し、「敗北」がもたらした絶望を表現していた。その実例については、次章における小説内容の考察に譲るが、ここで先にその意味に関

²⁷ 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（新潮社、2007年）23頁。

²⁸ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集1』（岩波書店、1980年）34頁。
（初出『週刊朝日』1959年2月22日号）



する論述を取り上げる。この点に目を付けた柘植光彦は大江文学における「あいまい」の意味を、サルトルの「自由への道」の主人公マチウとリンクさせ、「あいまいということばの主要なイメージは、マチウ的な“不決断”“猶予”である」と指摘し、そして日本の日常においては非難されることではなく、「それを大江は“卑劣な”“いやらしい”“汚い”などのことばと対等に置いた」²⁹と分析した。柘植説に従えば、「戦後世代」は終戦に伴い、戦時体制のもとの「皇国民」であるアイデンティティを失い、「英雄的」な夢が満たされない状況に置かれる自分はその対極にある卑劣のモラルに近い存在ではないかと疑い始め、居場所を見失っていたと考えられる。そういう意味で「あいまい」という「不決断」は戦後社会を生きるのに必要な判断基準＝価値観が壊れたため、やむをえずに採った手段であり、どこにも所属されない「戦後世代」の精神を表しているものである。その状況はまさに「日本人ではなくな」り、死んで「無になる」ことの恐怖が顕在化した結果である。「虚無感」の正体、及び絶望のイメージは結局こういう権力構造が残した「死と存在」の恐怖感に繋がっていると言えよう。

やがて、この「あいまい」性は大江氏の初期作品群を貫き、権力に閉じ込められた「監禁状態」を悪化させた。そのような状況の中、更に抵抗できない無力感が生じた。ところが、「戦後世代」が「敗北」に感じた絶望は「破滅」だけではなく、まだ「屈辱」のイメージがあるように、「あいまい」性もさらに説明する必要がある。その部分について、かつて、作家は初期作品を書く必要と感じた理由として次のように二つのイメージを取り上げた。

国家が戦いに敗れたとき、ひとりの農村の愛国少年が屈伏感の巨大な種子をかかえこんでしまう。しかも同時にかれば、おなじく巨大な解放感、新生の感覚とともに、戦後の時代を生きる徒弟修業をもまた、始めたのであった。屈伏感は一に暗く恥ずかしく惨めなものにとどまらない。そして解放感、新生の感覚もまた、すっかり澄みわたった単純明快なそれではない。いわば屈伏感と解放感、新生の感覚が、それぞれ乾くまえに色を重ねて塗った水彩画さながら、あいまいに微妙に、にじみあい干渉しあって一種特別な色調を

²⁹ 柘植光彦「大江健三郎—戦後世代の文学のキーノート—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』（有精堂、1974年）215頁。（初出『国文学 解釈と鑑賞 1969年9月号』）

つくりあげて共存している。³⁰（下線は筆者による。）



「屈伏感」と「解放感」の並存、それは戦時中に天皇制に対する態度の二面性と相似していると判断できる。矛盾のように見えるが、実は同時に発生した感覚であり、アメリカ軍の進駐と密接に関係していると思われる。「勝った軍隊の兵士としての黒人を、初めて見たときの恐怖と嫌悪、それに一種の畏敬の念を忘れることができない」³¹大江少年の反応は昔、天皇制に対する感情とほぼ変わらない。それはつまり、権力構造での生き方をそのまま新しい体制に対応しようとしたのであり、そこで生まれた恐怖と崇敬も新たな権力者に移ってしまったと見える。ただし、「皇国少年」としての部分はそれを納得できず、天皇ではない強き者に支配される現実「屈辱」を感じた。力関係で説明すれば、弱き者の自分が服従した強者が「敗北」し、さらに強いものの登場に支配される自分は更なる下位に追い出されたと意味している。そうした「支配」と「被支配」の再構築で「屈辱」を味わい、「屈伏感」を覚えたのであろう。しかしその同時に、今まで自分を縛った権威から脱出し、新生の「解放感」を体感することになってもおかしくない。「敗北」を受け、「支配」された時点で、この二種類の感覚が一緒に発生したと察知できる。そして、両者の間にははっきりした境界が存在せず、「あいまいに微妙に、にじみあい干渉しあ」う二つのイメージは「あいまい」性のもう一面を表している。

「解放」された後に出会う混乱と喪失を考えると、「解放感」は必ずしもポジティブなものではなく、逆に恐怖のイメージを帯びる場合もあると推測できる。同じく、「屈伏感」もただ苦しく、悔しい思いだけではない。どのような形であれ、支配されたことからもたらされた秩序の再生と経済発展は周知の通り著しいものであった。「戦後は非常な乱世だった」³²と大江氏に語られたように、様々な犯罪、予科練くずれと復員兵による暴力の脅威など、未解決の問題が沢山存在する戦後の社会において、新しい秩序が求められている。1946年に公布された

³⁰ 大江健三郎「本当に文学が選ばれねばならないか?」『大江健三郎全作品 1』(新潮社、1966年) 368頁。

³¹ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』(岩波書店、1980年) 16頁。(初出『週刊朝日』1959年1月18日号)

³² 大江健三郎「大江健三郎に聞く 戦後世代の心情と論理」『国文学 解釈と鑑賞 第452巻』(至文堂、1971年) 10頁。

新憲法と民主主義体制の教育がそれである。1947年に教育基本法を基に創設された新制中学の大瀬中学に入学した大江氏はその学校の特徴を修身の時間の代わりに「憲法の時間」が出来たことに注目した。「《主権在民》という思想や、《戦争放棄》という約束が、自分の日常生活のもっとも基本的なモラルであることを感じるが、そのそもそもの端緒は、新制中学の新しい憲法の時間にあった」³³と述べられたように、民主主義の教育は「戦後世代」の精神に大きな役割を担っていたとうかがえる。大江氏にとって具体的にどのような影響を持つかという、次の談話でうかがえる。

やはり国家のしくみというものが人間によって決定されるんだということがはっきりわかったという気持ちもあったのです、その新憲法の発布には、非常に啓蒙的な情熱で先生が子どもたちに新憲法とはこんなんだと教えます。ぼくは国民主権ということはとっても好きだったですね。国家の命令があっても国民がそれに対抗もできるとか、民衆が国家のしくみを決めるというようなことがあって、これは非常によくわかったと思った。³⁴（下線は筆者による。）

国民主権、つまり一般民衆でも権力を握ることが許され、国家そのものに対抗できるという仕組みは非常に中学生の大江氏の心に響いたとうかがえる。2000年に渋谷幕張中学での講演で、「戦争が終わって、いまや民主主義だと、みんな自分の権利を主張していい、ということを先生がいわれた。国というものは自分たちが作ってゆくんだとも、その先生はいわれたんですよ」³⁵と大江氏が回想し、その時の自分は「よし、おれが作ってやろう」³⁶とっており、「森首相もなども、あの時そう思ったのじゃないかな(笑)。私と大体おない年ですから」³⁷と告

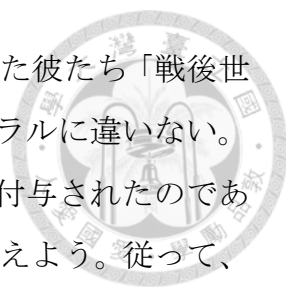
³³ 大江健三郎「戦後世代と憲法」『大江健三郎 同時代論集 1』(岩波書店、1980年) 61頁。(初出『朝日新聞』1964年7月16日)

³⁴ 大江健三郎「大江健三郎に聞く 戦後世代の心情と論理」『国文学 解釈と鑑賞 第452巻』(至文堂、1971年) 10頁。

³⁵ 大江健三郎「きみたちにつたえたい言葉 質問と答え」『鎖国してはならない』(講談社、2001年) 264頁。

³⁶ 同上。

³⁷ 同上。



白した。このように、戦時体制の権力構造に長らく縛られ続いた彼たち「戦後世代」にとって、民主主義はそこから救い出してくれる新しきモラルに違いない。少なくとも、抵抗できないという状況から、対抗できる理屈が付与されたのであり、それこそ自分が感じた恐怖から「正当化」できる体制と言えよう。従って、「戦後世代」は戦後民主主義を訴えることにより、「あいまい」である絶望から自分を見極められる希望を見出すことができるはずであったが、現実はそのようにうまくいかなかった。1950年に朝鮮戦争が勃発し、同年、大江氏は愛媛県内子高等学校に入学した。民主主義の信念もそこで初めての挫折を迎えたのである。

そういう気分が高等学校の一年生までぼくには続いたと思うんです。村の新制中学には行って、ずっと試験なしで隣の新制高校にはいったわけです。それは五〇年で、やがて朝鮮戦争が始まって日本共産党の幹部が追放されたわけですね。そのときに隣の共産党細胞の息子がいて、かれとぼくが非常に憤慨したことを覚えているんです。そしてそのときぼくはやはりどんどん、どんどんぼくの地方が萎縮していくというか、せばまっていくという感じをもったんです。³⁸

岩崎氏によれば、1949年の中華人民共和国の成立が当時日本における反米の民族意識に一つのモデルを示した³⁹。その流れで日本共産党は武装闘争路線を持続しており、学生運動と労働運動を繰り返しているが、1950年連合軍最高司令官総司令部(GHQ)のダグラス・マッカーサーが日共の非合法化を検討すると声明し、後に共産党幹部の追放を命令した。詳しい過程については省くが、共産党内部の分裂も相まって、朝鮮戦争などで東アジアの緊張感が高まったこの時期に、大江氏は高校で民衆の権利が制圧されるのを目撃し、新憲法と民主主義をもたらした連合軍、特にアメリカや国家政府に対して失望した。しかも、今の自衛隊の前身になる警察予備隊がすぐ後に成立し、「戦争放棄」という「戦後世代」

³⁸ 大江健三郎「大江健三郎に聞く 戦後世代の心情と論理」『国文学 解釈と鑑賞第452巻』(至文堂、1971年)10頁。

³⁹ 岩崎稔・小森陽一・成田龍一「ガイドマップ」『戦後日本スタディーズ1』(紀伊國屋書店、2009年)24—25頁。

の信条を打ち破ったと言える。このような状況が続く中で大江氏は「ぼくは村でしゃべっていることが国の中心まで響いていかないという感じを強くもったんですよ。それで東京へ出て行かなければという気持ちになった」⁴⁰と考えるようになった。

翌年、暴力的な予科練くずれの上級生たちから離れるため、愛媛県立松山東高等学校に転校した。そして1953年大学試験を準備するために東京の予備校に通い、人生で初めて四国を出た。54年、東京大学に入り、フランス文学を専攻し、正式に東京での生活を始めた。東京に来た氏の最初の行動は共産党の本部を見に行ったことであり、四国の村ですでに活動できない共産党の実態を確認しようとした。その時はもう合法活動を再開したため、無事に掲げられた赤旗を見て、大江氏は安心して、「これは自由なところに来たと思って、学校の勉強をはじめたと思うんですよ」⁴¹と語っていた。こうして行き詰まりに出会った大江氏は大学にて権力と対抗しながら、勉強していた。それからの50年代前半は基地反対運動が頻発している時期であり、小森陽一と成田龍一の対談でこの頃の状況が次のように説明されている。

小森 一九五一年九月のサンフランシスコ講和条約で名目上独立するけれど、しかし朝鮮戦争はまだ続いているわけで、同日同時に旧日米安全保障条約が結ばれてさまざまな密約が結ばれる……まさに基地問題の時代だったと思うんですね。

成田 内灘から砂川、沖縄の島ぐるみまで、基地をめぐる多くの出来事がありました。それは基地と同時に対アメリカの問題でした。⁴²

この一連の反米の動きは「戦後世代」にとって、自分の権力やアイデンティティを取り戻すための行いであり、なによりも「主権在民」と「戦争放棄」のモラルに基づく反発そのものだと言えよう。大江氏も例外なく、1956年の砂川町

⁴⁰ 大江健三郎「大江健三郎に聞く 戦後世代の心情と論理」『国文学 解釈と鑑賞第452巻』（至文堂、1971年）11頁。

⁴¹ 同上。

⁴² 岩崎稔・小森陽一・成田龍一「ガイドマップ」『戦後日本スタディーズ1』（紀伊國屋書店、2009年）34頁。

の立川基地反対運動に参加した。57年に発表された「奇妙な仕事」はまさにこうした背景の下に著作された短編小説であり、そこに描かれていた「監禁状態」にはこのような「戦後世代」の行き詰まりが秘められている。



5. まとめ—作家の人生と文学

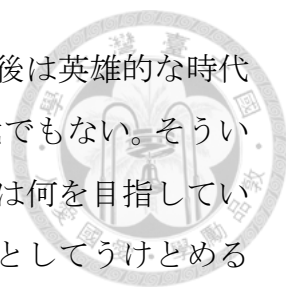
以上をまとめてみれば、権力構造に閉じ込められた「檻」に「敗北」を味わい、「死と存在」の喪失という「破滅」の恐怖に襲われ、「あいまい」なままで自分を見極められず、「無力感」の虜になり、強者に支配される「屈辱」を覚えると同時に、外力に「解放」された事実戸惑う「戦後世代」の心情はこうして表現され、「戦後世代のイメージ」に形成された。

という背景で、大江文学の出発点は常に強権に対する一種の対抗であり、そこからの脱出と解放、さらに正しいモラルが追及されていると言えよう。大江氏もかつて述べた「自分の文学的関心のもっとも本質的なモチーフは、強権に確執をかもす志だと考えるのであり」、「ぼくの現実生活にとってそれはすでに文学的野心だというべきかもしれない」⁴³ という発言から考えると、力関係において最上位の権力者への抗争を始め、最下位にある弱者を通して未来を予見しようとした「戦後世代」の詰問への解答は「奇妙な仕事」以来、大江氏の小説が構築した文脈の核心と言えよう。強権がある限り、それとの対抗を表すために「監禁」を設けざるをえず、しかし答えが現実に見つからない以上、作家は徒勞する絶望の結末しか用意できない。初期作品を分析する前に、まずはこのような「戦後世代」の内面を確認しておくべきであった。

ところで、フィクションとしての小説に作家自身の経歴に重なること自体が適切ではないという質疑を招きかねないが、大江氏の以下のような言論を取り上げ、大江作品の分析に当り、作家自身との関連性をも考察の対象に入れる必要性を改めて強調したい。

僕の小説は、結局、戦争の時代に田舎で子供として生きて、戦後に若者として大学に入った、その自分を書こうとしたものです。そして採用していた

⁴³ 大江健三郎「強権に確執をかもす志」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980年）45頁。（初出『世界』1961年7月号）



視点は何だったか。それが、アイロニーの視点でした。戦後は英雄的な時代でも悲劇的な時代でもない。あるいは幸福な田園詩の時代でもない。そういう時代に、何を信じていくか、何を愛しているのか、本当は何を目指しているのか。それらのことが全部裏返しにされて、アイロニーとしてうけとめるほかない人間として、僕は小説を書いてきたと思うんです。⁴⁴

引用のように、アイロニー、すなわち、反語的な視点が作家の方法であると説明されていた。自分の人生が体験し、恐怖もしくは憧憬していた具体的なもの、または望んでいる希望をあえて真逆の「あいまい」な「虚無的」な絶望に描こうとしているのは大江健三郎の初期小説の手法と思われる。その絶望が深ければ深いほど、その裏返しの希望への期待も更なる強烈なものだと感じられる。次章からはこういう手法を用いた短編「奇妙な仕事」を中心に、登場人物たちにおける力関係の構造を手がかりに、その「監禁状態」の「檻」の配置と変化に注目し、「戦後世代のイメージ」がどう関わっているか、また、絶望と希望はどう表現されているのかを解析していきたい。

⁴⁴ 大江健三郎・すばる編集部『大江健三郎・再発見』（集英社、2001年）62頁。

第二章 「奇妙な仕事」における「戦後世代」の絶望と希望



1. 「奇妙な仕事」の問題点について

「奇妙な仕事」は大江健三郎が作家として発表した最初の短編で、1957年まだ東京大学の学生であった彼の創作であり、五月祭賞で荒正人に選考された受賞作であり、「東大新聞」の五月祭記念号に初めて掲載された。その内容の大筋は次の通りである。ある病院で飼養されている一五〇匹実験用の犬を処分するアルバイトに申し込んだ男子大学生の主人公「僕」は雇われたプロフェッショナルの犬殺しに手伝ったが、最終的に肉ブローカーだと判明された雇い主の男のせいで、犬に噛まれ報酬ももらえずにただ虚しく帰った、というところで物語が終っている。「東大新聞」に載せた荒正人による選評で「全体としては、現代の最も若い世代のやや虚無的な心情をつかみだし、それを一つの事件としてまとめあげた手腕に敬服したい」¹と言われたように、この作品は大江氏たちの世代の「虚無的」な心情を主題にしたと読まれていたため、ここは大江文学の起点として方向付けていると考えてもよかろう。また、大江氏自身が初期作品のテーマを「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが一貫した僕の主題でした」²と説明したように、閉塞感が溢れる「監禁状態」は常に討論され、今までの研究はそのような解釈と説明のもとでなされてきたと見受けられる。

ところが、大江氏が述べた「壁」より柘植光彦が指摘したように、「檻」の方が適切であるという論点に賛同したい³。なぜなら、本作の内容によれば、「監禁」という行動は単一なものではなく、何人かの人物によっていくつか異なるサイズの「檻」が作り上げられ、閉じ込められた側と圧力を施した側に分けて実行されたとうかがえる。その中で、人物の力関係の推移次第で、それぞれの立場が変わり、最初に優位に立っていた人物もどんどん受動的に回される場合が多いと言える。そして、最後はどちらも絶望の結末を迎えたことから見れば、「監禁状

¹ 荒正人「『奇妙な仕事』を推す一五月祭賞選後評」『国文学 解釈と鑑賞第452巻』（至文堂、1971年）125頁。（初出『東京大学新聞』1957年5月22日号）

² 大江健三郎『死者の奢り』（文芸春秋新社、1958年）302頁。

³ 柘植光彦「大江健三郎—戦後世代の文学のキーノート—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』（有精堂、1974年）217頁。（初出『国文学 解釈と鑑賞 1969年9月号』）

態」の脱出は叶わず、希望を見失っていたと捉えられる。そうした多重的な「檻」はなぜ成立できるのか、本当に絶望しかないのかといった疑問を解明するために、前章で説明した本作の背景となる「戦後世代」のイメージと合わせながら考察する必要がある。そこで、登場人物の力関係の構図を通して、「奇妙な仕事」で描かれた絶望と希望の全貌を覗いていきたい。

2. 登場人物の力関係について

さて、「奇妙な仕事」における力関係の分析を始める前に、先に登場人物たちの性質について紹介しておきたい。この作品を読み始めると、最初に目に映ったのはアルバイトを申し込んだ主人公「僕」、「女子学生」と「私大生」の三人であるが、どちらも固有名詞で命名されておらず、勝又浩が指摘したように「所謂リアリズム小説の範疇では珍しいこんな人物たちの呼び方も、この小説の新鮮な要素のひとつとしてうつつにいたらしい」⁴。その後に出番が多かった「犬殺し」も名前が一度も現れず、最後まで役職名で通している。勝又氏はこの代名詞を使用する意図に疑問を持ちながら、一応「女子学生」は戦後新時代の反映であり、「私大生」は戦前の官学・私学構造の体现であると指摘する一方、その主人公である「僕」が「東大生」の象徴として広く当時の世間に受け入れられたという考えには不足が感じられ、「日本の時計塔」である「東大」の特別性について更なる描写を要すると語っている。上記の氏の論説はまだ精確に三人が代表する内面を捉えきれないものの、それぞれが「戦後世代」の異なる側面を的確に見出したと言えよう。

続いて、この代名詞を使用する仕組みを解明するため、一旦時代背景と作家自身の文脈から離れ、言語学における「命名論」を用いて分析していきたい。命名に関しては以下の二つの論説でそのメカニズムがうかがえる。まず、森岡健二と山口仲美が提出した論点とは次のようなものである。

所属する範疇を示すはたらきを表示力（示差性）、そのものの特徴を理解させるはたらきを表現力（表意性）と呼ぶとすれば、命名と同時に大量の名

⁴ 勝又浩「作家の発期と文学活動—大江健三郎」『国文学 解釈と鑑賞 第43巻12号』（至文堂、1978年）99頁。

がこの二つのはたらきをもつということは、やはり不思議な現象と言わなければならない。⁵



そして、吉村公宏は下記のように指摘していた。

表現性はそのもの独自の個性的側面を強調する機能、表示性はそのものの所属先カテゴリーを明示する機能と捉えた。この両者は命名の指示機能的側面において、相反するベクトルを持つものと特徴づけることができる。

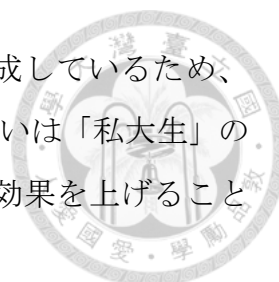
6

二つの引用から見れば分かるように、命名の指示機能は特徴を示し、区別する表現性と所属関係を表す表示性が含んでいる。つまり、命名という過程を通して、言語の概念内容に形式を指示してから、その名前が表現性と表示性を所持するようになったのである。どのような普通名詞も本来、最初に命名した時点では一つの固有名詞であり、標識機能＝表現性と所属関係の機能＝表示性を内包している指示機能を持つ言葉であったが、言語表現の増加に連れ、新しい概念に対しては既存の語彙から内容が近い要素を排列、合成、借用するようになり、そうした基礎を踏まえた今の固有名詞は比較的に新しい語彙と考えられる。そのため、今の固有名詞（この場合は人名）は指示機能がないのではなく、既存の普通名詞の指示機能に繋がっていると推測できる。

上述した命名の指示機能を取り入れて考えれば、自身を指示する一人称代名詞の「僕」、特徴を示す「女子学生」、職業の所属関係を強調している「私大生」と「犬殺し」、この四者とも個人を指す名前としての指示機能を完全に備えておらず、名づけの過程を経ていないと言える。戦後社会全体に溢れる閉塞感を読者に伝えるため、個人を特定できるような名前を取らず、全部職業もしくは社会地位の名詞で表現するのは、社会の各階層の実情、（特に「戦後世代」と「戦中世代」が社会に置かれた立場の相違）を読者により実感してほしいという作為が感じられる。言い換えれば、こうした名詞の指示機能は一個人ではなく、社会にあ

⁵ 森岡健二・山口仲美『命名の言語学 ネーミングの諸相』（東海大学出版会、1985年）27頁。

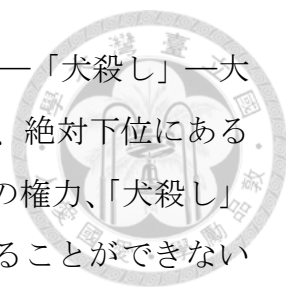
⁶ 吉村公宏『認知意味論の方法 経験と動機の言語学』（人文書院、1995年）202頁。



る一部の人間という言語内容に対する言語形式のはたらきを成しているため、読者は時に主人公「僕」の視点に、時に「女子学生」か、あるいは「私大生」の立場に移ることができ、多方面にわたって共感と自省を促す効果を上げることができるのである。

このような解析と合わせて戦後社会の状況を取り入れて考えると、代名詞で登場する人物たちは個人を指示したわけではなく、当時生息する人々を何かの基準で分類した上での象徴性を持つと思われる。それによって勝又氏が論じた単純な時代性の分け方より、更に細かい意義を帯びるものと推論できる。この点に関しては後ほどで討論するつもりが、その前の準備として作品全体の力関係の構図を検討してみよう。

本作の主な登場人物は前述した大学生三人と「犬殺し」のほか、また殺された犬たち、病院の事務員や看護婦、そして最後に事件を暴いた警官と逃亡した詐欺犯の「肉ブローカー」がいる。その人物たちの関係を権力構造を通して紐解いていくと、いくつの「檻」＝「監禁状態」の現象を発見できる。本作のテーマになった犬殺しの事件は一つ目の「檻」であり、大学の付属病院で行われる実験のために、「コンクリートの低い塀に囲まれた」（10 頁）犬置き場に飼い馴らされた多種多様な犬たちは言うまでもなく、「監禁」された絶対的な弱者として描写されていた。東京大学と思わせるこの大学の付属病院は飼い主でありながら、予算削減という理由で全員殺すと決めた。この時点で、病院と犬の上下関係を確認できた。しかし病院側はあくまでも無関係の姿勢を維持し、自らの手で処理しようと思わずに専門的な「犬殺し」に全ての責任を委ねた。この仕事を請け負った中年男子は後に犬の肉を肉屋へ売り込んだ「肉ブローカー」と判明され、また「犬殺し」を雇った人でもある。「犬殺し」はもちろん犬に直接に暴力を振った人間であり、犬の上位に立つが、その上にはさらに雇い主の「肉ブローカー」がおり、利益関係で結びつく病院がいる。この一連の関係性は犬を殺すという行為にまつわる権力構造を表しており、病院と「監禁」された犬たちの間に、「肉ブローカー」との商業関係および雇用関係に縛られる「犬殺し」が存在し、二、三重の上下関係が組み込まれていた。三人の大学生はそういう犬と「犬殺し」の中間に置かれているが、それぞれの反応はまた彼らが生息している社会に存在する権力の影響力と関わっている。

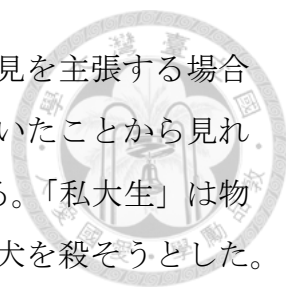


つまるところ、病院（事務員と看護婦）—「肉ブローカー」—「犬殺し」—大学生たち—犬というような上下関係が本作で構成されており、絶対下位にある弱者の犬たちは病院に「監禁」された同時に、「肉ブローカー」の権力、「犬殺し」の暴力と学生たちの欺瞞を受け、全面的な責任を誰にも訴えることができない状態に陥っていた。複数の責任者による多重的な「監禁状態」、これは戦時体制の権力構造と非常に相似しており、ひとつの共犯構造を成したと言えよう。同じく、大学生たちが感じた絶望と「無気力」もこうした「監禁状況」の中で潜んでいるものであり、その上、自身は被害者であると同時に、加害者でもあるため、外力＝警官による解放に対しても無力なままだとうかがえる。続いてはこうして監禁された人物たちの心情の変化を更に深く解析し、それに加え、作家の創作動機についても明らかにしていきたい。

3. 「敗北」に絶望する若者たち

大江氏を始め、「戦後世代」の問題意識については前章で考察した結果、「奇妙な仕事」の執筆背景と大分重なっていることが明らかになった。若い大学生作家が出くわした昭和三十年代（1955—1965年）の急変の状況、アメリカ基地拡張という強権に対する抗争を本作の時代設定と見做せば、年齢的に「戦後世代」に属する人物は三人の大学生だと推定できよう。前述のように、もし登場人物たちが個人の枠を越え、当時の社会における人々の特徴を象徴するというのなら、それぞれ設計された概念を検討する必要がある。この意味において、「戦後世代」の三人はもっとも作家の大江氏に近い視点を持ち、「犬を殺す」という暴力的な事件をめぐって、三者三様の反応は当時大学生たちの実態を表していると考えられ、「監禁状態」を考察するにあたり、先に取り上げなければならないところであろう。また、一人称主人公「僕」が語り手の役割を担ったため、対照的に配置された同年齢の二人と相まって、彼らの反応を通してしか観察されない「犬殺し」、「肉ブローカー」などの人物についても三人の位置を理解した上で分析を行うべきである。従って、本節では「戦後世代」に属する人物を中心に、「あいまいな僕ら、僕ら日本の学生」（10頁）と比喻された最下位にいる弱者の犬たちと比較を試みたい。

ところで、同じく「戦後世代」とはいえ、三人の大学生を同一枠で語るのはい



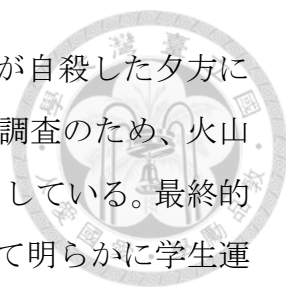
ささか違和感を覚える。実際作中で「私大生」は特に自分の意見を主張する場合が多く、「僕」と「女子学生」に「もてあま」（14 頁）されていたことから見れば、彼は二人と同じ陣営に立っているわけではなさそうである。「私大生」は物語の中盤にて「犬殺し」に自分の正しさを証明するために自ら犬を殺そうとした。このくだりを読むと、やはり彼は「戦後世代」の裏面を成しており、「戦中世代」の「犬殺し」と比較したほうが適切であろう。それに比べ、残りの主人公「僕」と「女子学生」の性格と態度は「戦後世代」の問題意識を正面から反映し、本作主要な視点として働いたとうかがえる。こうして考えれば、この二人を分析のもとと設定したほうがよいと思われる。しかし、主人公「僕」については勝又氏の説通りに、「東大生」と見做すことができるとしても、もう一人の「女子学生」は一体どういう人たちを象徴するのか。これに関して、大江氏は彼女のモデルを次のように説明していた。

僕が大学に入った昭和二十九年（一九五四）年は、学生運動が大きな停滞期に入った時でした。大学に入って初めて読んだ学生掲示板には、東大の民青の人たちの声明で、お茶の水女子大学の学生が一人自殺したという文章があった。彼女は、学生運動の中のひずみに苦しんで、死んだといわれている。けれども、それは権力が殺したのだ、という感じのものでした。

僕は十九歳でした。そして、同年代の人間が、しかも女子学生が自分の思想運動のために自殺するということに不快ショックを受けたのです。『火山』という小説のテーマもそれだし、その死んだ女子学生が生きていれば『奇妙な仕事』に出て来るようなかんじだろうと、それを書こうと思った。⁷

ここで語られたように、「女子学生」のモデルは学生運動にて自殺したお茶の水女子大学の学生であり、大江氏が彼女の自殺をめぐる事件において捉えた特質は「権力との対抗および犠牲」というべきであろう。「火山」も氏が東京大学在籍中に創作した小説であるが、初めて出版された作品は「奇妙な仕事」であった。「火山」のあらすじを少々紹介すると次のようになる。主人公「僕」が夏の

⁷ 大江健三郎・すばる編集部『大江健三郎・再発見』（集英社、2001年）55—56頁。

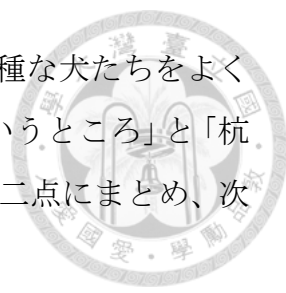


火山を訪ねる夢を持ち、学生運動家である従姉の「女子学生」が自殺した夕方に S 火山を目指す、そこは外国人兵士団に占領され、新物質の調査のため、火山の人工噴火が画策されており、農民たちがそれを阻止しようとしている。最終的にはやはり徒労になり、「僕」は登山を諦めて帰った。こうして明らかに学生運動と砂川基地反対闘争の事情に基づく作品における S 火山のイメージは権力に奪われるもののモチーフとしてしっかりと「奇妙な仕事」作中の「女子学生」の「火山」の夢という目的に受容され、設定の継承がそこに見られる。しかし、権力との対抗者のはずの「女子学生」はなぜ、犬殺しという暴力的なアルバイトを引き受けたのであろうか。それに、「東大生」の「僕」がこのような仕事の情報を聞きつけた時から、抵抗感と裏腹に、「犬の声は濡れた布のようにしっかり僕の身にまといつき、僕の生活に入りこんできたのだ」(9 頁)と述べ、強い興味を示した理由も同じく未解決と感じられる。それを解明するため、続いてはこの二人の性格の描写から探り、彼らの心情変化に注目してみよう。

3.1. 「僕」の怒りと「犬」に対する期待

物語の冒頭で、主人公の「僕」は附属病院の犬たちに対して「深い興味を持っていたわけではな」(9 頁)いと語ったが、確かに「心の隅で吠え声に期待していた」(9 頁)とも認めていた。そして、犬殺しのアルバイト募集の情報が揭示された以後、この感覚が大きくなり、犬たちの吠え声が彼の生活から離れなくなるようになった。「僕」がこの仕事をやろうとした理由はもちろん給料、つまり「ペイ」による生活の支援と直接に関連しているに相違ないが、ただそれのみで一度病院の受付に無関係と知らされながら、守衛に「しつこく訊ねて」(9 頁)裏の倉庫までへ入ってしまい、ここまでに「奇妙な」仕事を受けるほど強烈な確執を持つとは想像しにくい。「女子学生」と違い、大金がかかるような計画や得られるほかの実利がなかった彼は結局、自分の生活以外に、犬たちの境遇に好奇心が芽生えたとしか解釈しようがない。では、「東大生」たる「僕」は一体実験用の犬たちに何を期待していただろうか。それに答えられる手掛かりはやはり物語が始まる前の本来の「僕」の性格にあると推察できよう。

この主人公の性格が初めて言及されたのは犬たちを直接に見た瞬間である。彼は「三百の脂色の曇りのある犬の眼に映っている三百の僕の小さいイメージ

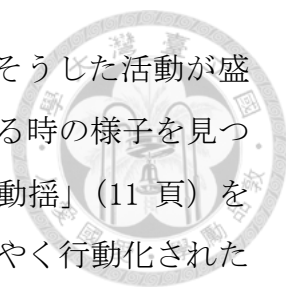


ユ」(10頁)を考え、小さい身震いを感じた後、雑然とした各種な犬たちをよく観察し、それらの共通点を「全部、けちな雑種で痩せているところ」と「杭につながれて敵意をすっかりなくしているところ」(10頁)の二点にまとめ、次のように自分と類比した。

僕らだってそういうことになるかもしれないぞ。すっかり敵意をなくして無気力につながれている、互いに似かよって、個性をなくした、あいまいな僕ら、僕ら日本の学生。しかし僕はあまり政治的な興味を持ってはいなかった。僕は政治をふくめてほとんどあらゆることに熱中するには若すぎるか年をとりすぎていた。僕は廿歳だった。僕は奇妙な年齢にいたし疲れすぎてもいた。僕は犬の群れにもすぐ興味をなくした。(10頁)

日本の学生の「あいまい」性とは、「戦後世代」のイメージを借りて説明すれば、つまり、「敗北」によって浮上したアイデンティティの喪失と死の恐怖と伴い、価値観が崩壊し、「不決断」に陥った状態である。ここで犬たちと日本の学生がなくした「敵意」と「個性」は「監禁」行為をした権力者に対し、抵抗できずに「無気力」になった弱者たちが自身の安全を脅えるものに「屈伏」し、同時に自我の意識を放棄したことを意味する。昭和三十年代(1955—1965年)の戦後社会において、強大なアメリカに支配される日本という構造は確かに存在しており、第一章でも説明したように、そうして力関係の再構築により、「屈伏感」と「解放感」が交じりあう「あいまい」なイメージが「戦後世代」の意識に潜んでいるのである。「僕」が雑多な犬たちに見出したのはまさにそうした「あいまい」な感覚であり、それらの眼に映っている自分のイメージに喪失の恐怖を呼び覚まされ、そこに学生たちが直面している閉塞的な社会現実と重なって見えたからこそ身震いを感じたのであろう。

ところが、その見解を示した後、彼はすぐ政治的なものに興味を持ちえず、「奇妙な年齢にいたし疲れすぎて」いたことを告白し、犬の群れを後にした。ここでいきなり犬たちの状況から「政治」の話に繋いで行くのはいささか唐突と否めないが、それを「僕」が最初から犬の吠え声に惹かれる原因にあたと推定すれば筋も通るのであろう。「東大生」である「僕」にとって、「政治的な」ことをたち

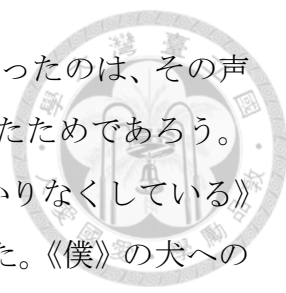


まちに連想したのはごく自然なことと感じられ、彼の周りはそうした活動が盛んに行われていると推測できる。その後、「犬殺し」が仕事する時の様子を見つめているうちに、「生あたたかい犬の血の臭いと特殊な感情の動揺」(11頁)を見せたこの青年は、「なんとという卑劣」と評したものの、「すばやく行動化された卑劣さは、すでに非難されるべきではない」(11頁)と考えた。その卑劣に対して憤慨しない理由を彼は以下のように弁明していた。

僕はあまり激しい怒りを感じない習慣になっていた。僕の疲れは日常的だったし、犬殺しの卑劣さに対しても怒りはふくれあがらなかった。怒りは育ちかけ、すぐ萎えた。僕は友人たちの学生運動に参加することができなかった。それは政治に興味を持たないこともあるが、結局、持続的な怒りを僕が持ちえなくなっているせいだった。僕はそのことを時々、ひどく苛立たしい感情で思ってもみるが、怒りを回復するためにはいつも疲れすぎていた。

(11頁)

引用のように、「僕」の友人たちは学生運動に励んでいるものの、彼はそれに参加することができないと自白した。その原因は日常的な疲れであり、怒りを孕む気力を持ち合わせていないと説いたが、今までの「僕」の行動を振り返ってみると、そのような感情を失ったわけでも、認識できないというわけでもないとうかがえる。興味がないと言いながら、彼が物事を判断する時の基準としてよく「政治」を取り上げる癖が見られ、また不平や不満、あるいは「犬の死」みたいな恐怖を思い出させる出来事に出会うと、真っ先に感情的な動揺を露呈するようになるのである。その揺らぎを「持続的な怒り」として昇華させずに、早くも疲れてしまうのはおそらく学生運動の失敗や挫折を傍観し、すでに失望しきったためであろう。こうして考えれば、最初から徒労の結末を予想し、疲労していた「東大生」は抵抗の動機を失い、権力によるあらゆる不合理な制圧に対抗の姿勢を構えない「戦後世代」の肖像として描出されていた。このように、戦後の新旧権力体制の移行と共存によって発生した閉塞的な状況の中から積極的に脱出することを諦めかけた「僕」は最初の犬の吠え声に「政治的」な意味を見込んだのであろう。この点に関して、村瀬良子は次のように論じていた。



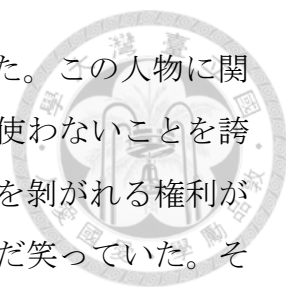
アルバイトを引き受けることで《僕》が犬に接近していったのは、その声が《僕》の失いかけている《怒り》の声として聞こえてきたためであろう。しかし、犬殺しの現場で対面した犬たちは、《敵意をすっかりなくしている》つまらないもの、《僕》の現状のアナロジーでしかなかった。《僕》の犬への興味はたちまちにして失われ、《僕》は再びもとの不充足に陥る。⁸

吠え声は「僕」の怒りを表せるものとして期待され、そして「僕」と「女子学生」が「閉塞状況」を打破する論理の不可能性を悟り、感情的な不充足を補おうとしていると村瀬氏が論点を繰り広げたが、「犬殺し」に出会う前に失ったこの憤慨は誰に対するものなのかについては触れなかった。前に言及した昭和三十年代（1955—1965年）の時代背景を踏まえて考えれば、学生運動などを含め、日本の政治現実がこの「戦後世代」の状況の把握に有効な対象になると言っても過言ではなからう。しかし、彼が犬たちの吠え声に望んでいたのはただ感情の解放だけとは考えにくい。怒りを順当に発散できるというのなら、彼が本当に求めたかった「監禁状態」から脱出する出口もそこにあると予想されていたのであろう。つまり、吠え声は現状から離れる希望の手掛かりになるはずであったが、犬たちの「あいまい」な実態を目にした「僕」は再び「戦後世代」の絶望に引き戻されてしまう。

3.2. 「僕」と「女子学生」の絶望および徒労

その後、絶望したままの彼は自身の本当の感情を隠し、事件に会うたびに笑い飛ばすなど、誤魔化そうとした。例えば、スピッツとセパードの混血という不思議な犬を見つけ、「おかしさが虫のように体中を走りまわった」（10頁）故に、「あいまい」な中型犬の滑稽さを笑って「私大生」に話した。自分の「あいまい」さを最初から犬たちに見出した彼は混血の両義性を本気で嘲笑しているはずがない。前章に提起した大江氏の「アイロニー」の創作方法を思い出せば、ここはどちらかと言えば自嘲的な態度と捉えたほうが適切であろう。それを向き合えなかった「私大生」は顔を背けたが、彼は犬を心から思ったわけではなく、むしろ

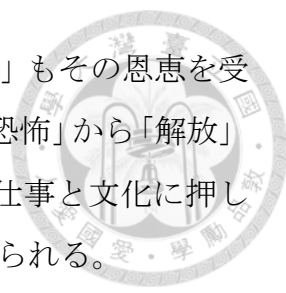
⁸ 村瀬良子「大江健三郎の出発点：『奇妙な仕事』の《監禁》状態」『近代文学試論』（広島大学近代文学研究会、1995年）54頁。



ろ自分のアイデンティティーを損なわれぬように動き始めた。この人物に関するさらなる解析は次節に譲る。ほかにも、「犬殺し」が毒を使わないことを誇るどころに、「犬には良い匂いをたてて、湯気をあげながら皮を剥がれる権利があるとは思わないか」(11 頁) という問いに対し、「僕」はただ笑っていた。その笑いがどのような気持ちで行われていたものかは描かれていなかったが、これまで「犬殺し」に「毒を?」、「そうだろうなあ」などの味気ない言葉でしか返事していなかったことを考慮すれば、とても本心由来の笑い方とは思えない。

このような状態が続き、次に「女子学生」との交流でも笑いについて意見を交わしていた。「女子学生」の性格もここでの会話で描写されていたので、両者の共通点と相違点を同時にまとめていきたい。「犬殺し」の卑劣な行為を見た二人はその行動の原理を討論し始めた。前にも言及したように、「犬殺し」の殺し方を「息がつまるほど卑劣なやりかた」(10 頁) と「僕」は形容したが、「それは生活意識の根底で極めて場所を得ている卑劣さ」(11 頁) であり、「すでに非難されるべきではない」(11 頁) と思った故、いつも疲れすぎている「僕」が募った怒りをすぐ失った。こうした評価に対し、アルバイト仲間の一人の「女子学生」は「犬殺し」を「伝統意識のようなもの」(12 頁) を持つ男と称し、棒で殺すことを生活の意味として誇りに持っていると言ったが、そのような文化意識、特に犬殺しの文化は淫売の文化と会社重役の文化と並んで、汚らしい方だと批判している。それに応じて、「僕」は「ひどく絶望したものだな」(12 頁) と返した。それを聞いて、「絶望しているわけでもないのよ」(12 頁) という「女子学生」の返事に彼女が脚気を患っており、その新薬を飲む動機が発見される。それで、「その厭らしい文化に足をつっこもうとしているの?」と「僕」が質問すると、彼女は「もうみんな首までとっぷりつかっているのよ」(12 頁) と答えた。

「女子学生」は「戦後世代」の絶望が「伝統意識」というものに根付いていると気づき、それは昔から続いていた権力体制のもとに正当化された汚らしい非道徳的な意識であると精確に捉えながら、自分たちの世代も皆とつとつにその厭らしい文化の中にいると説いた。「僕」は脱出できないことに絶望しているが、「女子学生」は自身が「監禁」の世界に属していると認めた上で、そこから金や薬などの実利をもらい、閉塞的な社会に依存しているとうかがえる。脚気はビタミン欠乏による栄養障害であり、1950 年代以来で新薬の生産のおかげで、戦



後の食糧不足の問題から患者を減らし続けてきた⁹。「女子学生」もその恩恵を受けた一人であり、病院という大きな組織の権力に病気の「死の恐怖」から「解放」される感覚を味わうこととなったが、それと同時に不合理な仕事と文化に押し付けられ、「屈伏」する「あいまい」な状態に落ちたと見受けられる。

しかし、彼女はもともと学生運動の犠牲者であり、権力の対抗者の一人であることを忘れてはいけない。そのような「女子学生」は「戦後世代」の絶望を理解した上で、いくつの対策を密かに考えないはずがなかった。薬はいずれ健康を回復させるための手段と見なせば、その「屈伏」は新しい戦後の権力＝病院の手を借りて、古い戦時体制と「敗北」がもたらした栄養問題＝死の恐怖に対抗する方法と言えよう。同じく、喪失したアイデンティティーも回復を図られていたと考えられる。前述したペイをもらったら貯金を使って「火山」を見に行く夢がそれであり、次のように「笑い」と共に連結された。

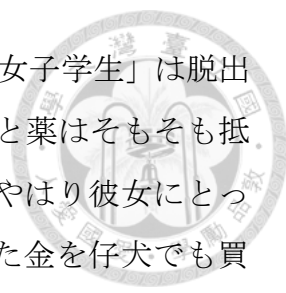
火山はおかしいなあ、と女子学生はいい、静かな声で笑った。彼女は疲れきった目をしていて。水に両掌をひたしたまま彼女は空を見あげていた。

君はあまり笑わないね、と僕はいった。

ええ、私のような性格だと笑うことはあまりないのよ。子供の時だって笑わなかったわ。それで、時々、笑いかたを忘れたような気がするよね、火山のことを考えて涙を流して笑ったわ。大きい山のまん中に穴があいてそこからむくむく煙が出ているなんて、おかしいなあ。女子学生は肩を波うたせて笑った。(12頁)

子供の頃から笑わないのは戦時中の圧力もあるだろう。笑い方を忘れかけた「女子学生」は人間であることの証明、すなわち感情の表現が欠落しており、自分を正しく認識するためのアイデンティティーを損なっていると論じられる。それを回復するため、彼女は権力に奪われた「火山」に向かうという危険な「冒険」を計画し、自分の笑顔＝自己認識を取り戻そうとした。それはある意味では「監禁状態」からの脱出であり、自分を見極めるための行動と見做してよいので

⁹ 山下政三『鷗外森林太郎と脚気紛争』（日本評論社、2008年）459—460頁。



あろう。「僕」と同じく「戦後世代」の絶望に縛られながら、「女子学生」は脱出する道をすでに考案していた。しかし、その手段にあたるペイと菓はそもそも抵抗すべき相手である権力者から譲り受けたものという点を、やはり彼女にとっては自身の厭らしさとして認めざるを得ないようで、もらった金を仔犬でも買おうと言った「僕」の言葉に「私たちはとても厭らしいわ」（13頁）と再び嘆いた。

ここでも二人の相違が見られる。犬の怨みを背負う仔犬を養うと笑って言った「僕」であるが、その笑いにはもう一回自嘲的な態度で、犬を殺す罪と絶望を償っていきたい意志があると捉えられる。それに対し、「女子学生」の嘆きは犬に対する同情および自分の汚らしい状況から発するものである故に、黙り込んでいた。彼女の笑いは自分のアイデンティティーを回復する方法というのなら、「自己欺瞞」の卑劣さを示すかもしれない現状は当然笑えるはずがなかった。「戦後世代」の「あいまい」的な両義性がこうして二人の行動を通して表現され、「屈伏」しながら「解放」を味わいつつある状況で「僕」は絶望に陥り、苦笑いに近い自嘲で感情を隠した。それに対し、「女子学生」は絶望を認めながら、そこからの脱出を試みたが、本当に成功できるかどうかも分からず、自分の現在の行いに対して罪悪感を覚えていた。どちらも権力者に対して無力ではあるが、どちらも納得して受け入れたとも言えないのであろう。

その後、「僕」はとうとう誤魔化しきれず、その怒りを二度も表に出してしまった。一回目は「私大生」が犬を殺し損ない、瀕死の重傷を負わせながら、息の根を止めるのをためらった時に、「僕」が駆けて行き、犬を苦しませないように殺した時である。そこで「私大生」はその行為を「卑怯」と批判し、無抵抗な犬の味方のような態度を取り、「僕」を怒らせたのである。怒りが喉をつまらせた「僕」は後を向き、犬の首から運び紐を外し、「私大生に興味を持っていなかった」（16頁）と自分に言い聞かせるように強調し、「私大生」の言葉をあえて無視した。そして二度目の怒りは無視した後まもなく、暴れ出した赤犬を鎮めようとしたが、逆に噛まれ、看護婦の治療を受けた時に恐水病に患う恐れがあるため、予防注射の費用を要求された件である。注射しないと死ぬ可能性もあるので、「僕」はそれを知り、「ひどく落ち込んでしまったな」（17頁）と呻き、「何を考えている」と聞かれたら、「犬の歯並みのことさ」と「僕」は怒って答えた。今

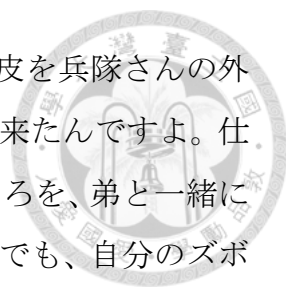
まで不平や不満を耐えてきた「僕」がこの二回の憤りを隠せなくなったのは理由がある。

もちろんたまってきたストレスも原因の一つだろうが、この二回の怒りには特別な状況に見舞われており、彼の力関係の変動に直接に繋がっている。「私大生」と対立した場合、「僕」は初めて批判され、しかも「卑劣」のタグに付けられ、「戦後世代」として下位の位置に納められた。言い換えれば、「私大生」は犬の死を通して「僕」の上に立つことを企み、その真の意図で犬と「僕」を軽んじていた。そして恐水病の件で主人公の「僕」は再び「死の恐怖」に襲われ、犬と同格ところが、犬に殺される更なる犠牲者の立場に陥った。まとめて言うと、この二件は「東大生」である彼を「戦後世代」の問題意識に直面させ、力関係における弱いところに追い込み、さらに絶望的な結末＝すべての喪失を押し付けてしまった。

「女子学生」はこのような状況に出会わなかったものの、最後警察の介入により、アルバイトが徒労に終わり、「僕らは犬を殺すつもりだったろう、とあいまいな声で僕はいった。ところが殺されるのは僕らの方だ」(18頁)という風に「僕」が嘆いた時に、彼女は眉をしかめ、声だけ笑った。ここで二人共に疲れきって起こした笑いはどちらも喪失の絶望の現れであろう。この笑いを苦く感じるように、今までは犬を殺すことで弱者の上位に立っているつもりでいたが、実際権力者の共犯となった「戦後世代」は責任を追及され、外力による強権という更なる大きな「檻」に閉じ込められ、アイデンティティーの揺れで彼らは再び「敗北」を喫した。

3.3. 犬が象徴する「性的」な問題

さて、「戦後世代」の二人の絶望を解明したが、なぜ「犬」に類推する必要があるだろうかまだ疑問が残っている。ほかの動物ではなく、大江氏は「犬」に何かを託していたように感じられる。この件に関して、実は作家の子供時代と深く関わっているのである。かつて大江氏は「奇妙な仕事」の発想を顧みた時に、東京大学の病院に入院していた友達が犬の吠え声を聴いた経験談を取り上げた以外に、実際にあった犬殺しの事件を次のように回顧した。



『奇妙な仕事』についていえば、僕が子供の時、「犬の皮を兵隊さんの外套にする」と、近在の犬を全部殺した男が、村にもやって来たんですよ。仕事の中休みの時、犬を殺すおじさんが飯を食っているところを、弟と一緒に見に行ったんです。その人は「猛烈に強い犬は、雌でも雄でも、自分のズボンの中に手を入れて、性器の臭いを手にくっつけてその犬にかがせれば、大人しくなるんだ」と僕たちにいった。僕はまだ七、八歳でしたが、「性的な問題は大きいもんだ」と思ったんですよ。とくに、人間の性的なものが、犬の性的なものと続いているというのが、強いショックでした。そのことが記憶にあって小説に書いた。そこはうまく書けていると思うんですが。¹⁰（下線は筆者による。）

「犬」の死はそもそも兵隊のために行われたのであり、いわば戦争の犠牲者のイメージを催す。本作における犬殺しの事件は病院の予算の都合によるものであるが、同じく、権力に殺されたと言えよう。そして、「戦後世代」の問題意識を振り返れば分かるように、戦争がもたらした「死の恐怖」が「犬」を通して根深く大江氏の心についていたと考えられる。そのような権力に抵抗できず、おとなしくなった「犬」たちは下線部が示したように、「性的」な問題に結び付く存在としてここで提起されている。59年に発表された長編小説『われらの時代』以後、大江氏は「戦後世代」の問題をさらに広げ、「性的人間」と「政治的人間」の二種類の人間に分ける論点を掲げ、性的なイメージを盛んに使用するようになったことから見れば、「犬」は最も早い段階で大江文学において「性的」な問題として語られている。大江氏のこうした発言は各種な議論を招き、これまで多方面から討論され、その中で、柘植氏は次のようにまとめていた。

五七～六二年までを、かりに、“偏光グラス”の時期としよう。つまり「奇妙な仕事」から「われらの時代」「セヴンティーン」を経て「叫び声」にいたる期間である。この時期の大江は、次のようなベクトルで人間をふるいわけた。

¹⁰ 大江健三郎・すばる編集部『大江健三郎・再発見』（集英社、2001年）56—57頁。



A 性的＝個人的＝牝的

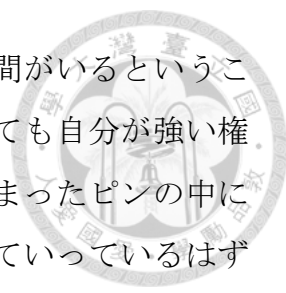
B 政治的＝社会的＝牡的

そしてさらに、現代日本という大状況が、アメリカという強者（＝牡）に押えつけた弱者（＝牝）の状況であるゆえに、この国の内部ではBのタイプに到達することは不可能であり、むしろBのタイプに近づこうとすればするほど、逆にAのタイプに組みこまれてしまうというパラドックスを立てた。真にBのタイプになるためには、「ここより他の場所」へ、たとえば“アフリカ”へ脱出しなければならない。そして現実には脱出が困難である以上、Bのタイプの獲得をめざす試みはすべて挫折する……という図式だった。いわば典型的な、一九五〇年代的発想だったと言える。¹¹

引用のように、「性」と「政治」が「個人」と「社会」の対置に置かれており、さらに言えば、「弱者」と「強者」、「受動的」と「能動的」、および「下位」と「上位」という力関係で解釈できる。当時の日本社会で人は「政治」的になろうとすればするほど、「性的人間」の枠に取り込まれてしまう。「私大生」と「犬殺し」はまさにそういう実例であり、次節で詳しく論じたい。その状況から脱出するために、行くしかない「他の場所」は本作において「火山」の役割であり、「女子学生」が失敗するように、実現できるはずがなかった。この意味において、受動的な「戦後世代」の「女子学生」と主人公「僕」はストーリーの中で「性的人間」の性質を発揮していたと言えよう。

話を戻るが、「犬」の場合から見れば、吠え声もたらす「政治的」な期待は「性的」ではないものの、間違いなく「監禁」された「犬」たちの実態は弱者としての「性的」状況を表していたのであろう。この「性的」なイメージが討論されたのはそもそも「戦後世代」の問題意識を解決するためであり、「犬」の回想でも触れていたように、戦争と死の恐怖がその背後の中心を占めているとうかがえる。そして、それは権力と深く関係していると、大江氏の次のような発言から理解できる。

¹¹ 柘植光彦「大江健三郎・主要作品の分析—性的人間」『国文学 解釈と鑑賞第452巻』（至文堂、1971年）108頁。



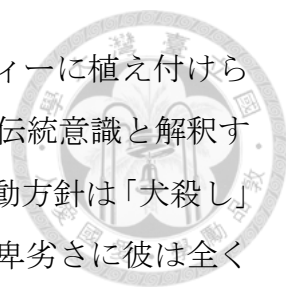
大きい権力があって、それを突破できないところの人間がいるということが根本の形だと思っんですね。ぼくはたとえば幻にしても自分が強い権力に参加することができるとは思えないんです。栓の詰まったピンの中に人間がいて、そういう人間の自己認識もだんだん衰弱していつているはずなんです。それをもう一度揺り起こして、非常に強いものというか、激しいものも発掘したい。その小説のモチーフに性的なものが契機になるとおもうのです。¹²

第一章から論及した通り、「敗北」によって浮かび上がった喪失の感覚、それと共に生じた「あいまい」なイメージはその世代の絶望の内実であり、権力体制と抵抗することはそこから脱出するために唯一の道となった。そうした論点に合わせて整理してみれば、この「性」と「政治」の対比は結局権力がもたらした絶望に対して、人々が採った各種な反応の解説と言えよう。従って、本作において「犬」が担った役割は「性的」な無力な象徴であり、日本の学生たちの暗い未来を暗示し、「戦後世代」に刺激を与え、権力と対抗できる「政治的」な「吠え声」がそこに望まれていると結論付けられよう。

4. 特権階級と「戦中世代」の「卑劣的な英雄意識」

さて、前節で「戦後世代」の二人である「僕」と「女子学生」および「犬」の象徴を考察したが、主要人物の「私大生」と「犬殺し」についてはまだはっきりされていない。「戦後世代」は物語が始まる時点で大学生であることを確認できれば、三十歳ぐらいの「犬殺し」は間違いなく前の世代、つまり「戦中世代」の人間であり、かつて戦場にも出たと推論できよう。作中に彼が犬に対する殺し方の拘りや二人の大学生が討論した文化意識などを読むと、この「犬殺し」は第一章で取り上げたインタビューで大江氏に提起され、戦後自分の武勇伝をあちこちに広めた元兵士たち、もしくは暴力を持って学校を支配した予科練くずれたちと一部が重なって見える。また、前に触れた実際戦中に発生した犬を殺す事件から考えると、「犬殺し」は戦時体制の権力者の召使いのイメージと結びつくこ

¹² 大江健三郎「大江健三郎に聞く 戦後世代の心情と論理」『国文学 解釈と鑑賞第 452 巻』（至文堂、1971 年）17 頁。




とができる。戦時の天皇制によって皇国民のアイデンティティーに植え付けられ、戦場で国家の英雄になろうとした価値観を「戦中世代」の伝統意識と解釈すれば、それを保ちながら、自分の生存価値として守り続けた行動方針は「犬殺し」も同様である。その上、「僕」が言った生活の中に溶け込んだ卑劣さに彼は全く気付いていない、あるいは気にしていない。換言すれば、戦争行為が過去の国家と英雄意識によって正当化された「戦中世代」のように、「犬殺し」にとって「騙し殺し」の卑劣さも当然に理由つけられ、根付いていると考えられよう。「戦後世代」の「僕」と「女子学生」はその卑劣さを理解していても、自身の英雄と卑劣のモラル基準を確かめる術を持ち合わせていない彼らは消極的に絶望するほかなかった。

一方、もう一人年齢近いアルバイト仲間の「私大生」は激しく反発し、恥知らずなことだと指摘したものの、「犬殺し」に言い負かされ、結局耐え切れず犬を打ち殺して見せようとしたが、殺し損なって失敗した。この「私大生」の設定はとても特別な視点を提供してくれた。政治に失望しきった「僕」と完全に相反する「私大生」は言うまでもなく同じく「戦後世代」の人間であり、一見理想的な正義を持っているが、彼は自身の激動の理由を二回の「やりきれない」感情（犬らのどうにもならない状態および自分が辞めたら引き受けた人への責任）と弁解した。要するに、「私大生」は絶望的な状況を納得できないにもかかわらず、対処する手段も持たないまま、結局自分の正しさが認められるために卑劣なことを行うようになった。この人物のイメージについては、大江氏が次のように説明していた。

僕が育った地方で旧制の中学は、松山中学が公立、そして一つ、私立中学があった。その私立中学には、入学金が高くて入れないという印象があった。実際には、僕が進学する際は新制中学、高校ができていたのですが、松中は名門だし、僕の心の中には、私立は特権階級の学校という印象があった。それで、東大生の「僕」と、私立大学の学生とを対置したわけです。そうしたら、あまり尊敬できない学生のことを「私大生」と呼んで小説に書いたと、

こちらの特権意識を指摘されました。¹³



特権階級の象徴と造形された「私大生」は「戦後世代」の一員であるが、彼は決して大江氏たちのように権力体制と抵抗しつづけ、民主主義の思想を信じていた人ではない。同世代の人たちと同じく自身のアイデンティティを確定できないものの、彼は特権意識を持ち、常に上からの目線を持っており、むしろ強権に近い位置に立っていると推知できる。「犬殺し」の件で卑劣であることを否定しようとした「私大生」は、言い換えれば、英雄的になろうという意欲があるとも読み取れる。彼はこのアルバイトの内容を知った時点で放棄する選択肢が残されていた以上、続ける時に犬に対して相応な責任を負わないといけない。それなのにうまい口上で歪な信念を罷り通ろうとし、あまつさえ「犬殺し」に証明するために犬を殺そうという行動を取ったのはもう単純に犬の尊厳を保つより自身の優位性を守ろうとしたものだと思える。そのような「私大生」の行動について、村上克尚は次のように指摘していた。

「僕」や女子学生からすれば、私大生の「ユマニズム」もまた、犬の殺害を正当化するための「文化意識」にしか映らない。(中略) 真に問われるべきなのは、彼らの「殺される側」への想像力の完全な欠如であるはずだ。実際、私大生は自分の手で、犬殺しとの近さを証明してしまうことになる。¹⁴

村上氏の分析の通り、「犬殺し」と「私大生」は「殺される側」の犬の視点を完全に無視し、絶対的受動的な弱者を下位に置くことで自分の位置を向上させた。満たされない英雄的な意図は「私大生」自身のための正義として表しているならば、弱者の救世主としての優越感は自己嫌悪で同じく「自己欺瞞」していた「犬殺し」の卑劣さを否定するしかなくなるのであろう。当然、「私大生」が堅持していたヒューマニズムも、「犬殺し」が拘っていた犬の死に方も討論する余地があるが、本作で問題になったのはむしろ結果的にその思想が彼ら自身の行

¹³ 大江健三郎・すばる編集部『大江健三郎・再発見』（集英社、2001年）56頁。

¹⁴ 村上克尚「動物とファシズム——大江健三郎「奇妙な仕事」論」『日本近代文学』第79集（日本近代文学会、2008年）115頁。

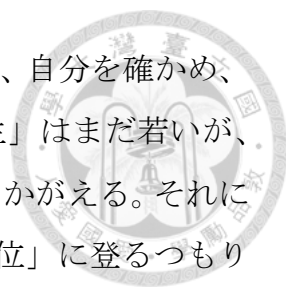
動を正当化し、卑劣的な自分の罪悪感を払拭するための言い訳となったことにある。

自分のアイデンティティーを確定できない「私大生」は弱者の救世主になろうとしたが、「戦中世代」の「犬殺し」のアイデンティティーは伝統意識に根付いたもので、それを守るために動いたにすぎなかった。結局両者は自分の存在価値を損なわれないように権力を握ろうとした点において同様であった。こうして彼らは英雄的欠落による自己価値低下の絶望から脱出しようとしながら、上下関係を確固したのである。「僕」はこのような「私大生」と同じ世代でありながら、互いに決して受け入れることができなかった。権力体制への絶望で無気力になった「僕」が最後の喪失で彷徨うように、「私大生」も絶対に出口のない道で挫折してしまうに違わない。この意味において、大江氏は自分が見ていた「戦中世代」と特権階級の若者たちの内心の矛盾、つまり、英雄であろうとすればするほど、卑劣に近づくこと、そして、それによって構成された戦後社会の権力闘争をこの「奇妙な仕事」でたっぷり表現したのであろう。最後の結末にて、警察の通知をもらった「私大生」と「犬殺し」は、二人共「あいまいな白けた表情」(17頁)をしていたことから、両者の「卑劣的な英雄意識」は同じく更なる強権による「敗北」がもたらした自分を見極められない「あいまい」なイメージに戻されるしかなかったのではないだろうか。

「奇妙な仕事」以後でも、こうした「卑劣的な英雄意識」は度々作家の著作にて違う形で取り上げられ、犯罪者の意識として解釈されるようになった。その理屈について、利沢行夫は以下のように語っている。

行動の機会を失ってしまった人びとは次第に不能者となり老いさらばえていくか、それを拒んで行動的であろうとすれば、彼は殺人犯となるか(『叫び声』) テロリストとなるか(『セヴンティーン』) しかあるまい。(中略) 彼によれば、今日の犯罪者とは、戦争という英雄的な時代の中で戦っていたものが「戦争が終って強盗になって集団をつくり活動した」のと同じ種類の行動者であり、英雄的光景をむしりとられた人達の行動であるわけだ。¹⁵

¹⁵ 利沢行夫「自己救済のイメージ—大江健三郎論 I—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974年) 188—189頁。(初出『群像』1967年6月号)



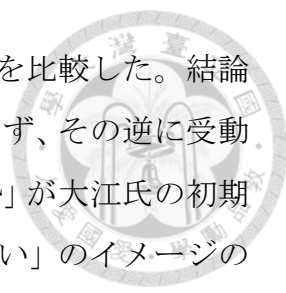
「戦後世代」は遅れてきた青年として、行動の機会、つまり、自分を確かめ、「政治的」になる機会を失ってしまった。「僕」と「女子学生」はまだ若いから、結末の内容から、次第に不能者になる道を歩み寄り始めたとうかがえる。それに対し、特権階級の「私大生」はそれを拒否し、「強者」の「上位」に登るつもりであったが、「犬」を殴った彼はもはや犯罪者同然と言っても過言ではない。「戦中世代」の「犬殺し」は利沢氏が指摘したように戦後にて強盗集団の中で活動した人間と見なしたら、「病院」と「肉ブローカー」をその集団の範囲と捉えられよう。どちらにせよ、「敗北」によってすでに消失した「英雄的」なモラルの幻影を抱き続けた二人は他者の権利を犠牲に罪を犯すことを通して、自己満足しようとした。この意味において、権力体制の中で絶望に囲まれた「私大生」と「犬殺し」は「檻」を認めず、「社会的」、「政治的」に執着していたものの、一方、更なる強権の存在が彼らを無力で抵抗できない「性的人間」に追い返してしまう。

以上、四名の主な登場人物を全員検討し、同じ喪失の絶望に対してそれぞれの対応が異なることを解明した。ところで、「奇妙な仕事」は「戦後世代」の問題意識をモチーフとした作品というのなら、ここでもう一回これまでの分析を踏まえ、物語の本題となった「戦後世代」の内部にいる主人公「僕」と「私大生」の二人の対比に注目していきたい。それについて、加藤典洋は初期作品の特徴を以下のように捉え、二人の姿勢について分析している。

ここでの「僕」と「私大生」の「受動的な姿勢」と「能動的な姿勢」の対比が、同じ初期短編に属する「人間の羊」における「僕」と「教員」、「他人の足」における「僕」と文学部の「学生」の間に反復され、そこでのストレートな「能動的な姿勢」への懐疑、抵抗を足場に小説世界を成立させていることから明らかだろう。(中略) 主人公は、能動的というよりは受動的な姿勢に終始し、そこに彼方からかすかな希望の光がおりてくる。大江の初期の作品の力は、まさしくそこにこそあったのではないだろうか、と。¹⁶

加藤氏は「戦後世代」の表と裏を表した二人の関係性を取り上げ、絶望の状況

¹⁶ 加藤典弘『文学地図 大江と村上と二十年』（朝日新聞出版、2008年）236頁。

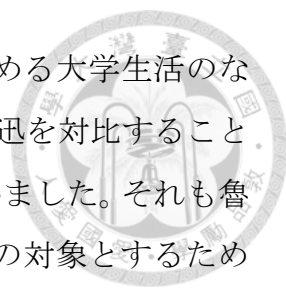


において、「受動的」と「能動的」な姿勢が引き起こした効果を比較した。結論から言うと、能動的になろうとすれば受動的に回されざるをえず、その逆に受動的であることで能動的な抵抗に移行するという「二重的な姿勢」が大江氏の初期作品に見られる。前章で論じた「天皇制」の二重性と「あいまい」のイメージの両義性を考えれば、「戦後世代」がこうした「二重的な姿勢」を取るのも無理がない。そして、「私大生」が前者、「僕」が後者にそれぞれあたると考えれば、「能動的な姿勢」への懐疑は戦時体制から戦後にも変わらない権力構造に向けるものという論点も筋が通ると思われる。こうした脈絡により、登場人物たちの上下関係も解釈できるようになったはずであろう。絶望する「戦後世代」＝「僕」、「女子学生」と「私大生」は最初誰でも受動的な位置に立ち、絶対的な弱者＝「犬」を自分の未来と見做した。その絶望的な未来と抗うために「私大生」は「能動的な姿勢」に変わったが、受動的に振り回された。受動的に「犬殺し」に手伝う「僕」は結局自ら能動的に犬と対面し、傷を負い、報酬もない絶望から脱出する方法を探らなければならなくなった。

ところが、加藤氏が言及した「かすかな希望の光」について、確かに犬の吠え声や「火山」に向ける期待は一度希望への手がかりとして現れたが、結局絶望的な徒勞に見舞われる状況はどう解釈すればいいのか。絶望と希望の関係について、中国の作家魯迅との関係を手掛かりにして、次節で論じていきたい。

5. 魯迅の「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」

これまでは登場人物の力関係を通して絶望について分析し、「戦後世代」の絶望は死の恐怖と自我喪失に由来するものであり、権力体制は元凶だと論じてきたが、犬の吠え声や「火山」みたいな希望への期待も確かに潜んでいるとうかがえる。この絶望感を表現するために、大江氏はサルトルなどのフランス文学による実存主義を盛り込んだとよく論及されているが、それだけでは結末において希望に辿り着けない理由を完全に解釈できず、また、日本の現状を描写する「奇妙な仕事」は欧米由来の思想より、アジア的な目線の設定を忘れてはいけない。そのアジアと世界に関する見方は、2000年9月に氏が講演会の催しで北京に赴いた時の発言からうかがえる。



サルトルを中心にフランス文学を学び、小説を書き始める大学生活のなかで、私には魯迅が大きい存在でした。私はサルトルに魯迅を対比することで、世界文学のなかのアジア文学について確信を抱いていました。それも魯迅は、私が自分をふくめた日本の文学者を相対化し批判の対象とするための、高い手がかりであったのです。批評の基準としての魯迅という考えは、現在の私にまで残り続けています。¹⁷

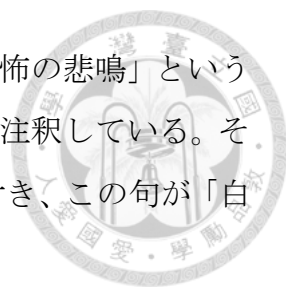
引用のように、大江氏が卒業論文のテーマにするほど関心を持つサルトルと並び、魯迅という中国の作家からも、作家は深い影響を受けたことは否めない。言い換えれば、大江氏はサルトルを介して世界を見、そして、魯迅を通じてアジアを考えてきた。このような知識は後に彼が小説を書き始めた時のエネルギーになったと言えよう。では、ここの「批評の基準」として提出された魯迅の思想も大江氏の小説に反映されていたと考えられる。それについて、藤井省三は東京大学で開催された2007年の講演「知識人になるために」にて大江氏に魯迅からどのような影響を受けたかと聞いたところ、得られた返答を自分の著作に次のように回想し、記録していた。

魯迅は自由に短編小説を書き、小説の形式を作っていました。一人の知識人が世界に向かって切実なことを訴える、そういう文体を持っており、捨て身の告発をしました。私も短編小説を書く時にはしばしば魯迅を思い出していたものです。¹⁸

この通り、異なる時代背景と国籍を持つ二人の作家は短編小説の創作において共通していると述べた。大江氏の最初の短編小説である「奇妙な仕事」の場合では、特に魯迅の作品「白光」と関連していると思われる。「白光」で描写された絶望と希望は「奇妙な仕事」と相似しているため、分析する必要がある。なぜこの両作に繋がりがあるかというと、「奇妙な仕事」が完成される前に、大江氏が同じモチーフをいくつかの形で試していたことがうかがえる。その一つは「詩

¹⁷ 大江健三郎「北京講演二〇〇〇」『鎖国してはならない』（講談社、2001年）214頁。

¹⁸ 藤井省三『魯迅 東アジアを生きる文学』（岩波新書、2011年）184頁。



もどき」の「犬殺しの歌」¹⁹であり、「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」という一行は、魯迅の『野草』からの引用だと作家自身が詩作の後に注釈している。それに対して、藤井氏は大江氏が出典を間違っていたことに気づき、この句が「白光」から引いたものだと以下のように考察した。

この一句は、科挙万年落第生の異常心理をアンドレーエフの手法で描いた、いわば「孔乙己」の兄弟作品である「白光」末尾からの引用である。同作は佐藤・増田訳の岩波文庫『魯迅選集』には収録されず、一九五五年に刊行され竹内好訳の岩波文庫『阿Q正伝・狂人日記』に収められている。大江氏は「奇妙な仕事」を書き始める前に、竹内訳の岩波文庫で魯迅を読み直していたのである。²⁰

大江氏が魯迅を読み始めたのは母親からもらった佐藤・増田訳の岩波文庫『魯迅選集』であったが、上記の論点から考えると、大学に入った大江氏は更に魯迅を読み漁った。そして、「奇妙な仕事」の前身であるこの「犬殺しの歌」でも見られるように、「白光」との関係性を無視することができない。この点に関して、2009年大江氏が北京大学で行った講演で「奇妙な仕事」の創作動機や、魯迅との関係について、以下のように語った。

この小説で、私は自分を生活で苦しんでいた若者—地方から東京にフランス語を学びに来て、将来で安定した仕事を見つける希望が全くなかった一人として描いていた。そして、ずっと母が読ませてくれた魯迅の短編小説を手にかけていたので、魯迅の作品から直接的な影響を受けて、その青年の精神世界を作りあげた。(中略) 私が自分の小説に描いたあの青年もまるで心から「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」をすぐにでも叫び出そうとしているようだったのは、「小説を書いている自分がそのような青年」なので、戦後の日本社会において(当時、戦争が終って二十年ほど経ったばかりだった)何か明確な希望も見出せなかった時代で自分の未来に希望を抱きたい

¹⁹ 大江健三郎『持続する志』(文芸春秋社、1968年)425頁。

²⁰ 藤井省三『魯迅 東アジアを生きる文学』(岩波新書、2011年)151頁。



からだ。²¹（筆者訳）

「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」はここでも言及され、直接に主人公の「僕」と結びついていることを示している。そして、それは作家自身の投影でもあり、「戦後世代」の絶望に対する希望への期待の反映だと述べられていた。こうして見れば、「白光」に書かれていたこの言葉は前節で論じた「奇妙な仕事」の絶望と希望の表現の根源と言えよう。しかし、両者の希望についての見解は果たして相違点はないだろうか。

「白光」は1922年に『東方雑誌』に初めて発表され、翌年の1923年に刊行された魯迅の短編小説集『呐喊』に収録された作品である。主人公陳士成は科挙を何年も受けたが、何度も失敗して絶望した人物だが、昔の裕福な家柄をずっと忘れられない彼は、自分の運命を変えるには官位を獲得する手段しか知らなかった。そのため、彼は試験に失敗し、ひどく落ち込んだところから物語が始まった。家に帰ると、彼は祖先が残した遺産のことを思い出し、その埋蔵地を指し示す謎を解こうとした。しかし、いくら掘っても、出てきたのは一つの銅銭といくつかの陶器の欠片だけで、おまけに下顎の骨を見つけた彼は恐怖を感じ、ついに幻聴や幻視の状況に陥り、狂ってしまった。深夜に「白光」が射す山に出向き、「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」を上げ、遺産を探しに行ったが、翌日の朝、湖に浮いて死んでいたと発見された陳士成は、「水底でもがいた証拠に十本の指の爪に河底の泥がつまっております、生前に水に落ちたにちがいない」²²と検屍人に判断された。

この話は、各方面から解釈ができるが、今回は大江健三郎に与えた影響を解明する目的で、「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」を持つ意味に注目していきたい。「白光」は主人公の陳士成を通して、当時中国の封建思想を批判し、啓蒙主

²¹ 大江健三郎講演・翁家慧訳「真正の小説は写给我们的亲密的信」『文匯報』2009年1月22日第10版。原文は次のように中国語で記録されている。「在这篇小说里，我把自已描写成一个生活在痛苦中的年轻人——从外地来到东京，学习法语，将来却没有一点儿希望能找到一个固定的工作。而且，我一直都在看母亲让我读的小说家鲁迅的短篇小说，所以，在鲁迅作品的直接影响下，虚构了那个青年的内心世界（中略）我在自己的小说里描绘的那位青年的内心里也像是立刻发出『含着大希望的恐怖的悲声』，因为「写小说的自己就是那样一个青年」，因为那是战后的日本社会（当时，战争刚刚结束十二年）没有什么明确希望的时候，想要对自己的未来抱有希望。」

²² 魯迅著・竹内好訳「白光」『魯迅文集1』（筑摩書房、1991年）177頁。

義を訴える小説であると馮香紅に指摘された²³ように、確かに『呐喊』の序文において、西洋医学を学ぶために日本に留学しにいった魯迅が諦めて中国に帰った理由を「愚弱な国民」の体格ではなく、精神性を改善するためだと説明していた²⁴。そこで薦めたのは文芸雑誌『新生』であるが、反応を得られず、失敗した魯迅は絶望したようである。その後、知り合いの金心異に誘われ、雑誌『新青年』で「狂人日記」を発表した。その時のやりとりは下記のように希望を提起していた。

「かりにだね、鉄の部屋があるとす。窓はひとつもないし、こわすことも絶対にできんのだ。なかには熟睡している人間がおおぜいいる。まもなく窒息死してしまうだろう。だが昏睡状態で死へ移行するのだから、死の悲哀は感じないんだ。いま、大声を出して、まだ多少意識のある数人を起こしたとすると、この不幸な少数のもの、どうせ助かりっこない臨終の苦しみを与えることになるが、それでも気の毒と思わんかね」

「しかし、数人が起きたとすれば、その鉄の部屋をこわす希望が、絶対には言えんじゃないか」

「そうだ、私には私なりの確信はあるが、しかし希望ということになれば、これは抹殺はできない。」²⁵

それから、執筆再開し、『呐喊』という小説集にまとめたという。楊義によると、ここは文学の啓蒙事業を窓がなく、壊せない「鉄の部屋」の中にある声に喩え、魯迅が絶望に反抗する精神がうかがえるのである²⁶。中国の民衆をよい方向へ導きたくても、できずに落ち込んでしまった彼は希望を信じなかったが、友人に説得され、わずかでも助力した。陳士成という人物は当時代々と陳腐化した中

²³ 馮香紅「解读《呐喊》中鲁迅的反封建思想」『短篇小说』2012年第4期（吉林市文聯、2012年）20頁。

²⁴ 魯迅著・竹内好訳「自序」『魯迅文集1』（筑摩書房、1991年）13頁。

²⁵ 魯迅著・竹内好訳「自序」『魯迅文集1』（筑摩書房、1991年）16—17頁。

²⁶ 楊義「自序點評」『魯迅作品精華（選評本）第一卷』（三聯書店、2015年）8頁。にて「這篇自序又把文學啟蒙事業，比喻為來自“鐵屋子”的聲音，而且是“絕無窗戶而萬難被毀”的鐵屋子，從中可以體驗到魯迅反抗絕望的沉鬱的精神世界，體驗到魯迅紮硬寨、打硬仗的意志，以及由此昇華出的憂鬱深廣的小說美學特色」と指摘している。

国の封建的な伝統社会と抵抗し、それを破ろうとして叫び出し、死ぬまで戦い続けていた。それはまさに魯迅の文学創作の態度だと思われる。「希望は将来にあるものゆえ、絶対にないという私の証拠で、ありうるというかれの説を論破することは不可能なのだ」²⁷と魯迅が述べたように、絶望を否定するために希望が考えられ、両者を矛盾させながら共存する未来の可能性に彼は力を注いだ。こうして見ると、「白光」で書かれた「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」はいかにも魯迅自身の叫び声と言えるであろう。

一方、大江氏の「奇妙な仕事」においても、日本の戦後社会に絶望した青年たちを描き、不安の現実と未来と戦うストーリーを紡いだが、結末の部分から見ると、最後まで抵抗した人間は一人もいなかったとうかがえる。これは両者の最も大きな相違と言えよう。その点に関して、許金龍は次のように指摘した。

大江の初期作品に登場したこういう人物は時に受動的に、時に能動的に無関心な態度を取ったり自堕落したりして、読者を悲しませずにはいられない。もちろん、この問題をテキスト以外の現実世界と合わせて考察していけば、それは当時のリアルな（あるいはリアルに近い）社会状況を反映し、また作者が読んでいた魯迅の作品の幅およびそれに対する理解の様々な制限を表していることが分かる²⁸（筆者訳）

許氏の論点はつまり、「奇妙な仕事」が日本の状況に合わせて表現された「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」と主張していた。今までの論述を合わせて考えれば、許氏の説に賛同の意を示したい。このように、大江健三郎の「奇妙な仕事」と魯迅の「白光」は創作意図において共通していると見受けられるが、時代と地域の違いによって、加藤氏の言うように、大江氏の初期作品の多くで、「主人公は、能動的というより受動的な姿勢に終始し、そこに彼方からかすかな希望の光が

²⁷ 魯迅著・竹内好訳「自序」『魯迅文集 1』（筑摩書房、1991年）17頁。

²⁸ 許金龍「始自絶望的希望—大江文學中的魯迅影響初探」『大江健三郎—從自我到世界』（中央研究院中國文哲研究所、2009年）127頁。原文は次のように中国語で記されている。「大江初期作品群中這些人物或被動或主動地麻木不仁，或自甘墮落，無法不讓讀者更是為之感到悲哀。當然，如果我們結合文本外的現實世界來考察這個問題的話，就會發現這既是當時社會的真實（或接近真實的）寫照，也是作者對魯迅作品在閱讀範圍和理解程度上的種種局限。」

おりてくる」²⁹のであり、希望の具体的な追求が成し遂げられていなかったと思われる。

その肝心な希望について、発表された「奇妙な仕事」を母に見せた大江氏は厳しい批評を受けた。この物語に「一つの希望の欠片もなかった」(筆者訳)³⁰と言われ、魯迅の『野草』に収録された散文詩の「希望」を読むようにと告げられた若い作家は恥ずかしくて本を持ち帰った。その作品に、「絶望は虚妄だ、希望がそうであるように」³¹というペテーフィ・シャーンドルの言葉が魯迅に引用され、この中国作家における絶望と希望の連結を読み解く手がかりを与えてくれた。ここで用いられた「虚妄」の意義について、北岡正子は以下のように分析していた。

革命失敗の後も生きながらえ、天上の〈希望〉が失われてしまった地上で、〈絶望〉を見つめた時に見えて来るもの、それが魯迅の所謂〈虚妄〉ではなかったか。魯迅が「希望」を書いたのは、辛亥革命後十余年、革命にかけた期待が存分に裏切られ「依然として砂漠の中を行ったり来たりしていた」(『自選集』「自序」)時である。魯迅四十四歳。この〈虚妄〉とは、いわば、絶望的な状況の現実の到来を生きながら経験しなければならなかったものにしてはじめて認識しうるものなのではあるまいか。だから、魯迅の〈虚妄〉の認識には、生への志向が蔵されている。魯迅は、この〈虚妄〉ともう一度素手でもみ合うことによって生きようとした。³² (下線は筆者による。)

引用文の指摘通り、魯迅は到来する絶望と向き合い、「希望」を書き、「虚妄」という言葉に潜む「生きる意志」を表明したのであろう。「白光」で描かれた「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」も同じ意義を持ち、絶望の中で希望へ期待することを示している。この「希望」の内容を完全に理解することは大江氏が魯迅を

²⁹ 加藤典弘『文学地図 大江と村上と二十年』(朝日新聞出版、2008年) 236頁。

³⁰ 大江健三郎講演・翁家慧訳「真正の小説は写给我们的亲密的信」『文匯報』2009年1月22日第10版。原文は次のように中国語で記録されている。「你这算是怎么回事?怎么连一片希望的碎片都没有?」「你要是看了《野草》,就知道里头有篇小说叫《希望》吧。你看了《希望》吗?」

³¹ 魯迅著・竹内好訳「希望」『魯迅文集2』(筑摩書房、1991年) 32頁。

³² 北岡正子『魯迅 救亡の夢のゆくえ 悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』(関西大学出版部、2006年) 229頁。

さらに考えるきっかけとなったのである。2009年の北京での講演で「異常絶望的な時代現状に対しても、魯迅は絶対に絶望しないと言う。そして、単純な安い絶望で自分、または他人の眼を欺かない。それこそが虚妄だから」³³（筆者訳）と大江氏がこの一文を解釈したように、後期の大江文学が得られた絶望と希望の結論は魯迅の考え方に近付いていく。しかし、同じく2009年の台北でのシンポジウムで彼自身が「私は若い頃から「大きな希望」の意義を理解したが、それを精確に「恐怖の悲鳴」と結び付けることができなかった」³⁴（筆者訳）と語ったように、やはり大江氏の初期作品には絶望と希望を繋ぐ鍵が見えなかったと言えよう。

6. まとめ

以上、「奇妙な仕事」の主な登場人物たちの分析をしてきた。彼らは犬を殺す事件を通して多重な「檻」構造を見出し、共犯がたくさん存在している中、全体の責任を背負える人が誰もいない状況に陥っていた。その中で主人公「僕」と「女子学生」は「戦後世代」としての喪失の絶望を感じたが、「怒り」の感情を隠したり、脱出する道を見つけようとした点から見れば、両者は権力者である「犬殺し」と「肉ブローカー」に完全に屈伏していなかったと見受けられる。しかし最終的に「犬」が象徴する「性的人間」のように、日本社会の権力構造から逃れることがとうとう出来ず、逆にさらに下の位置に追われるようになったのである。「私大生」は特権階級のシンボルであり、満たされない英雄意識を確立させるために、卑劣な行動に走り、権力を握ろうとした。それに対し、「犬殺し」は戦時体制に根付くアイデンティティーと思わせる伝統意識を守るため、犬を殺し続ける権力を振るった。二人はどちらも「卑劣的な英雄意識」のもとで「政治的人間」になろうとしたが、更なる強権の存在により、徒労に追い返されてしまったとうかがえる。このように、本作における絶望とはすなわち自己認識＝ア

³³ 大江健三郎講演・翁家慧訳「真正の小説は写给我们的亲密的信」『文匯報』2009年1月22日第10版。原文は次のように中国語で記録されている。「面临异常绝望的时代现状，鲁迅还是说，绝不绝望。而且，也绝不用简单的、廉价的绝望去蒙蔽自己或他人的眼睛。因为那才是虚妄。」

³⁴ 大江健三郎「大江講評」『大江健三郎—從自我到世界』（中央研究院中國文哲研究所，2009年）159頁。原文は次のように中国語で記されている。「我在年少時已經瞭解「包含巨大希望」的意義，但是我並不能精確地理解它與「恐怖悲鳴」連結後的意涵。」

イデンティティーの喪失および死の恐怖によって構成された「戦後世代」の問題意識と言えよう。

一方、希望は「吠え声」と「火山」のイメージに潜んでいたが、最後まで貫かなかった点について、魯迅との関わりを手がかりとして探ってみた。魯迅の「白光」では社会の絶望と抵抗し続けることにより、希望との共存を見出し、「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」という言葉のように、絶望を否定するための希望を得ることができた。その関係性はもう一つの作品の「希望」からもうかがえる。一方、「奇妙な仕事」、あるいは大江氏の初期作品において、最後まで戦った人物はほとんどない設定から、希望に繋がる道が途絶えたと捉えられよう。その希望の真義については、後の60年代以後の氏の作品中に浮かんでくるので、詳しい考察は後の章に譲る。

第三章 「空の怪物アグイー」における「障害児」の絶望から「ヒロシマ」の希望へ



1. 「空の怪物アグイー」の問題点について

1963年に脳障害を持つ長男、大江光の誕生を迎えた途端、大江氏は今までの人生にない大きな衝撃を受けた。それからの一年間を自分の人生の中で「もっとも特別な一年間だったかもしれない」¹と回想したように、デビュー以来の仕事に行き詰まりを感じた作家は「以前の生活と全く切れた、一種の限界状況を生き始め」²た。その完全に新しい経験を反映した最初の小説は翌年の1964年1月に出版された「空の怪物アグイー」である。

序章でもすでに触れたように、この短編は「障害児」の問題以外、後に広島へ訪ねた旅とも深く関係しており、その内容が相似する故に、半年後で完成された長編小説『個人的な体験』とよく比較されていた。今までは「空の怪物アグイー」が『個人的な体験』を成し遂げるための実験作という従来の見方が多い³が、近年では安藤始と坂口周などが両作の「障害児」に対する正反対の選択に注目し、両方は一緒に並び、互いが抵抗し、あるいは相対していると分析した論点も増えてきた⁴。そのほかに、「空の怪物アグイー」で語られた「障害児」を見殺す物語が『個人的な体験』の中で悩まされた選択肢の一つである点に目を付け、『空の怪物アグイー』と『個人的な体験』の構造的な関連性は並立というよりは、『個人的な体験』が『空の怪物アグイー』を含んでいる⁵という趙軒求の指摘のように、この短編を長編の一部と見なす論述もうかがえる。

しかし、以上の論述は趙氏以外、ほぼ全てが「空の怪物アグイー」の語り手「ぼく」の視点を見落としており、その趙氏も「ぼく」と初期作品の繋がりに気づきながら、日常と非日常の描写に重点を置いたため、「戦後世代」の問題と登場人

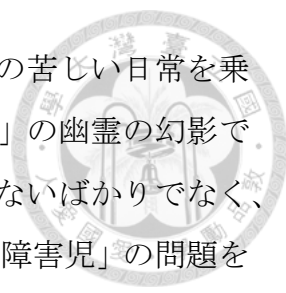
¹ 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（新潮社、2007年）89頁。

² 同上。

³ 平野謙「解説」『大江健三郎全作品6月報』（新潮社、1966年）、渡辺広士「解説」『空の怪物アグイー』（新潮社、1972）など。

⁴ 安藤始『大江健三郎の文学』（おうふう、2006年）、坂口周「大江健三郎と〈ポップ〉の系譜—1960年代の〈穴〉」『津田塾大学紀要』（津田塾大学紀要委員会、2010年）など。

⁵ 趙軒求「大江健三郎論—物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を視座として—」（中央大学、2014年）31頁。



物の力関係についてほとんど触れず、最後の結末の意味を「今の苦しい日常を乗り越えて生きていける力を得ている」⁶と論じながら、「障害児」の幽霊の幻影である「アグイー」と決別して永遠に離別する意味を解釈していないばかりでなく、広島の旅との関係も省いていた。確かにこの作品には新しい「障害児」の問題を初めて盛り込んだが、それがいきなり初期作品の「戦後世代」のテーマから離れたと考えるににくい。大江氏自身も両作を「それまでの私の短編を書く技術で、この主題をとらえる」のと「全く新しいもの」⁷に分けて説明していたように、「空の怪物アグイー」は『個人的な体験』と同じ題材を扱っているものの、初期短編から引き継ぎ、さらに転換を果たした部分もあったと思われる。こういう意味において、「空の怪物アグイー」を『個人的な体験』の関連作ではなく、単独作品として読み解いてもよからう。

従って、ここでは本作の背景になる1963年の「障害児」と「広島の旅」の二つの出来事をまず取り上げ、これまでずっと「戦後世代」の問題意識を抱え込んでいた作家がどのような衝撃を受け、さらに自身の思想が如何に影響されたかを考察していきたい。それを踏まえ、初期短編と同じく登場人物における力関係の分析を行い、その上で相違点ないし変化点に注目する。具体的な手順として、「空の怪物アグイー」のストーリーの構成に従い、語り手の「ぼく」の視点を中心に、音楽家Dとの関係の進展に沿いながら、途中に出会う人物たちのそれぞれの立場と合わせて作中の絶望と希望の痕跡を探り、大江文学における本作の位置づけを明らかにしてみる。

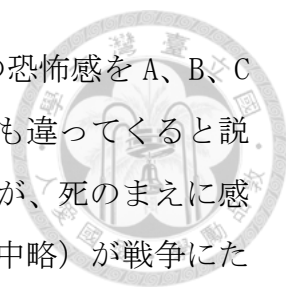
2. 1963年の大江健三郎—「障害児」と「ヒロシマ」

第一章に引き続き、時代背景について振り返ると、戦争の影がまだ濃い1950年代から、1960年代に入った日本社会と世界情勢は高橋由貴が説明したように、「米ソ冷戦構造下で核戦争の危機が現実味を帯びる」⁸時期であった。戦争に甚大な恐怖感を抱いている「戦後世代」はますます危険を感じ、未来の世界に一種

⁶ 趙軒求「大江健三郎論—物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を視座として—」（中央大学、2014年）34頁。

⁷ 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（新潮社、2007年）90頁。

⁸ 高橋由貴「記録する機械の限から「広島レンズ」へ—大江健三郎『ヒロシマ・ノート』論—」（『日本近代文学第86集』（日本近代文学会、2012年）33頁。



の終末観さえ持ち始めたと、大江氏自身が言及しており、その恐怖感をA、B、Cの三種類に分け、異なる経験を持つ人間によって、感じた意味も違ってくる」と説明していた。Aは「戦争においてしんでしまった人間（中略）が、死のまえに感じたであろうところの恐怖感」、Bは「戦争体験をもつ人間（中略）が戦争にたいして現在もっているところの恐怖感」、そしてCは「戦争を現実に体験しなかった人間（中略）の戦争、とくに未来の核戦争にたいする恐怖感」⁹である。AとBは「戦中世代」の感覚と見做せば、その中のCタイプは無論、「戦後世代」の恐怖を指しており、それが以下のように詳しく語られている。

Cの恐怖心のタイプの人間にとっては、戦争という怪物は抽象的、反・現実的な、見当もつかない大物なのだ、ここでは、いったんこの歴大な恐怖心にとらえられると、立ちなおりようがない、具体的な足がかりがみつからないからだ。それはたちまち、ヒステリーにつうじてしまう。おそらく第三次世界大戦が始まるとするなら、その前夜にもっとも多く自殺し、発狂するのはCの恐怖心のタイプの連中、すなわちぼくらだろうと思うのである。¹⁰

「戦後世代」のこうした恐怖の実態は、「死と存在」の喪失に繋がり、「敗北」の絶望に由来するものである。その起因である戦争の再来を予感した大江氏たちは同世代の問題を依然に解決できないまま、「戦中世代」の戦争実体験を幼い頃の想像と重なりながら比較し、権力体制のもとに体験したアイデンティティの矛盾を繰り返し、死に対する恐怖も一層深まっていった。そしてそれは引用文のように、非現実的かつ巨大な怪物の印象として受けとめられた故、そのイメージに捕らわれた「戦後世代」はヒステリー、つまり一種の狂気に陥る。

そのような背景を抱えた中、1963年に「障害児」として長男が誕生したのである。その事実を受けざるを得ない状況に置かれた大江氏は更なる絶望の深淵に落とされてしまったのは想像できよう。ただし、今度は同世代の絶望より、彼は個人と家族の困難と苦悩に見舞われ、向き合わなければならなくなった。そし

⁹ 大江健三郎「ぼく自身のなかの戦争」『大江健三郎 同時代論集 1』（岩波書店、1980年）49頁。
（初出『中央公論』1963年3月号）

¹⁰ 同上、52頁。

て二カ月後、彼は「第九回原水爆禁止世界大会」の取材で広島に向かった。この広島での経験は記録として後に雑誌に連載され、『ヒロシマ・ノート』というエッセイ集にまとめられ、その冒頭で旅に出る前の状況が以下のように記されている。

僕については、自分の最初の息子が瀕死の状態でガラス箱のなかに横たわっていたまま回復のみこみはまったくたたない始末であったし、(中略)しかし、ともかくわれわれは真夏の広島に向かって出発した。あのようにも疲労困憊し憂鬱に黙りこみがちな旅だちというものを、かつて僕は体験したことがなかった。¹¹

引用文の通り、当時の大江氏はひどく絶望的な状態にあり、彼の人生の中で最も重要な時期に出会ったと見受けられる。その時に行った広島で、彼がどれだけの影響を受けてからその困難に向き合えるようになったかは想像に難くない。実際、大江氏自身も「この仕事をつうじて僕は、異常児として生まれた長男をきっかけとして自分のおちいっていた退嬰的な頽廃から脱げ出すことができたのであった」¹²とこの旅と『ヒロシマ・ノート』の執筆の重要性を強調していた。しかし、「障害児」に対して感じた憂鬱と困難の「絶望」の具体的な内容はこれだけでは説明できない。作家がこの出来事に出会った時に、どうしたら自分たち「戦後世代」のことを息子の状態と連結すればいいのか、今までの価値観を「障害児」の問題に向かってどう調整していくべきなのか、そういった問題を先に解明しておかないと、広島が与えた影響もうまく捉えられないのであろう。この点に関しては大江氏が語った以下のような心境を手がかりにして論考していく。

この頽廃の感覚をいくらかなりと一般化してとらえると、僕には具体的、実際的な感覚として、自分の一箇の人間としての未来が閉じられた、これからのようなかたちで生きてゆくのであるとしても、個としての生の向うのどんづまりには、暗く閉じたものしか待っていない、という思いがあった

¹¹ 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』(岩波書店、1965年)2頁。

¹² 大江健三郎「未来へ向けて回想する—自己解釈(二)」『大江健三郎 同時代論集2』(岩波書店、1980年)287頁。

と思う。(中略)

これはなにか巨大なもの、それも宇宙の根本にあるような巨大なもの
の悪意によって、自分の属する生命のリンクがここで絶たれるべきなのだと、
そのようなしるしが示されたのであり、自分にはそれに抵抗する意志がな
いと、僕は頽廢のうちにのめりこんで屈伏していたのである。このように回
想していくと、僕にとってあの夏、ほかならぬ広島に出かけてそこでめぐり
あったものの、^{アクセント}出来事のような経験の大きい意味がそのまま明瞭になっ
てくるように思う。¹³ (傍点と振り仮名は原文による。下線は筆者による。)

「障害児」がもたらした絶望はここで「世代」の閉塞感ではなく、「一個人」
としての未来が見えなくなっていたために、生じた頽廢の感覚だと説明されて
いたが、巨大な悪意に生命が脅かされ、希望が見えない出口なしの状態は「戦後
世代」が戦争に対する恐怖、そして戦後社会から感じ取った絶望のイメージと共
通しているとうかがえる。また、その頽廢を目前にして、彼は抵抗できる意志を
持てず、「屈伏」し、「敗北」していたという点からでも、やはり、「戦後世代」
が権力と対抗する時の「無力感」および強者に支配される「屈伏感」と同じ系譜
を継いでいたと言えよう。要するに、大江氏は「戦後世代」の思考方式から離れ
ることがなく、そのまま「死と存在」の問題意識を「障害児」の誕生を通して「個
人」の内面に向けてさらに深く掘り下げようとしていたのであろう。

長男が生死の狭間を彷徨う間に、作家も自分の将来、家族の生命の繋ぎの破滅
に迫られていたのであり、それが「戦後世代のイメージ」と直接に繋がり、戦争
の予感をもたらす不安を醸し出す現状と重なり合っていたと考えられる。その
時に広島へ赴いたのは完全に偶然と言え、偶然ではあるが、「原水爆禁止大会」
で議論しようとした「核兵器」の問題は「戦争」と結び付いており、大江氏もそ
の経緯を見届けるつもりで臨んでいたため、「障害児」と「戦争」は広島という
場所で発生した原爆経験＝「ヒロシマ」によって連結されるのもこういう意味に
おける必然性が感じられる。そこで大江氏は、「そうした自分が所持しているは

¹³ 大江健三郎「未来へ向けて回想する—自己解釈(二)」『大江健三郎 同時代論集 2』(岩波書
店、1980年) 281—282頁。

ずの自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島ของヤスリにかけ、広島のレンズをとおして再検討することを望んだのであった¹⁴という言葉のように、今までの思想と感覚を全てこの場所の経験を通して一考え直した。そこで得られた結論を解明する前に、まずはその根底にあるモラルの概念である「威厳」と「屈辱」の言葉の意義について改めて考えてみる。

2.1. 「威厳」と「屈辱、恥」のモラル

大江氏はまだ小学生の頃、敵軍の捕虜となった若い兵士が自軍の機密を漏らさないために自殺した内容の映画を見て、震撼された同時に将来自分が戦場に出たら、同じ状況に直面する恐怖を感じ、「死を賭してまでなお屈服しない¹⁵タイプとそれができないタイプのジレンマに陥った。それを押し隠しながら、父に兵士の自殺原因をたずねたが、「自殺しないでも、白状させられたあと結局殺されたよ¹⁶という短い返事に、彼は納得できなかった。大学に入り、フランス文学を専攻していた大江氏はそこで発見した言葉「威厳」と「屈辱あるいは恥¹⁷」でこのジレンマを解釈し、二つのタイプを「屈辱、恥をうけ入れたあとむなしく殺される」と「威厳とともに自殺する」に分けて考えるようになった。そして、それらの言葉を彼自身の「モラルの世界のもっとも基本的な用語¹⁸」として活用し始めた。

しかし、小説に本格的にこの言葉を反映したのは、おそらく1963年以後のことになるだろう。モラルの用語と言えば、やはり第一章で取り上げた「戦後世代のイメージ」に含まれる「英雄と卑劣¹⁹」という対比表現が初期作品に著しく出現しており、この事件と異なる形であるが、似た境遇に会う「逃亡兵」のイメー

¹⁴ 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（岩波書店、1965年）3頁。

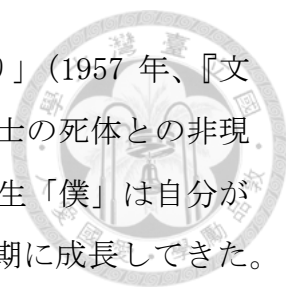
¹⁵ 同上、95頁。

¹⁶ 同上、95頁。

¹⁷ 「僕は文学部の学生になり、フランスの現代文学を読みはじめたが、教室で、いつも僕の頭に浮かんでいたのは、フランス文学と日本文学におたがいの言葉のそれぞれの特殊な流行があり、フランス文学でひんばんに使われる言葉の同義語が、日本文学では冷遇されている、という発見だった。そして、そのような言葉として、とくに僕の注意をひいたのが、威厳(dignité) 屈辱あるいは恥(humiliation, honte)のふたつの言葉で、それらはすなわち、僕の少年時代からの恐ろしいジレンマに深く関わる言葉であった。」と大江氏は『ヒロシマ・ノート』にこの発見の過程をこう説明していた。

¹⁸ 同上、98頁。

¹⁹ 大江健三郎「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集1』（岩波書店、1980年）23頁。
（初出『週刊朝日』1959年2月1日号）



ジと頻りに結びついている。例えば、初期短編の「死者の奢り」（1957年、『文学界』）に主人公「僕」とかつて戦場で逃亡し、銃殺された兵士の死体との非現実的な会話シーンが代表的なものである。「戦後世代」の大学生「僕」は自分が「戦争の終ることが不幸な日常の唯一の希望であるような時期に成長してきた。そして、その希望の兆候の氾濫の中で窒息し、僕は死にそうだった。戦争が終り、（中略）そして僕らには、とてもうやむやに希望が融けてしまったものだった。」（「死者の奢り」『大江健三郎小説1』、30頁）と語った。それに対して、逃亡兵は自分の人生がかつての「僕」たちの希望を背負うことと認識し、積極的に政治と戦争の話題を繰り広げようとした。このような「戦中世代」の性質を露わにした兵士を「僕」はその逞しい体が生前で活躍した光景を想像しながら、その目に「確信がなくて、ひどく卑劣だったかもしれない」（同前掲書、30頁）と評価した。

英雄と卑劣は、戦中に自分の不確かなアイデンティティーを確立させるため、大江氏に提起されたモラルの用語である。そして、戦場はそれを弃えられるシチュエーションであると論じられた。子供の頃の「僕」にとって「戦争の終る」ことは戦時体制が終結する希望であるが、同時に戦場にて自分を見極める機会の喪失に繋がるため、「希望の兆候の氾濫」に窒息しそうになった彼は後に戦後社会の権力再構築によって「戦後世代」が持ち始めた「あいまい」さを早い段階で予感し、戦争から解放される希望はただの幻影だと無意識に感じ取ったのであろう。一方、戦場から逃亡することは戦中の頃で英雄のイメージと連想し難く、卑劣と批判されやすい行為であり、その兵士は「死の恐怖」に「屈伏」し、軍隊と国家の権力体制に「敗北」して「屈辱」的な最後を迎えたと言えよう。

同じく、もし映画での捕虜の兵士が自殺しなければ、敵に降伏する「逃亡」になると見受けられる。戦場で捕まったことは兵士の「敗北」を示し、そこに「屈伏感」が形成していく。ここでの自殺は言い換えれば、この「屈辱」の絶望に対抗する意志を固く表明し、英雄と見なされる行為であり、その反対側にある白状は卑劣だと判断される。しかし、その勇氣ある英雄的な自殺も、結局は「死の恐怖」から逃れられず、絶望に至るほかならない。そう考えたら、「威厳」や「屈辱」との関係も浮かび上がってくる。同じく大江氏のモラルを反映する用語であるものの、そこから微妙な差異がうかがえる。まず、「屈辱」と卑劣の関係性に

について、初期短編「人間の羊」（1958年、『新潮』）を論じた磯田光一は以下のよう
に言及していた。

“屈辱”にたいして黙認することが“卑劣”であるとすれば、“卑劣”を
克服する方法は連帯による抵抗以外にはないであろう。『人間の羊』の“屈
辱”は、占領下の、あるいは安保体制下の日本人の構図である。大江の反米・
反体制思想のうちには、日本人にとって普遍的な“屈辱”を意味した時代へ
の、内心の反抗の感情がおそらく隠されている。²⁰

引用文のとおり、支配される「屈辱、恥」を認めた卑劣さを越えたいというの
は「戦後世代」が自身のアイデンティティを確認したいからであり、権力との
対抗がその背後に存在しており、それを達成するには全世代による抵抗しか道
がなかった。しかし、前の「奇妙な仕事」の考察でも示したように、初期におけ
る「戦後世代」の問題は解決されず、絶望のままであることを見落としてはなら
ない。たとえ「私大生」と「犬殺し」のように、「卑劣的な英雄意識」を持って
能動的に動いても、「自己欺瞞」に陥り、希望を見出せなかった。言い換えれば、
「英雄と卑劣」のモラルは戦場と「冒険」が成立しにくい戦後社会において、権
力体制を覆す答案を導いてくれる適切な考え方ではないと見受けられる。『ヒロ
シマ・ノート』には英雄と卑劣の形容を使用したことがほとんどなかったのもそ
れが原因と思われ、大江氏自身も、2011年発生した東日本大震災に福島原発
で働いた作業員のことが英雄的かと問われた時、次のように答えた。

自分は『ヒロシマ・ノート』において、英雄的という形容詞を一度も使っ
ていない。広島で被爆した医師たちの働きを、私はもつとも人間的で見事な
行為として記憶されねばならぬ、と書いているのだ。福島原発でも、そこで
緊急活動に励む労働者たちが、あくまでも人間的な働きをなしうることを
自分は望むのであって、どのような勢力にも、かれらを英雄的な行為へ駆り

²⁰ 磯田光一「大江健三郎と江藤淳の登場」『増補改訂戦後日本文学史・年表』（講談社、1987年）
240頁。

たてることがあってはならないと考える。²¹



英雄と卑劣というモラルの分け方は「卑劣的な英雄意識」を生み出す戦後日本において、各種な権力に利用されただけだったろう。その縛りを超えるため、他の言葉が必要とされ、そうして「障害児」という問題によって自分と家族の状況に引き戻された大江氏が見つけたのは「威厳」であった。この用語を使うと、戦場と「冒険」の前提が消える。そして、権力によるアイデンティティーの矛盾と関係なしに、ただ個人の内面の態度に絞られた時、適用する場面が広げられ、命の課題も、「障害児」の問題にも対応する概念として使用されることができた。

しかし、言葉の概念を変えたとしても、自殺する兵士のジレンマは消えたわけではなく、むしろ、どう「屈辱」から「威厳」に変わるのかという問題がさらに深刻になった。やがて、『ヒロシマ・ノート』で作家が「自分を屈辱あるいは恥の感覚からまもる手だて」を「広島の人々の威厳を見うしなうことがないよう心がけること」²²と説明したように、その問題を解消できたのは彼が広島で「威厳」を見出した「人間的」な行為である。では、一体「威厳」がある広島の人々は何を作家に見せただろうか。それについては次節で論じたい。

2.2. 「ヒロシマ」の「正統的な人間」

広島で作家が経験したことは綿密に記録されているが、いくつかの結論をまとめて以下に説明していく。戦争の終結を迎えるために広島を襲った原爆は「炸裂した瞬間、人間の悪の象徴となった」²³とエッセイに形容されている。それは同じく「戦後世代」であっても、想像に絶するほどの「敗北」と「死の恐怖」の絶望であり、大江氏曰く「人間の悲惨の極み」²⁴、「最悪の絶望」²⁵であった。それに加え、被爆直後から続けて人々を苦しませる原爆症、その病気のせいでケロイドが付き、他人から軽蔑されるようになっていたりする状況に陥っている。広島で起きた事件ですべての人間としての存在価値は絶望に塗り潰された。一方、「こ

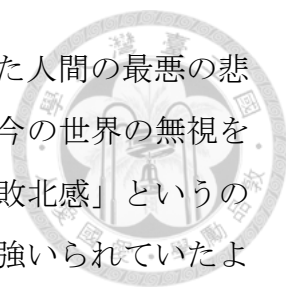
²¹ 大江健三郎「ビキニからフクシマまで (特集 学会 60 周年記念シンポジウム論文)」『マス・コミュニケーション研究 80 号』(マス・コミュニケーション研究学会、2012 年) 11 頁。

²² 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』(岩波書店、1965 年) 108 頁。

²³ 同上、110 頁。

²⁴ 同上、107 頁。

²⁵ 同上、183 頁。



の地球上の人類のみな誰もからもが、広島と、そこおこなわれた人間の最悪の悲惨を、すっかり忘れてしまおうとしているのだ」²⁶と大江氏が今の世界の無視を摘発した。「屈辱、恥」は力関係における弱者と認定される「敗北感」というのなら、広島の人たちはその夏の日から、全人類から「屈辱」を強いられていたように捉えられる。しかし、この巨大な絶望から、原爆症を患い、死に向かっても生きつづけようとし、回復を目指していた人々がおり、絶望の根源とも言える「核問題」と対抗を試みる人々が励んでいた。そのような彼らの生き方が大江氏の眼を引き寄せ、若い作家は励まされた。ところで、大江氏はその努力を認めつつも、被爆者たちの生命と核兵器の現状を改善できる力が足りない悲しい現状を改めて認識し、根本的な思想からの影響力に力を入れるべくだと、次のように提言した。

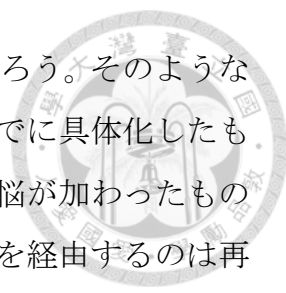
人間の悲惨、恥あるいは屈辱、あさましさ、それらすべてを、ただちに逆転して、価値あらしめるためには、そしてそれらの被爆者たちの人間的名誉を真に回復するためには、広島が、核兵器全廃の運動のための、もつとも本質的な思想的な根幹として威力を発しなければならない。(中略) その他に広島に被爆者たちをそのもつとも悲惨な死の恐怖から救う、いかなる人間的手段があろう？

したがってもし、政治的力関係によって核兵器が全廃されるにしても、それでは広島に被爆者たちの人間的復権のために無効だ。(傍点は原文による。)²⁷

引用で示したように、広島に悲惨や「屈辱と恥」の経験＝「ヒロシマ」から一人の人間のあるべき名誉を取り戻し、その生命に価値をもたらすために、彼らの思想、すなわち、「威厳」がある生き方に着目しなければならない。そして、それは「政治的力関係」、つまり、あらゆる「権力」による手段でその目標を成し遂げるものではない。原爆というのが最悪の状況とはいえ、「戦後世代」が感じ

²⁶ 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』(岩波書店、1965年) 102頁。

²⁷ 同上、100頁。



た「死の恐怖」と自己認識の問題とどこか通底しているのであろう。そのような「ヒロシマ」こそが大江氏が思う「戦後世代」の絶望を極限までに具体化したものであるほか、さらに人間個人の葛藤、「障害」と向き合う苦悩が加わったものであった。それを体験した人々にとっては、「政治的力関係」を経由するのは再び権力体制と戦争の渦に巻き込まれた状態に等しい状況であろう。そうした広島
島の被爆者たちの絶望した心境、抵抗していく生き方などは大江氏が探っていた正しい人間としてのモデル、「戦後世代」と「障害児」の問題さえ越えられる希望を示す道標であったことに気付いたのであろう。

では、広島
島の被爆者たちの「いかなる権威とも関係がない」²⁸「人間的な」「威厳」は一体どういうものか、どう「屈辱」から離れたのだろうか。結論を先に挙げると、「屈辱」と「威厳」とは必ずしも対立するものとは限らない。兵士の自殺のような極限状況で物事を考える昔の方法を「子供っぽすぎる」²⁹と認めた大江氏は二つの言葉に更なる解釈を求めた。そこで、広島の人たちを介して、大江氏が語る「威厳」と「屈辱」は単純な二者択一から離れ、常に二重の意味が見出された。要するに、「自分の感じている恥あるいは屈辱に、そのままみずからの武器としての価値を与えようとする」³⁰広島の人々は原爆という人間が受けられる最大級の凄惨、「恥と屈辱」を忘れずに記憶、記録し続けてその意味と価値を見出そうと試みていた。そのような「威厳」ある人たちを大江氏は「正統的な人間」と呼び、「決して絶望せず、しかも決して過度の希望をもたず、いかなる状況においても屈服しないで、日々の仕事をつづけている人々」³¹と定義した。

その代表的な一人は被爆者であると同時に、患者を絶え間なく治療してきた原爆病院の重藤文夫初代院長であり、彼は「原爆病院長という権威にもとづく威厳ではな」³²く、「人間的な威厳」を持つ人だと大江氏に認識されていた。そういう重藤氏と交わした数々の対話で被爆直後のことも語られた。当時原爆症の治療方法について何も知らなかった医師たちの一人に自分たちの努力が無意味ではないかと問われ、重藤氏は回答を引き延ばした結果、医師が返答を待たずに自

²⁸ 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（岩波書店、1965年）98頁。

²⁹ 同上、98頁。

³⁰ 同上、100頁。

³¹ 同上、186頁。

³² 同上、93頁。



殺した。その遅すぎた応答を大江氏にこう伝えた。

「目の前に苦しんでいる人たちがいる。そのとき自分らには彼らを治療するほかないではないか」、自分はそういおうとと思っていた」と。それは先生が（中略）若い小説家に、「君の子供はそこで苦しんでいる。この場合、かれのために闘うほかないじゃないか」といおうとされたのであつたろうと思います。³³

大江氏はそれを「障害児」の息子を救えるただ一人の自分に告げる指摘と受け止め、東京に帰った途端、病院に長男の手術をしてもらった。「障害児」がもたらした巨大な脅威と「死の恐怖」、そして「戦後世代」を困らせてきた「敗北」と「あいまい」の問題は重藤院長を代表とする広島「正統的な人間」の生き方に乗り越えられた。どれだけの絶望であっても、氾濫する虚しい希望の期待へ逃避するのではなく、きちんと向き合うことによって見出せる本質的な希望が彼たちの生活中に存在していた。そうして広島の人たちの肖像の描写を「聖人化」と批判されたこともあるが、大江氏が「驚きに怯まず小さな不思議にも喜ぶ、まづリアルに人間らしい人たち」³⁴と説明していたように、その生き方には単に「生きている人間」の証があり、その努力が命のリングを延続させていくのであろう。

こうして、作家をずっと苦悩させた絶望はその文学の基盤になり、広島という戦後と直接連結した土地をモデルとして、彼の人間に対する価値観が固まった。大江氏は後に以下のような言論でこの過程を明示した。

僕は人間はそのように生きるものだということを広島で学んだ。原爆で苦しみながら屈することなく、自らを恢復（かいふく）させ、仕事を成し遂げる。重藤先生をはじめ「無名戦士」とでも呼ぶべき人たちに何人も出会った。若い父親としての自分自身が立ちなおるきっかけを得た。息子の光とどう生きていくのかを重ねた。広島を考えることが生きていく、また、僕の文

³³ 大江健三郎「癒される者」『あいまいな日本の私』（岩波書店、1995年）29頁。

³⁴ 大江健三郎「不思議だった！ という医師」『定義集』（朝日新聞出版、2016年）233頁。（初出『朝日新聞』朝刊2010年10月19日23面。）

学の根拠地ともなった。人間のモデルに立ち返って考えて書き、一つのモデルを示すということです。³⁵



「癒される者」という講演で、大江氏はアメリカ心理学者のロバート・J・リフトンの命と死に関する思想展開を提起し、それを通して彼が広島での経験を解説してみた³⁶。死とは、無に帰結し、命の終わりという一般的な考え方以外に、生のモデルとして死は停滞、切断、解体という否定的象徴も含まれると述べられるが、生きている死という心之感覚麻痺状態を広島で発見された。最後は希望に繋がる鍵として人間の自己更生、再生の要素と見なされた死である。息子のことと原水爆禁止世界大会の取材で困憊しきった大江氏が重藤院長と出会う前には二つ目の麻痺感覚に陥ったが、広島の人々と対談した後、自分の絶望を息子の未来、新しい命への期待と救済に転換した。こうして、大江健三郎の「敗北」と「障害」による絶望は人間の可能性という希望へ転向された。1963年に初めて広島を訪問した経験で、「戦後世代」の問題と戦争のジレンマから「障害児」の絶望に至るまでの大江氏の中にあった葛藤の解消口がこのように浮かび上がったのである。

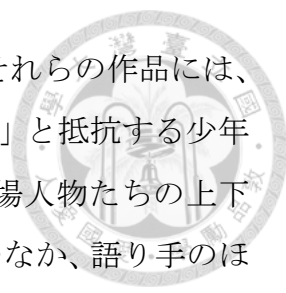
3. 「空の怪物アグイー」における語り手「ぼく」と音楽家D

さて、1963年の大江氏の体験を一通り論じたが、それがどのように小説に反映したかを解明するため、再び「空の怪物アグイー」を見てみよう。ストーリーの内容を簡単に要約すると以下ようになる。雇い主の音楽家Dの外出に付き添うアルバイトを受けた語り手の「ぼく」がDの想像する世界にだけ存在する、かつて自分が見殺した障害児の息子の幽霊「アグイー」をめぐる一連の出来事に出会い、Dの事情と心情に引き込まれていく。最終的にDが自殺に近い状態で生命を終え、「ぼく」は戸惑いながら、10年間過ごし、最後に「アグイー」と決別することによって、今の生活と向き合うことを選んだ。

前に言及したように、本作はそれまでの大江氏が短編で使っていた手法で「障害児」の問題を描いたものである。その特徴と書き方についてはすでに第二章で

³⁵ 大江健三郎「大江健三郎さん「ヒロシマ」を語る」(『中国新聞朝刊』2010年10月10日7面)

³⁶ 大江健三郎「癒される者」『あいまいな日本の私』(岩波書店、1995年)23-24頁。




「奇妙な仕事」を通して詳しく論じていたが、簡単に言えば、それらの作品には、「戦後世代」の問題が中心となり、権力構造による「監禁状態」と抵抗する少年と青年たちの無力と苦悩が描かれ、能動と受動の二重性が登場人物たちの上下関係の中で反復されるのが共通している点である。その手法のなか、語り手のほとんどは一人称の「僕」であることも注目すべきであろう。それは作家の世代を表すために採っていた視点でもあり、彼自身の経験と重なるための仕組みとも見なすことが出来るだろう。そして、大江氏自身も認めたように、『空の怪物アグイー』は、しっかりと『奇妙な仕事』以来の「僕」のナラティブを³⁷用いている。つまり、その手法は本作「空の怪物アグイー」にも用いられており、それ以後の作品、特に『個人的な体験』と異なる点でも言える。この部分に関して、趙軒求是両作を検討する際に、「障害児」の父親音楽家Dを中心に比較するという従来の研究と異なり、次の通りに語り手「ぼく」の特性を指摘していた。

大江が自ら指摘しているように『空の怪物アグイー』の直接的な語り手として働いている「ぼく」に着目すると、その類似性は薄くなる。むしろ、それは一九五〇年代後半、学生作家として発表し続けた「都市」の中で奇妙なアルバイトをしている「ぼく」を思わせる。大江は作品活動の初期、つまり一九五〇年代後半には、「ぼく」という語り手を主に使用した。そして一九六〇年代に入ってから、性と政治に関する作品を書き続けながら三人称の語り手を使い始めた。³⁸

引用文のように、「空の怪物アグイー」を検討する時に、初期短編との相似性を無視できない。語り手だけではなく、他の人物もほとんど代名詞で称したのは第二章で「奇妙な仕事」を分析する時にも説明していた。命名しない理由は読者に向ける視線の存在が大きく、また、個人ではなく、社会中の各階層に意識を向いたと思われる。「空の怪物アグイー」に同じく一人称語り手「ぼく」と代名詞で呼称される人物たちが登場している以上、それぞれが各階層の象徴になり得

³⁷ 大江健三郎『私という小説家の作り方』（新潮社、2001年）56頁

³⁸ 趙軒求「大江健三郎論—物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を視座として—」（中央大学、2014年）31頁。



ると論じられる。さらに言えば、各階層間における力関係の構図も登場人物たちを通して「空の怪物アグイー」に込められていたと考えられる。とはいえ、1963年以後に発表された本作が初期作品と全く同じ書き方で物語を編み出したというわけでもなかった。

相違点は主に二つある。まず、「ぼく」という語り手の「《時間》」(261頁)が二つに分けられ、28歳の「ぼく」が18歳の「ぼく」の経験を回想するような形で話が構成されており、今までの短編ではあまり見ない手法である。そして二つ目はアルバイトを引き受ける動機である。「奇妙な仕事」や「死者の奢り」などの大学生「僕」が興味本位でアルバイトに応募していたのに対し、「空の怪物アグイー」の「ぼく」はある本を買うための費用に困り、その給料を目当てに面接を受けていたのである。その消極的な態度は他人経由でもらったアルバイトの機会であり、しかも内容については面接を受けるまで何もかもが不明なままである点から考えれば、不自然ではないと判断できる。しかし、この相違が生じた以上、初期のアルバイト小説から変わり、単なる「戦後世代」の問題を物語るストーリーではないことも暗示されていたのではなかろうか。こうして見ると、語り手「ぼく」と初期短編の「戦後世代」の関係性についてはやはり改めて考察する必要があると感じられる。

一方、28歳の音楽家Dとその死んだ赤んぼうの幻影である「アグイー」は事件の中心となっており、ほかの脇役と違い、両者とも一応名前らしい名称がつけられ、「世代」ではなく、「障害児」の問題は「個人」的なことを示した。初期短編の論理性から考えれば二人はかなり異質な存在であり、特に注目すべきであろう。この背景の設定は言うまでもなく、大江氏自身の「障害児」経験に基づいているが、そこに「ヒロシマ」の影響がどういう風に投影されているかという問題は今までの研究ではあまり議論されていなかった。「障害児」と「ヒロシマ」の密接な関係を考慮すれば、Dのことは広島の実験に繋がっていくと予想できる。そうすると、初期の性質を継承してきた18歳の「ぼく」とこの音楽家Dの出会いから別れるまでの経過はほぼ本作の全部の内容となるので、二人の交流の進展自体はすなわち、作家が「戦後世代」の問題と「ヒロシマ」の価値観の間に行われた転換の過程を意味すると推察できよう。それを解明するため、続いては語り手「ぼく」と音楽家Dの背景の解析から入り、周りの人物とのやり取りにある

力関係を手がかりに、二人が初めに持っていた性格と思想を明らかにする。



3.1. 朝鮮戦争と「戦後世代」の背景

執筆時期から考え、作中の現在を 1963 年と推定していけば、28 歳の語り手「ぼく」は当時の大江氏と同年であり、同じ社会背景を辿ってきた「戦後世代」の一人と言えよう。そして、10 年前に遡る《時間》は物語の主舞台になっているが、その時代の選択はランダムなものではなく、実は重大な意義が潜んでいるとうかがえる。なぜなら、1953 年と言えば、朝鮮戦争が停戦を迎えた年でもあった。D の障害を持つ息子がそれ以前に生まれ、かつ見殺されたというのなら、その赤んぼうは朝鮮戦争中で短い一生を過ごしたことになる。看護婦による「アグイー」の説明を振り返れば、「犬」と「警察」を畏れるのはかなり唐突な設定かもしれないが、朝鮮戦争中に設けた「警察予備隊」と軍需景気に伴い、軍用犬が大量に日本に輸入されてきた事実³⁹を考慮に入れれば、「犬」と「警察」の象徴は朝鮮戦争に対する大江氏の記憶と結びついていると推論できる。また、「奇妙な仕事」における「犬」の「性的」なイメージとの連結を顧みると、「アグイー」が感じた恐怖はおそらく、デビュー作で「僕」が「犬の群れ」に対して怯えていた「戦後世代」の未来＝無力な「性的人間」に繋がる「あいまい」さと同様であると考えられよう。

実は、「犬」と「警察」は中編『不満足』、や長編『個人的な体験』などの作品にも直に朝鮮戦争の時代背景として登場している⁴⁰。世界を揺るがすこの戦争についても第一章で「戦後世代」と民主主義の最初の挫折として少し触れたが、当時の社会状況に関して、大江氏は後に以下のように回想した。

ぼくが新制高校に入った年、朝鮮動乱が始まった。そしてその直後、警察予備隊が発足した。ぼくはこの時期に、自分があじわった不安と動揺の酸っぱい味を忘れることができない。ほぼそのころから、ぼくが大学に入るまで

³⁹ 「50 年史」編集委員会『JKC50 年史』（社団法人ジャパンケネルクラブ、2000 年）135 頁。

⁴⁰ 「不満足」と『個人的な体験』に朝鮮戦争が勃発した時期に地方都市の不良少年であった主人公バードと友人の同性愛者の菊比古が精神病院から逃げ出した「犬」を怯える狂人を一晩中探し回ったことがあった。「警察予備隊」に強制入隊させられる噂に怯えた菊比古は途中であきらめたとか。朝鮮戦争が日本の社会に起こした不安が詳しく描写されていた。

のあいだに、警察予備隊は、保安隊へ、そして自衛隊へと、ひとつずつカエル跳びしながら、既成事実をかためて行ったのだが、そのカエル跳びのたびに、ぼくは自分のモラルが嘲弄されているように感じた。⁴¹



戦後民主主義者と自認した大江氏がここで提起したモラルはもちろん民主主義と戦争放棄そのものであり、その不安と動揺は「戦後世代」が戦争および権威の復活に対する恐怖と批判が働いた結果と見受けられる。「ぼく」は大江氏と同世代である以上、「戦後世代」の問題を回避できるはずがなかった。朝鮮戦争のこともまた同様、「犬」と「警察」を畏れているのが「アグイー」だとDが述べたが、実際に想像された「アグイー」が恐怖したかどうかを読者が知るはずがなく、逆にその恐怖を自身に体現したのはむしろ考え出した張本人の音楽家D、そして、「看護婦の注意を思い出して緊張した」(275頁)「ぼく」と考えられよう。この意味において、「犬」と「警察」の表象は戦争と権威の存在を暗示する役割を担っており、それがもたらした問題と恐怖は二人の主人公を通して浮上していたと推論できる。

また、Dと「ぼく」が見せた「戦後世代」の性質はこの時代背景だけではなく、逃亡兵のジレンマも実は二人の意識からうかがえる。銀行家の面接を受け、その仕事内容について警戒した「ぼく」は相手に見抜かれ、「自分の臆病さを発見された兵士みたいな気分」(263頁)となった。この表現は一見普通の比喩と思えるかもしれないが、朝鮮戦争の背景と相まって、大江氏にとっての戦場の意義と第二節に提起した自殺する兵士のエピソードから推察すれば、「ぼく」が銀行家と対峙するこの場面は作家が戦争に感じたモラルのジレンマの反映だと捉えられる。同じく、Dに関しても似た描写が見られる。「ぼく」が初めてD邸に赴き、Dと一緒に外出しようとした際、振り返ると、看護婦が「逃亡兵を見おくる残留者のような様子」(267頁)で二人を眺めた。逃亡兵のイメージはすでに言及したように、初期から使われた表現であり、自殺せずに降伏する兵士と同じく「敗北」の「屈辱」を背負って生きる人々を指す。他人の目からそういう風を感じたのは「ぼく」であるが、Dの事情についてはまだ詳しく知らされていない彼は看

⁴¹ 大江健三郎「戦後世代と憲法」『大江健三郎同時代論集1』(岩波書店、1980年)62-63頁。

護婦の視線を通して、この音楽家の「屈辱」をそれ程強く意識していたとうかがえる。そして「屈辱」を敏感に捉えられた理由の一つは、朝鮮戦争によって尖らせられた「戦後世代」の神経とも考えられよう。

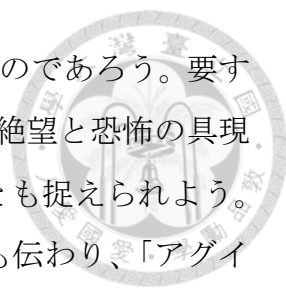
ところが、28歳の音楽家Dは18歳の「ぼく」と違い、年齢的に「戦後世代」と無縁のはずだったのに、彼の「屈辱」と逃亡の姿勢はどこから生まれたものであろうか。それはおそらく赤んぼうの幻影「アグイー」にまつわる一連のスクヤンダルと無関係ではない。「モラルの点からいえば、再びスクヤンダルの毒でこの銀行家の家族が汚されないように見張る役目が、このおれの仕事というわけか」(263—264頁)と「ぼく」が考えたように、Dはそもそも世論と家族から一つの「汚点」、すなわち、力関係の低下を強いられた原因である「屈辱」として見られていた。外側の観点ではあるが、その軽蔑の視線は有名人の音楽家にも十分に伝わっていたはずであろう。その上、「アグイー」は「カンガルーほどにも大きい、木綿の白い肌着をきた肥りすぎの赤んぼう」(271頁)と想像され、その外見は非常に巨大かつ非現実的なものだと言っても過言ではない。前に取り上げた「戦後世代」が未来の戦争に対する恐怖、そして大江氏が思い描いた「障害児」がもたらす「頽廃の感覚」⁴²はまさにそのように見られていた。「現実世界の恐怖」⁴³という渡辺広士の「アグイー」への捉え方及び、本作に「存在的な不安」⁴⁴を感じるという松原新一の評価などを加えれば、「アグイー」がこのように想像された理屈は根本的に初期短編で描かれた「死と存在」の恐怖から由来するものと論じられる。「障害児」の生死に脅かされ、共に生きていく方法を考え付かず、「死と存在」への恐怖に負けた音楽家は赤んぼうを見殺した。そういうDが「センチメンタルな狂人」(261頁)と見なされたように、彼を捕えた一種の狂気、あるいはヒステリーは前に触れた大江氏が説明した彼自身の恐怖に対する反応と通じている。

さらに、Dが「ぼく」に与えた第一印象は「犬に似ていた」(266頁)というのも一つの証明になるだろう。犬のような自分が犬を恐れる赤んぼうの幽霊を想像するという矛盾はD自身が赤んぼうを見殺した一種の罪悪意識の印であるほ

⁴² 大江健三郎「未来へ向けて回想する—自己解釈(二)」『大江健三郎 同時代論集2』(岩波書店、1980年)281—282頁。

⁴³ 渡辺広士「解説」『空の怪物アグイー』(新潮社、1972年)286頁。

⁴⁴ 松原新一「大江健三郎」『昭和の文学』(有斐閣、1972年)305頁。



か、彼に犬の象徴する「性的人間」の無力さをも見られているのであろう。要するに、「アグイー」はDにとって「障害児」がもたらす巨大な絶望と恐怖の具現であり、Dが絶望に屈伏した「性的人間」である事実の投影とも捉えられよう。そして、「障害児」の恐怖感は後に「戦後世代」の「ぼく」にも伝わり、「アグイー」はこうして二人の橋渡し役を担っていくようになったとうかがえる。その共鳴を成功させた理由はすなわち、恐怖の感覚と「屈辱」のモラルと言えよう。

以上の分析から、Dの「障害児」に対する絶望は「ぼく」の「戦後世代」の問題意識と思考方法に通じ合い、そして、それぞれの原因は戦争と「障害児」だが、物語が動き出した10年前の1953年に両方ともすでに力関係において「敗北」し、「屈辱」を味わっていたことは明らかであろう。しかしそれと同時に、両者とも権力体制に対して対抗意識を抱えている可能性も高い。次節では力関係の構図を把握することを図り、二人の描写を中心にいかなる権威と対峙しているかについて分析していきたい。

3.2. 権威と対峙する「ぼく」とD

小説の中では「戦後世代」の課題は正面から語られてはいなかったが、「ぼく」という人物を通して示されていると思われる。まず、最初に「ぼく」がアルバイトに応募した原因である『魅せられたる魂』という本の魅力は無視できない。「ロマン・ローランにいささかの興味もよせていなかった」(262頁)と「ぼく」が弁明したが、おそらくそれは彼のフランス語のレベルに原因を帰することができるだろう。無意識に手に取って自分のものにしたい理由は表紙と装丁だけだと言い難い。少なくとも内容に最低限の知識を持っているからこそ欲求が強まったと考えられる。この本はフランスの作家ロマン・ローランの長編小説であり、主人公の女性は世界中の思想を自分の人類愛に融合し、反ファシズム、反帝国主義運動に励んだ。中條忍は「富裕な中産階級の娘から母として、女性として、政治的、社会的虚偽を見破り、妥協を拒否し続ける彼女の死は、「松明を掲げる宇宙の母」の死であった」と解説し、「第一次世界大戦を挟む動乱期のフランス社会を背景に、独立する女性の正しい生き方を描き出した作品として価値は大き

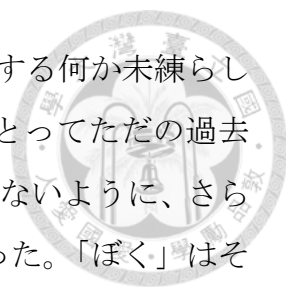
い」と評価した⁴⁵。たとえ「ぼく」が内容の詳細を知らなくても、作者がこの本を介して自分の戦争に対する思想を伝えたいのも十分にあり得る。戦後社会の虚偽を見破り、正しい生き方を提示する点ではまさに大江氏が成し遂げたい仕事の一つであり、「ぼく」という人物が果たすべき役割と言えよう。この本を彼の動機とすることが、実はストーリーの方向性を示していたとうかがえる。

権威との対峙はこれだけではなかった。Dの父親は銀行家といういかにも権勢と連想させる家柄であり、面接で呼び方が「息子」から「あれ」(263頁)に変わり、Dのことより家族の名声を心配している点から、親子二人は家族の上下関係において対立していることは明らかであろう。一方、「ぼく」とDの間にも雇用の上下関係が存在するが、Dが家族の権威の対抗者である点において二人は同じ立場になっている。銀行家の愛想のない面接を受けた「ぼく」は「たれか重要な人物に会ったあとのジュリアン・ソレルみたいに屈辱感に歯がみし身震いした」(264頁)。ジュリアン・ソレルというのはフランスの小説家スタンダールの小説『赤と黒』⁴⁶の主人公であり、彼は権力を求めようとしたが、最終的には昔の自分の行いに邪魔され、挫折してしまったのである。この人物を通して、「ぼく」の反権威的な一面が強調されたが、その抵抗が「敗北」し、屈伏してしまったことが再確認されたのである。また、この面接の経験のせいで、28歳の「ぼく」は「大学を卒業しても就職試験をうけることをせず、自由業を選んだ」(264頁)と述べたが、それは言い換えれば、Dの死亡以上に、権威を持つ強者に負けたことからのショックは彼に就職のトラウマを与えたと解釈できる。そこまで権威との対抗に執着しているのは、「ぼく」が「障害児」の問題を苦悩し始める以前、彼の本性に「戦後世代」の権力への嫌悪が深く根付いていたと言えよう。

家族の権威と言え、もう一人検討する必要がある。貧民の息子の「ぼく」への第一印象として、「日本のハイソサイエティ全体に抵抗する勇氣、ルイ十四世を脅した肉屋ほどの勇氣が必要だった」(272頁)と抵抗感を与えるほど形容されるDの元妻であった。その女性は「アグイー」の正体と由来を説明したが、ほぼすべてがDに対する批判と自分の無実を主張するものであり、赤んぼうの幽

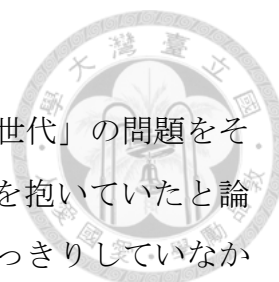
⁴⁵ 中條忍「項目 魅せられたる魂」『日本大百科全書』(小学館、1988年)337頁

⁴⁶ 本論文はスタンダール著・小林正訳『赤と黒(上)(下)』(新潮社、1957年・1958年)を参照している。



霊「アグイー」にはいささかの憐憫も向けず、自分の子供に対する何か未練らしい感情も見せていなかった。まるでその消失した命は彼女にとってただの過去の記憶の映像、もしくは忘却されるべき「屈辱」の欠片でしかないように、さらに最後に自身の父親が新聞社社長になることを「ぼく」に誇った。「ぼく」はそのいかにも権力を威張る傲慢な態度に反発を試みたが、彼が家族関係で「敗北」した D と共同戦線を張っているため、その抵抗は無為になるしかなかった。ここまでの分析をまとめてみれば、D は明白に赤んぼうを見殺した罪悪意識を背負い、現実世界で「敗北」からもたらした「屈辱、恥」に縛られたのに対し、「ぼく」は自身を見極められるような戦場に出会えず、絶望と正面から向き合うことのなかった「戦後世代」であり、ただ再び戦争が起こることを無意識に怯え、権威に制圧されながらも「屈辱」に抵抗し続けていた。

ところで、D の元の妻に対して、「全体に肥満しすぎて丸っこく威厳はなかった」(272 頁) という「ぼく」の表現にモラルの言葉「威厳」が出たのは作中で二回目となり、しかも「威厳」そのものである老人と対照になっている。老人は新宿の街で何かのパフォーマンスでひたすら廻っており、人々の注目を集めている。周りの観客の顔色は夕暮れの気配で暗くなったが、老人の顔だけが「紅潮し汗ばみ湯気をたてんばかり」(269 頁) だと、生気に満ちる様子が描かれている。その廻りは何か得られ、もしくは何かを伝えられるものではなく、D もすぐ空から降りた「アグイー」に気を散らされたが、ひたすら廻る姿は何処かに広島に被爆者が核問題に対して「空回り」の努力に同質なものと感じられる。このような描写を通して、作家が感銘を受けたリアルな「人間的」な「威厳」の意味の片鱗も滲み出たのではないだろうか。それに対して、D の元妻は権威の象徴として見なされ、「威厳」と無縁であった。前の論述を踏まえれば、「威厳」とは大江氏が広島で発見した自分の支えになる「人間的」な思想であり、老人と元妻の比較からも権威と相反するモラルであることは明らかであろう。「ぼく」と D も権威と各方面で対峙しているが、「戦後世代」と「障害児」の問題で受けた「屈辱」は二人を「威厳」の生き方に導いてくれなかった。大江氏の経験を参考すれば、二人の絶望を希望に転じさせるには、「屈辱」を「威厳」に変える「ヒロシマ」の思想が必要であろう。それが一体どういう風に影響力を発揮したかについては物語中に二人の関係性の変化から次に考察してみる。



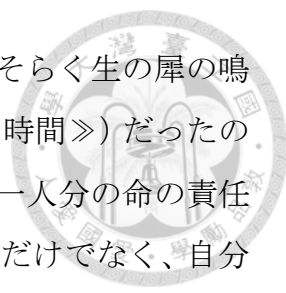
4. Dと「同化」していく「ぼく」の「アグイー」との決別

さて、前節でDには「障害児」、そして「ぼく」には「戦後世代」の問題をそれぞれ抱えている人間であり、両者とも権威的な人物に反感を抱いていたと論じたが、1963年の「障害児」と「ヒロシマ」の影響はまだはっきりしていなかった。「障害児」の問題はDによって語られていたものの、その絶望に対して彼が採っていた行動は分析する余地が残されており、しかもそれは「ぼく」にもかかわっていることならなおさら、二人の間に発生した出来事を一度整理すべきであろう。「戦後世代」の「ぼく」はどのように「障害児」の問題を考えるようになり、Dの感情と接触していくか、そして、なぜDは「ぼく」を連れて、自分の幻想を色々と教えた上で自殺したか、また、最後の結末において「ぼく」と「アグイー」との決別の意味などのことを、明らかにする必要がある。従って、ここからは「ぼく」、Dおよび「アグイー」との交流に注目していきたい。

4.1. Dと「ぼく」の「同化」

雇い主である音楽家Dは有名人であろうが、長く深く付き合っていた二人の女性の言及によると、彼は知名度の権威を振るう人物より、他人に甘えがちな、自分のことに専念しているエゴイストと言った方が近かろう。彼は家族の権力構造に順応できず、情人である映画女優のところに逃げ込もうとしている点は、「性的人間」の無力さを露呈している。似たような「戦後世代」の性質を持つ「ぼく」も彼女と面会した最後、未熟者という弱者と見なされた「屈辱」を覆そうとしたが、女優を犯そうとするその行動は「卑劣的な英雄意識」に駆使され、「性的人間」の行動不能の無力から「政治的」になろうとした時の犯罪者の意識に近付いたと思われる。幸い、女優はその暴行をうまく受け流した。こうしたことから、女優は高い社会地位の権力者と一番近い存在でありながら、その不自由な閉塞感を深く理解し、上位の強者より「性的人間」の生活を受け入れた人物である。だからこそ、Dは元妻より、女優と親しくなり、彼女の方に愛情が生じたと言えよう。

ところが、Dと女優の逃避的な関係は彼を現実世界に引き戻す赤んぼうの誕生により破滅してしまった。元妻はDが自分と彼女を「恐しい災厄」(273頁)＝「障害児」から守るつもりで医者と相談して赤んぼうを見殺したと語ったが、そ



の個性から考えれば、Dが真に守ろうとしたのは他人より、おそらく生の羂の鳴き声を自分で収録しに行く自由かつ冒険的な人生(=未来の《時間》)だったのであろう。しかし、赤んぼうの死によってDの人生にはもう一人分の命の責任を背負わせられた故に、彼は家族との現実世界に絶望し、権威だけでなく、自分のエゴイズムにおいても「敗北」した。そうして、Dは未来に生きられる自分のアイデンティティ、もしくは存在価値を失い、子供が死んだあの《時間》に彼のすべてが止まったのであろう。「一万年前の世界に旅行した人間」(271頁)だと自分を形容した彼であるが、実は未来から来たのではなく、過去に残されていたと考えられよう。

音楽家Dに対して、「ぼく」は彼と共鳴するための第一条件である「権力と抵抗する立場」を「戦後世代」の出身で満たされている。これは単純な偶然というより、そもそもアルバイトの募集条件を意図的に年代的にまだ学生である「戦後世代」の人に設定していたかもしれない。Dと「ぼく」の雇用関係はこの前提のもとで成立し、その内容が基本的にDの記憶巡回という一つの事件だけで構成されていた。記憶中の場所をめぐり、作った曲を焼却し、その全てはDが今現在の自分の存在を一つずつ削るための手順と思える一方、「ぼく」を雇う理由は不明なままであった。もし「ぼく」が最後病院で疑惑した通り、Dは自殺のために綿密な計画を立てていたとしたら、外出するための条件の一つである監視員を看護婦、もしくは銀行家の部下に任せてもよかったが、わざわざ無関係の第三者である「ぼく」を巻き込んで、彼と一緒に外出したクリスマスイブで実行する必要性はあるのだろうか。このDの選択の動機は物語の最後まで本人の口から明かされず、一部謎のまま残されていたが、少なくとも、「ぼく」はDにとって不可欠な存在であったに違いない。となると、やはりすべてを解く手がかりはDの考え方ではなく、「ぼく」がどう感じたかということにある。どんな目的であろうと、「ぼく」からすれば、このDとの巡回は彼を立場の共鳴から人生の共有に取り込んでいく旅になったと見受けられる。元妻との対話が終わって数日後、『魅せられたる魂』を買った「ぼく」は次のように思った。

ぼくはこのアルバイトを愛している自分を見出した。ぼくの雇傭主のDを愛しているのでもなければ、かれの幻影のカンガルーほどもある赤んぼう

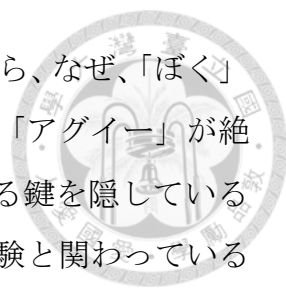
を愛しているのでもなく、単にこのアルバイトを愛している自分を。(275頁)

この時点で、「ぼく」はDと「アグイー」を否定しながら、仕事内容を楽しんでいる自分を見出したが、それは彼自身がいろいろな場所に行き回されるのを楽しんでいるというわけではなく、Dが行ってきた場所、やってきたことは全部恋しい自分の人生を振り返るようなものだから、Dとシンクロしつつあった「ぼく」は「好き」以上の「愛」を言い放ったと考えられよう。そして、後の犬との出会い事件に繋がり、「ぼく」が自分の恐怖より、Dの悲惨な姿を想像してから涙を流した。このような現象について、趙氏は二人を映した舞台の移動から関心を向け、二人が「同化」していると解説した。

都市と自然という閉ざされたトポスは、初期大江の作品から常に読み取ることができる。そして、二人が移動していくトポスで「二八才の音楽家D」は「センチメンタルな狂人」のイメージを維持しながら「ぼく」との関係に主導的になる。その結果、「二八才の音楽家D」を観察することになった「一九才のぼく」も「二八才の音楽家D」の考え方に次第に同化していくことになる。⁴⁷（下線は筆者による。）

この「同化」の過程は「アグイー」に対する態度で更に明らかに現れている。「ぼく」は最初の好奇心と不信から警戒、さらに懐疑、同情、引き込まれ、最終的に「信じてしまうところ」(286頁)になり、彼がDの幻想を自分のものにするほど、Dになりきったように語られている。こうして、「アグイー」という「障害児」がもたらした恐怖と絶望の幻影はD自身だけのものではなく、「ぼく」に受け継がれていく。しかし、最後のDの交通事故により、主人公は突然それまでの共感に裏切られたような状況に陥ってしまった。そこから、力関係の共同戦線が崩壊し、Dから引き受けた家族と現実世界に対する嫌悪感、「障害児」に対する罪悪感と恐怖感を十年間で引きずった結果、その「屈辱」の絶望を子供たちにぶつけてしまったと見受けられる。

⁴⁷ 趙軒求「大江健三郎論—物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を視座として—」(中央大学、2014年) 34頁。



とはいえ、結末と冒頭の28歳の「ぼく」の語りを思い返したら、なぜ、「ぼく」はDと異なり、生きて「アグイー」と離別できたのだろうか。「アグイー」が絶望の恐怖のメタファーというのなら、この別れは希望に繋がる鍵を隠していると推論できる。その転機は無論、大江氏の1963年の広島の実験と関わっていると考えられ、次節でその影響の解明を試みる。

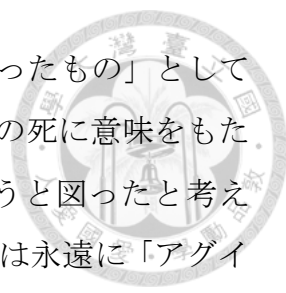
4.2 「アグイー」との決別

最後の結末にあたる「ぼく」と「アグイー」の離別の意味を見出す前に、まずは想像された幻影の世界を明らかにしなければならない。「空の世界」はDによると、喪ったものが浮かんでおり、努力と犠牲を払わなければ見ることも感じることもできない場所である。広島の実験を取り入れて説明すれば、被爆者たちが喪った命、失った体と生活は広島「空の世界」を構成した⁴⁸。そして、社会に受け入れられず、忘却されかけた「恥や屈辱」を記録し続ける努力を払い、彼らは喪ったものを「威厳」のある人生に変えた。それは悲惨、絶望への抵抗であり、生きる証を見せるための行動であった。つまり、広島「空の世界」を展示することにより、「威厳」ある「人間的な」価値を取り戻すことができたのである。

それに比べ、赤んぼうを見殺した「恥と屈辱」の絶望から「威厳」のある自分を取り戻せないDは、元妻が語ったように「かつて赤んぼうを生きさせることを拒否したとおなじように、こんどは、自分が積極的に生きることを拒否し」

(273頁)、「アグイー」が生きる「空の世界」に「逃亡」することを選んだ。「障害児」と共に生きていくことができなかった音楽家Dはせめて過ぎ去った昔の《時間》＝「空の世界」にて息子の側にいようと思ったのであろう。それを達成

⁴⁸ 『ヒロシマ・ノート』で若い被爆者の村戸由子の例が取り上げられ、「ケロイドが村戸さんの顔を変えた。そこで、成長した彼女の日々の希望は、過去の、傷ついていない自分の顔を、見たいということであり、彼女自身の言葉を用いれば、《失われた美》を回復したいということであった。」と記録されていた。このように、広島の人々が原爆をめぐる一連の災難と悲惨に会い、命や自分の身体の一部などを永遠に失ってしまったと、大江氏の記録からたくさんの例が見られる。そして、作家は「このような、うしなわれた過去への指向と、それにつづく絶望の時は、いわば、人間をもっとも神経症的な深みに、近づけるものであろう。そして、そのような危機的な状態の人々は広島に数多いことにちがいない。そのような人々を狂気や自殺から救助する、積極的な手立てが、われわれにあるというのではない。」と述べた。こうして、広島の被爆者たちの失ったものに催される狂気は提出されたが、「空の怪物アグイー」の音楽家Dの狂気にも通じていると考えられ、もし広島に彼が想像した「空の世界」があれば、それは間違いなく被爆者たちの「うしなわれた過去」に満ちていると言えよう。



するために、現在の《時間》にいる自分を一つ代償にし、「喪ったもの」として「空の世界」に送っていく。そうすることによって、赤んぼうの死に意味をもたらすとともに、もう生きられない自分の人生に意味を付けようと図ったと考えられる。ただし、彼の身体は今現在の世界にいる限り、その魂は永遠に「アグイー」と共にいることが不可能であり、間違っただけの行いをあの世界でやり直すためには、自殺以外に道がなかった。しかし、現実世界においてDは唯一赤んぼうをきちんと記憶し、その証を表せる人間であり、彼の死は言い換えれば、幻想「アグイー」の存在の消失と同義すると言えよう。勝手に自殺することはつまり、「アグイー」を二度と殺すことになる。そのため、Dはこの世界での自分の代役を探さなければならない。

広島の被爆者たちが記録と記憶を発信する時、受信する相手がいなかったら意味がないように、その考えは引き受けられなければ、ただ忘却され、風化していく「屈辱」となるだけであった。それを覆すには、大江氏が説いたように、いかなる政治的な力関係にでも頼ってはいけない。Dと「アグイー」の場合も同じく、喪ったものに満ちている「空の世界」に行くと言っても、かつて存在していた痕跡までの消失は困るので、想像されたあの世界が誰かのところの中にずっと記憶されることを望んでいたのである。ところが、彼らを縛っていた権力構造に近い家族、元妻と映画女優は誰もその役割を担えないと思われる。よって、選ばれた受信者は関係のない第三者でないといけなく、すなわち、Dと「同化」していく「ぼく」は適任者として狙われたのである。「戦後世代」の問題意識をもともと持っているため、「アグイー」が示した「死と存在」の恐怖を簡単に信じてしまう「ぼく」はその絶望の暗闇を意識した時点で、「障害児」の存在記録の証人となった。犬の事件で「われわれのアグイー」(282頁)と言ったように、「ぼく」の受信機能に気付いたDは自分の最後の使命を果たすタイミングになり、もう現在の《時間》に留まる理由がなくなると自覚した。とはいえ、最後の交通事故は意図的か、それとも単純な事故だったのか。前も言及したように、Dが明言しない以上、その動機はあくまでも謎の範囲に止まった。しかし、事故の直前に、「ぼく」がDからもらったクリスマスプレゼントの腕時計はDの今までの《時間》を頼まれたように考えられる。そして、事故が発生した後に、病院でDの微笑を「好意にみちた悪戯をするとき」(286頁)のものと「ぼく」が感

じたところに、「アグイー」を託す父親の意図が捉えられよう。

よく考えてみれば、Dの行動はただ自分の命を「屈辱」の生贄にしたのみのもので、死の絶望に屈伏して逃げた彼は救済されることがなく、「威厳」の老人のように毎日「正統的な人間」として生きることにも背向き、「屈辱、恥」の責任を「ぼく」に押し付けたただけであった。しかし、力関係における「敗北」の「屈辱」が理解できるとはいえ、そもそも「戦後世代」の問題を抱えていた「ぼく」は、所詮戦争の予想がもたらした「死の恐怖」と抵抗しているだけであり、「障害児」の問題の苦悩、また、それを見殺す経験に共感できず、Dと「アグイー」の死亡に恐れながら、(職務の責任を含め)阻止したかったように見える。それに、大した「喪ったもの」がなかった「ぼく」はDと同じく現在の《時間》、もしくは生命を犠牲にして「空の世界」に逃げても意味がない。その上、「威厳」に導く道も見つけ出せなかった。裏切られた彼は結局Dとずれてしまい、権威との問題を解消できない上で、誰も救えない無力感と自己憎悪に悩まされ、絶対的弱者である「アグイー」を見殺した強者の共犯者となり、二人の存在を「屈辱、恥」として忘却しようとして試みた。そのように過ごしてきた「ぼく」の10年間は、「戦後世代」とDの「屈辱」を背負いながら、解消できない憎悪を持って1953年の事件に縛られていたと言えよう。

やがて28歳の「ぼく」はそうした気持ちを「アグイー」の面影と重なった子供たちにぶつかり、片目を犠牲にした。脅かされ、恐怖感を覚えた子供たちの反撃を受け、逆に「敗北」した「屈辱」の憎悪を再び感じた途端、「ぼく」はかつて共感できなかった子殺しの体験を一時的に獲得し、最後のDと同じ位置にたどり着いたのである。子供たちの恐怖心はまるで「アグイー」の分身のように、彼に「罰」を与え、「無償の犠牲」(287頁)がはらわれた時、本当の「アグイー」が現れ、空へ飛び立って行った。それに対し、「ぼく」は「さよならアグイーと心のなかで」(287頁)決別の言葉を口にした。右目を犠牲し、「空の世界」を感じ取ったこの僅かな瞬間、「ぼく」はすでに喪われたDの代わりに「アグイー」と再会し、今度こそ十年前にDができなかったことを成し遂げた。つまり、絶望から生まれた幻影「アグイー」と別れを告げることにより、赤んぼうを殺した罪と「屈辱」と向き合い、Dが残した問題を「威厳」のある答えに導く方法を心得たのである。「空」が喪われた十年の生活という《時間》に埋もれた「ぼく」は

こうして恐怖と絶望の幻影から解放され、十年前から停滞していた自分の人生を「威厳」の方向に向かわせ、Dと異なる結末を迎えたとうかがえる。

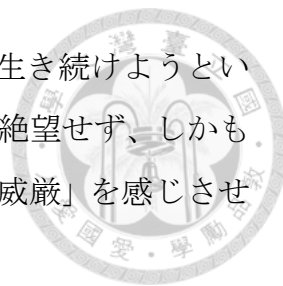
物語の冒頭に戻ると、28歳の「ぼく」は「ぼくの心に燃えたくてぼく自身を束縛し始めた憎悪から、ぼくはそれを思いだすことで自由になった」(261頁)と語ったように、Dと「アグイー」の「屈辱」を思い出すことを、「敗北」による憎悪を解消するための武器として「ぼく」は使用していた。それはまるで広島の被爆者のそれのようであった。そして、彼は今に生きる現実世界と違い、「空の世界」とも異なる「あいまい」な世界を感じ取り、それと向き合って適応しようとした。「あいまい」とは「戦後世代」のイメージにもアイデンティティの二重性にも重なるだろうが、ここで「ぼく」は自身の「あいまい」ではなく、世界の「あいまい」を見出し、そこに「不安定と危険」を感じていた。「危険の感覚」について、かつて特攻隊員の遺書を読んだ大江氏がその中から感じ取り、別のエッセイに次のように論じていた。

そこには危険の感覚に緊張して鉱石のように硬くなった手紙と、そうでない手紙があった。そうでない手紙、それらは死をまえにして危険の感覚を、肺葉を切除するように切りすててしまった若者たちの、愚かしく弛緩した、それゆえにこそなお悲惨な手紙だった。目前に確実な死をひかえた恐怖の時に、なお危険な感覚をもちつづけることがどのような意味をもつか？というならば、ぼくはそれが人間の威厳ということではないだろうかと思うのである。⁴⁹

引用のように、「死の恐怖」に屈伏せず、「危険な感覚」を持ち続けることは「人間の威厳」に繋がって行く。1963年の現実世界に潜んでいる核問題など、冷戦構造がもたらした不安定と動揺の影を見出し、そこに存在する「死と存在」の問題に「危険」な感覚を読み取った「ぼく」は「人間的な威厳」を手に入れたと示している。そういう意味では、「ぼく」はやはり「戦後世代」の一員であり、社会と世界に関心を向けていると見受けられる。そして、もし慣れることができず、

⁴⁹ 大江健三郎「危険の感覚」『大江健三郎 同時代論集 1』(岩波書店、1980年) 309頁。(初出『新潮』1963年8月号)

黒い眼帯をかけて、社会から差別や憫笑の「屈辱」を受けても生き続けようという「ぼく」の決心は僅かでも、大江氏が説いた広島「決して絶望せず、しかも決して過度の希望をもたない「正統的な人間」の能動的な「威厳」を感じさせたのであろう。



5. まとめ

本章でまず 1963 年の背景を明らかにし、大江氏の思想変化は「戦後世代」のイメージを引き継ぎながら、「障害児」の問題に移行し始め、さらに「ヒロシマ」の経験を通じて、絶望から離れ、「威厳」のある「正統的な人間」の希望へ向かおうとしていたと論じた。その論述を踏まえ、「空の怪物アグイー」に登場した二人の主人公 D と「ぼく」に集中して考察し、一人は「戦後世代」の問題、もう一人は「障害児」の苦悩を抱えていたが、両者の思想の共通性である力関係の「敗北」による「屈辱」はまさに「アグイー」という「死と存在」の恐怖の具現によって結ばれたと分析した。

交流が進む中、「ぼく」は D に引き込まれ、「同化」していくが、最後の自殺の裏切りは彼に「屈辱」と絶望を残した。D が自分の人生＝今の《時間》を全部捨てて「空の世界」に逃げ、「ぼく」に「アグイー」の記憶と責任をゆだねたが、「ぼく」は 10 年間の生活を失い、子供たちを脅して反撃を受けた事件により、右目を犠牲に、「アグイー」と再会し、また決別した。そうして恐怖、「屈辱」と向き合うことを選び、「威厳」のある人生に進み始めたとうかがえる。

以上のように、「空の怪物アグイー」では二つ相違の人間のモデルの描写を通して、その分かれ目である生きる姿勢が広島の経験に繋がっていると考えられる。結論として、広島の人間的な「威厳」が持つ希望に到達していたと指摘したい。「絶望と希望」という大きなテーマにおいて、本作は『個人的な体験』で描かれていた希望のある結末と並行して成立していると思われる。ところが、「空の怪物アグイー」はここまで解析したように、初期短編からのイメージを継承し、いくつの変化を加え、「障害児」や「戦後世代」の問題が抽象的な想像力で表現されており、最後の結末における「威厳」の希望も具体的に語られなかった故に、今までの研究ではほとんど注目されていなかった。そういう意味では、「空の怪物アグイー」という短編は絶望から希望へ向かう大江文学の転換の起点に過ぎ

ず、「正統的な人間」をリアルに描出するために、長編『個人的な体験』まで待たなければならない。従って、次章でこの作品を分析していきたい。



第四章 『個人的な体験』における絶望と希望

—「障害児」と「ヒロシマ」体験をめぐって—



1. 『個人的な体験』の問題点について

1964年に出版された『個人的な体験』は、前章で論じた「空の怪物アグイー」が完成された以後まもなく執筆されたものであり、大江氏が「ぼく自身にとって最初の長編小説は一九六四年の『個人的な体験』です。(一九五八年に『芽むしり仔撃ち』がありますが、あちらは長めの中編といった方がいい)」¹と述べたように、この作品は初期短編から転換を遂げ、大江文学の中期への入口として、分水嶺の役割を担っている。その物語は平野謙²を始め、多くの評論家に大江氏の代表作として広く認められており、今まで盛んに討論されていた。その中で問題の中心となるのは、最後の結末に行われた主人公の急激な転換である。序章でもすでに触れたように、亀井勝一郎³や三島由紀夫⁴らの否定的な見解に対し、大江氏自身の反論⁵に、奥野健男⁶や松原新一⁷たちの肯定的な意見も時間に連れ、力を増してきたと思われる。

しかし、そうした先行研究の中で、本論文が着目したい登場人物の力関係を中心に分析した論点は意外に少なく、初期作品から続いていた強者—弱者の構図の変化についても詳しく検討されていなかった。「空の怪物アグイー」からも見られるように、1963年の出来事がこの頃の大江氏に多大な影響を与えており、「障害児」が生き死にの境にある時にもたらした疲労困憊の絶望から出発し、「戦後世代」の問題意識に答えようと、いかなる権力と関係ない「ヒロシマ」の

¹ 大江健三郎「半世紀後の『ヒロシマ・ノート』」『早稲田文学 2015年秋』(早稲田文学会、2015年) 16頁。

² 平野謙「解説」『大江健三郎全小説 6 月報』で「『個人的な体験』は著者の長篇小説のなかでもいちばん成功した作品のひとつ」と評し、「著者のほぼ十年間の文学的達成を示している」と称えたのが一例である。

³ 亀井勝一郎・河上徹太郎・河盛好蔵・小林秀雄・中島健蔵・中村光夫・山本健吉「第11回新潮文学賞『個人的な体験』選評」『国文学 解釈と鑑賞第452巻』(至文堂、1971年)

⁴ 三島由紀夫「すばらしい技倆、しかし…—大江健三郎氏の書下し「個人的な体験」」『週刊読書人』1964年9月14日号(読書人、1964年)

⁵ 『大江健三郎 作家自身を語る』(新潮社、2007年) 90頁で大江氏自身が論争の経緯を説明していた。

⁶ 奥野健男「精神の自由と社会 “怪物赤ん坊”を通じて」(『読売新聞夕刊』1964年9月10日 9面)

⁷ 松原新一『大江健三郎の世界』(講談社、1967年)

「正統的な人間」のモデルが要求されていた。確かに『個人的な体験』は表現手法においてさらに更新した作品であるが、物語の内容や構成からでは、「戦後世代」と人物関係の背景設定も相変わらず存在していることがうかがえる。となると、「障害児」と「ヒロシマ」だけでなく、力関係の構図を切り口に、初期短編からの推移を考察するのは本作の結末の解釈にも有効だと考えられる。

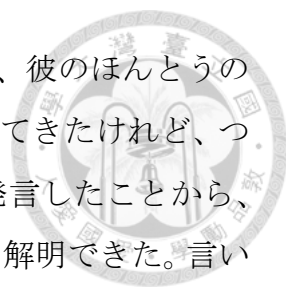
ところが、この作品以前にはまだ『われらの時代』（1959年、中央公論社）など、紙幅の長さだけを見れば、長編と言える小説があったにもかかわらず、作家自身が「最初の長編小説」と主張した。一体、彼にとっての「長編」をどう定義すべきだろうか。この点に関して、大江氏の同世代の友人である作家、井上ひさしによる評価が的を中ったようである。2010年、井上氏の逝去に伴い、夫人から遺品の二つのノートが大江氏のもとに届いた。その中の一つは井上氏が二十五歳の時に彼の小説を読んだ後の感想である。大江氏はそれを次のように回想し、感心した。

彼は、私の本質を見抜いているんです。「大江の小説を読むと、そこには愛というものがない」。「あらゆる愛から、彼が門外漢であるだろうことは、容易に想像できる。大江氏は長編ですぐれたものを書くことはできないのではないかと危惧する。長編では、愛を描くほかなにもものをもかけないからだ」（笑）。⁸

井上氏の言葉通り、初期作品において、「性」があっても、そこにあらゆる「愛情」を主題としたものは皆無と言える。しかしながら、「空の怪物アグイー」を初めに取り入れられた「障害児」の課題は、大江氏にそれを考えさせる機会を与えてくれた。「障害児」の絶望に対し、「この青春の小説を書いたことが、根本的な浄化作用を僕にもたらしている」⁹と大江氏も認めており、翌年の『ヒロシマ・ノート』に並び、彼を退嬰的な頹廢から脱ぎ出したきっかけとなったと見受けら

⁸ 大江健三郎「九条を文学の言葉として」『取り返しのつかないものを取り返すために 大震災と井上ひさし』（岩波書店、2011年）42頁。

⁹ 大江健三郎「かつてあじわったことのない深甚な恐怖感が^{バード}鳥をとらえた」『個人的な体験』（新潮社、1981年）318頁。



れる。2011年に「これまで自分の障害をもった子どものこと、彼のほんとうのことを書いてきました。そこで、作品ごとにある世界をつくってきたけれど、つまりそこに愛も希望も表現したとは思いますが」¹⁰と大江氏が発言したことから、『個人的な体験』が大江健三郎の最初の長編と言われる理由も解明できた。言い換えれば、「障害児」を書いたこの長編小説は、閉塞的、無力な「絶望」に向かって、初めて「愛」と「希望」が成功に込められたと考えられよう。それがどのように作中に表現されたかについても、結末の問題に繋がる一つ検討すべきところであろう。

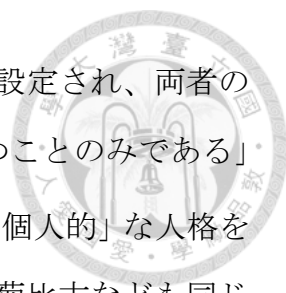
また、絶望に陥る主人公が、最終的に希望に向かっていくというストーリー構成から、彼の心情の変化には必ずウイスキーが伴われているとうかがえる。主人公の成長を描く本作で登場人物の関係図を手がかりに分析する以上、この構造を無視するわけにはいけない。ウイスキーが果たした役割と意味を解明すれば、彼の転換の過程もより明確に捉えられるのであろう。したがって、本章はウイスキーの飲用と拒絶に成長が垣間見られる主人公を中心に、絶望から希望に到達するまでの各人物との力関係を明らかにするほか、『個人的な体験』が大江文学史上での位置付けを確認したい。

2. ウイスキーを飲み始める前の主人公

さて、主人公について検討する前に、第二、第三章で行われた方法に倣い、もう一回登場人物たちの姓名を取り上げてみよう。今までの作品と明らかに異なるのは、ほぼすべての主要人物に名前、もしくは固有名称が付けられていた点である。命名論を用いて初期作品を分析したように、いつも一人称「僕」と代名詞で人物を呼称したのは「個人」ではなく、「世代」を共感させる手法を大江氏が取っていた。しかし、本作はタイトルからして、「個人」という言葉を使用した。

「空の怪物アグイー」でさえ「ぼく」という語り手の目線を設けたのに、『個人的な体験』では思い切り三人称の主人公^{バード}鳥に話が集中してしまった。こういう意味において、すでに方法論でこの作品は初期の制限から離れたと言えよう。大

¹⁰ 大江健三郎「九条を文学の言葉として」『取り返しのつかないものを取り返すために 大震災と井上ひさし』（岩波書店、2011年）55頁。



大江氏自身もこの主人公、^{バード}鳥は「書き手である僕と切り離して設定され、両者の共通点は、ともに頭部に異常をそなえて生まれた新生児をもつことのみである」¹¹と何度も作家との相違を強調し、^{バード}鳥という人物の独立した「個人的」な人格を意図的に描き出した。ほかに名前が与えられた人物、火見子や菊比古なども同じく、強烈な性格を見せ、「個人」の特性を表しているのは明らかであろう。となると、大江氏にとっての「個人」をここで一回振り返って検討すべきであろう。その点について、氏は自分の作品に使われた時の「個人」の定義を下記のように説明していた。

ぼくは非常に個人的な人間で、そういう人間としての作品を書いてきたけれど、その上で、個人というものが含み込んでくる社会性を自覚していくというのがぼくの一生の進みゆきでした。だからデモにも行くし、集会があればそこに行って話しもします。『個人的な体験』の大江について三島さんが言われたような、社会的なものを平気で踏みつぶして自分の「個人」を大切にするのが近代文学、現代文学ではないかという意見には「違う」と言って来たと思います。¹²

三島氏の結末の批判に対して、「個人」の捉え方が異なっていると、大江氏がここで唱えていた。『個人的な体験』の「個人」は間違いなく一人の固有の不幸を言い指すが、それが「社会性」を一切切り捨てて、世界から隔離された人間となったのは決して作家の意図ではないのである。さらに、大江氏は続いてこう語った。

ぼくは、一貫ではない仕方で、自分の「個人」にとらわれながら、社会的な、社会性を持った個人としてありたいと考える—そういう中途半端と言

¹¹ 大江健三郎「かつてあじわったことのない深甚な恐怖感が^{バード}鳥をとらえた」『個人的な体験』（新潮社、1981年）317頁。

¹² 大江健三郎「半世紀後の『ヒロシマ・ノート』」『早稲田文学 2015年秋』（早稲田文学会、2015年）17頁。

えば中途半端、あいまいと言えばあいまいな生き方を貫いて現在に至り、八十歳でまだ生きている、それも結局は一貫することではなかったか、と考えています。¹³



「あいまい」な「個人」とはすなわち、「二重性」を持つ一個人として社会と向き合うこととこの言論で示されていた。それは「戦後世代」の性質から引き継いだ考え方であることは疑いようがない。思い返すと、天皇制および権力体制に対する二重性、アイデンティティーの喪失による不安、「敗北」に伴う権威の再構築がもたらした「あいまい」さ、それらはすべて社会に関わる大江氏自身に由来する感覚であった。「世代」全体をまとめて考えることがなくなったとはいえ、「障害児」の絶望と広島体験も結局根本的にこの問題意識から離れなかった。無論、『個人的な体験』にとっても、それが余分なものではないと判断できる。換言すれば、『個人的な体験』はある「個人」の自分語りというより、絶望した人間がいかにか社会と関係を深めていくかという話だと認識すべきであろう。そして、その「個人」として選ばれたのは主人公の「^{バード}鳥」であった。

それでは、この人物の名前が何を表したのだろうか。ほかの人と違い、この作品では、渾名と呼ばれていたのは彼だけであり、十五歳のころからつけられた渾名を、二十七歳の今現在に至っても、彼はそう呼ばれている。その由来が外見の相似性と関係しているようなことは、次の描写で見られる。

^{バード}鳥は小柄で、痩せっぽちだ。(中略)かれはいつも肩をそびやかして前屈みに歩く、立ちどまっている時もおなじ姿勢だった。それは運動家タイプの痩せた老人の感じだ。かれのそびやかした肩は閉じられた翼のようだし、容貌自体、鳥をしのぼせる。すべすべして皺ひとつない渋色の鼻梁はクチバシのように張って力強く彎曲しているし、眼球はニカワ色のかたく鈍い光をたたえて、ほとんど感情をあらわすことがない。ただ、時どき、驚いたように激しく見ひらかれるだけだ。唇はいつもひきしめられて薄く硬く、頬から

¹³ 大江健三郎「半世紀後の『ヒロシマ・ノート』」『早稲田文学 2015年秋』(早稲田文学会、2015年) 18頁。

顎にかけては鋭くとがっている。そして、赤っぽく炎のように燃えたって空にむかっている髪。^{バード}鳥は十五歳のとき、すでにこのままの顔をしていた、二十歳でもそうだった。(293 頁)



痩せっぽちな体と前屈みに歩く姿勢が運動家タイプの老人と形容されたものの、クチバシみたいに曲がる鼻など、その容貌が鳥のようだと喩えられ、それ自体は十五歳の時からまるで変わらなかった。このように、年寄りと若者、つまり、老成と未熟のイメージが同時に共存する「あいまい」さが彼の中に潜んでいることを示していると言えよう。その「あいまい」さに伴い、^{バード}鳥が極めて不安定な心境を持つと読み取れる。実際、その後、彼は60歳になって子どもをたくさん持ちながら、そのような顔をする自分を想像して、「謳きたくなるほど切実に具体的な嫌悪感」(293 頁)を覚えた。二重性がもたらした矛盾に対して彼は、心の底から脱出を希求していたと解釈できよう。

また、^{バード}鳥と菊比古と同名の人物が『個人的な体験』以前に、すでに中編作品の「不満足」(1962年、『文学界』)で初登場した。そこで二人の高校時代が描かれ、『個人的な体験』においても似たエピソードが^{バード}鳥に提起されていた。その件については後に検討するが、「不満足」には二人以外にもう一人の語り手「僕」が存在し、三人で一緒に行動しているなど、所々に『個人的な体験』の思い出と食い違ったため、両作を強く結びつけるのは危険であろう。しかし、二人の人物設定についてはほぼ同様である点も疑いようがない。そこでも、^{バード}鳥という呼称の由来が上掲の段落とほとんど同じ言葉で描写されていた¹⁴。それに加え、英語

^{バード}
¹⁴ 「^{バード}鳥には、容貌、骨格、肉づき、姿勢、態度すべてに、あの神経過敏な羽根だらけの運動体を思いださせるところがあるからだ。^{バード}鳥のすべすべして皺ひとつない鼻梁は鳥のクチバシのように張って力強く彎曲しているし、眼球はニカワ色のかたく鈍い光をもって用心深く、あんなの実の形でつりあがった眼のなかで動いている。唇はいつもひきしめられているように薄く硬く、頬から顎にかけては鋭くとがっている。髪は赤っぽく炎のように燃えたって空にむかっている。^{バード}鳥が肩をはって前屈みに歩いているところは、痩せた運動家タイプの老人のようで、そして結局、鳥に似ている。」(9 頁)とは「不満足」での描写である。

で呼ばれた所以も「中学校の英語の教室」(9頁)で行われ、「中学校の教室の硬くてせまいストイックな木椅子に、やはり硬く道徳的な尻をのせ自分の足の長さに悩んでいる連中のほとんどのものが英語の名前をもつそういう流行の一時期がある」(9頁)と語り手が解説している。大江氏の少年時代を思い返すと、中学校で英語を学んだのは言うまでもなく、敗戦以後であろう。彼が1947年の12歳の頃に新制中学校に入り、そこで憲法を知ったが、連合軍占領下にて、当然、英語も勉強させられた。主人公が鳥^{バード}となったのもそうした大江氏の経験が下敷きになったと言えよう。つまるところ、鳥は「戦後世代」の背景を基に、戦後の権力体制下に作られた人物である。

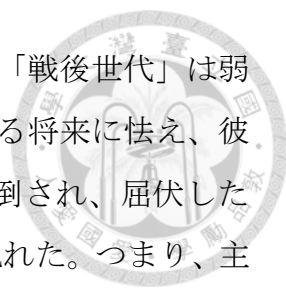
一方、柘植光彦は大江氏の作品における「鳥」のイメージをまとめ、「古くはフロイトの分析でも、また多くの詩や小説においても、性的なイメージの表象である場合が多かった」¹⁵と示し、小鳥(=女性、少年)と猛禽(=男性)の分別が大江文学に存在すると論じた。そして、本作の主人公鳥^{バード}を以下のように分析した。

「不満足」「個人的な体験」両作の主人公である鳥^{バード}は、むしろ小鳥の側である。しかも、アフリカへ行くという飛翔の望みも実現できず、性的にも救済されえない小鳥である。しかし鳥^{バード}が鳥^{バード}でなくなったとき、つまり彼の義父が「きみにはもう、鳥^{バード}という子供っぽい渾名は似合わない」といったとき、彼は解放された。これは、主人公から性的なイメージが取り除かれた結果、初めて彼は真の自由への道を歩き出したのだ、と読むことも可能だ。とすれば、大江は「個人的な体験」を書くことによって、自分にまといつく“鳥”のイメージを振り払ったのだともいえるのかもしれない。¹⁶

動物の鳥が「性的なイメージ」に連想させる効果を持つという点から考えれば、

¹⁵ 柘植光彦「大江健三郎—戦後世代の文学のキーノート—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974) 222頁。(初出『国文学 解釈と鑑賞 1969年9月号』)

¹⁶ 同上、223頁。



「奇妙な仕事」などの初期作品における犬の象徴に似ている。「戦後世代」は弱者としてアイデンティティを喪失し、「死の恐怖」に襲われる将来に怯え、彼らの恐怖が犬によって何度も呼び覚まされた。その絶望に圧倒され、屈伏した人々＝「性的人間」がここで鳥の表象を通して主人公の身に現れた。つまり、主人公^{バード}の本性には「死と存在」の絶望に出会う時に、「性的」な対応を選択する傾向が見られるのであろう。その性質は後に彼が火見子と菊比古の付き合いからも察知できる。また、上掲の柘植氏の説にしたがうと、^{バード}鳥という「性的なイメージ」から脱却し、小鳥という未熟さの象徴から成長していく主人公は最後の結末において、真の自由を手に入れた。それはすなわち、初期作品の「監禁状態」から脱出できたと理解してもよいのであろう。その過程については後に詳しく分析するので、ここは『個人的な体験』における主人公の成長が全体の中心、つまり構成となっていることを把握し、念頭に置いていきたい。

以上の考察をまとめると、^{バード}鳥という渾名は「戦後世代」の敗戦経験と関わっており、強大な権威に支配される「屈辱」から生まれた英語の読み、そこに込められた外見による年齢の「あいまい」さ、そして、「性的なイメージ」の三つの意味を象徴していると思われる。それらの問題の根本は「戦後世代」のアイデンティティの矛盾を継承しており、物語が始まる前に、主人公がすでにこの意識に引きずられていたと考えられよう。よって、この「戦後世代」の「個人」がどのように作中に動いていくかをこれから検討の中心とする。

2.1. ^{バード}鳥の少年時代に潜む「戦後世代」の問題意識

物語の中で流れたニュースにあるソビエト連邦が行った核実験をノヴァヤゼムリヤでの人類史上最大水素爆弾の爆発実験と推定すれば、時代背景として^{バード}鳥が二十七歳と四カ月の当時は1961年10月であると判断できる。そこから遡れば、朝鮮戦争中に高校生であったことにも辻褄が合う。また、救急車で自分の世代に関する意見を述べた義眼の医者が作家の大江氏と同じく、1935年生まれであった。それに対し、^{バード}鳥は「ぼくもそのあたりです」と返事した。実際に計算してみると、1歳年上の1934年生まれであったと推論できるが、その些細な誤

差は大江氏と異なる「個人」であることを改めて示唆すると同時に、^{バード}鳥は「戦後世代」のメンバーであることも偽りがないと証明してくれた。

そのような主人公が^{バード}鳥となる前の少年期のエピソードは、作中に一つだけ取り上げられた。彼が六歳の時、父親に「ぼくは生まれる百年前どこにいた？死んで百年後、どこにいる？お父さん、死んだ後のぼくはどうなるの？」(391頁)と問いかけたら、「死の恐怖を忘れ去」(391頁)るほど殴りつけられた。三か月後、彼の父親は第一次大戦のドイツ軍の拳銃で自殺した。この事件は女友達の火見子とその友人の女プロデューサーとの間で少ししか提起されない。^{バード}鳥が絶望的な状況に追い込まれ、自殺するのではないかと危惧する二人は彼の危機感を喚起するためにこの例を挙げた。短い記述のみであるものの、戦争中の^{バード}鳥を知る唯一の情報であった。父親との問答、生死についてのジレンマがここで現れ、本論文の第三章で触れた捕虜の兵士に関する大江氏自身の経験と重なるように感じられる。子供の^{バード}鳥はなぜ唐突に父親にそのような質問したかは作中に全く説明されていないが、その死亡に対する不安と自身の存在を確認したい態度は作家の幼い頃に感じた逃亡兵のジレンマに似ていることは否めない。

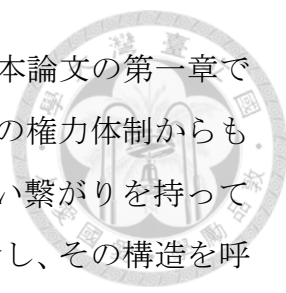
また、小林由紀は大江文学における「父親」の意味に注目し、この時期で「超国家主義者である父親と日本的神秘主義としての天皇との結びつきが決定付けられ」¹⁷ており、天皇との関係性を強調した。さらに、かつて大江氏は権力構造の中における父親と天皇の上下関係を以下のように言及していた。

僕たち農村で生まれた人間にとっては、戦中の子供の頃から大きい縦の軸は見えていた。その上のほうに天皇があり、中間に東京の警察組織があり、国家組織があり、超国家主義があり、一番下に村の社会、村の共同体、そして父親がいることは明らかでした。¹⁸

この発言を受け、小林氏は「権威者の縦の軸の底辺に父親の存在があり、その

¹⁷ 小林由紀「大江健三郎文学研究 ―父親と天皇―」『台湾日本語文学報 20号』(台湾日本語文学会、2005年) 88頁。

¹⁸ 大江健三郎・すばる編集部『大江健三郎・再発見』(集英社、2001年) 100—101頁。

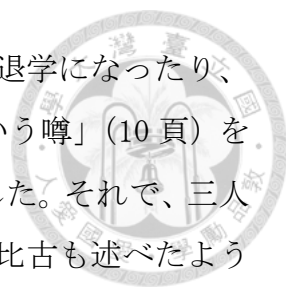


頂点には天皇が君臨している」¹⁹と作家の父親像を分析した。本論文の第一章でも、大江氏の少年時代に感じた恐怖と絶望は、そもそも戦時中の権力体制からもたらしたものであり、天皇という最上位の代表と離れられない繋がりを持っていると論じた。ここでは再び最も身近な権威者である父親を介し、その構造を呼び覚まし、^{バード}鳥の「死と存在」の恐怖に連結させたとうかがえる。彼の父親が質問に激しく反応し、自殺するまでに追い詰めた恐怖は、『遅れてきた青年』（1960年、『新潮』）でアイデンティティーの喪失を恐れている「ぼく」とは何も変わらないと見受けられる。それを受け継いだ^{バード}鳥は暴力を受けた後に、死の恐怖を忘れたが、それで消えたわけではなく、むしろ父親の自殺からの衝撃によって隠され、解消できずにさらに悪化しただけだと言えよう。それが、物語が始まる前に主人公の心底に抱いていた「戦後世代」の「監禁状態」から生じた絶望感そのものとなる。

続いて、高校時代に入った後の^{バード}鳥はしばらくのうちに、退学処分を受け、地方都市の不良少年をやっていた。そこで、菊比古という友人と二人で精神病院から脱走した一人の狂人を探す仕事を引き受けた。現実世界を地獄に、犬に変装した鬼を妄想して恐れていたあの患者を、^{バード}鳥は夢中に探し続けたが、友人の菊比古は途中で帰ろうとして、真夜中に彼に見捨てられた。結局、^{バード}鳥が見つけたのは自殺した狂人の死体だけであった。この部分はそのままだ「不満足」と重なっているが、詳しい経緯は「不満足」で描かれていた。ただ、前に触れたように、細部が異なるので、本作とは地続きの関係と考えないほうが適切で、人物の動機と行動だけを参考する程度に止まりたい。

この事件は朝鮮戦争中に発生したことで、「地方都市のぶらぶら遊んでいる連中が、強制的に警察予備隊に入隊させられ、朝鮮へおくられるという噂に」（380頁）二人は脅かされていた。『個人的な体験』では語られなかったが、「不満足」では、彼らが隣の市の精神病院に向う理由が描かれていた。そこで、菊比古と語り手「僕」は、すでに退学になった^{バード}鳥の米軍に対する抗議のビラ配りに手伝っ

¹⁹ 小林由紀「大江健三郎文学研究 ―父親と天皇―」『台湾日本語文学報 20号』（台湾日本語文学会、2005年）89頁。



たせいで、警察に捕まり、高校から退学処分を受けた。「高校を退学になったり、進学も就職もしなかった連中が、強制的に徴兵されるのだという噂」(10頁)を聞いて、戦争に対する恐怖を覚えた二人は慌てて就職先を探した。それで、三人は共に隣の市の肉屋へ赴こうとしたが、『個人的な体験』で菊比古も述べたように、途中で帰還したアメリカの「戦傷兵」(434頁)を見かけたことで行く気をなくした。最終的に精神病院にたどり着き、そこで勤める^{バード}鳥の友人から狂人探しの依頼を受けたのであった。

こうして経緯を整理すると、朝鮮戦争はそもそも事件が発生するきっかけであることが分かる。1950年から発生したこの戦争について、すでに第一、第三章で大江氏の態度と反応を解説したので、繰り返さない。「空の怪物アグイー」ではまだ朝鮮戦争のことを表に出していないが、「不満足」も、『個人的な体験』も、大江氏自身が経験した噂と恐怖²⁰を明言し、表現した。作者の叙述を踏まえれば、この狂人が犬を恐れているのも、現実世界に恐怖を覚えたのも、全部「戦争」の想像に繋がると推論できる。そして、このヒステリーの間人像が、後に理由が「障害児」の絶望に対する想像に変わり、「空の怪物アグイー」の音楽家 D に受け継がれたとうかがえる。ともかく、^{バード}鳥が「戦後世代」の問題意識を抱いている以上、彼は狂人に興味を示さずにはいられないのであろう。「不満足」で、同世代の菊比古も最初は協力したものの、長引いたため、「僕」と共に狂人より「僕らこそ、海のむこうの赤土とポプラの荒野へ戦争につれてゆかれることの恐怖にさらされて生きているのではないか」(33—34頁)と不平を吐き、^{バード}鳥に反発した。そのような作品間のつながりであろうか、『個人的な体験』で^{バード}鳥は回想したように、菊比古が同性愛のアメリカ人の情人であることを暴き出して辱めたが、「不満足」では、^{バード}鳥が続いてこうして自分の行為を弁解した。

²⁰ 『大江健三郎・再発見』(集英社、2001年)で「その頃、原爆についてどんな考え方も持っていませんでした。高校時代、僕に一番怖がったのは、朝鮮戦争に松山の高校生が連れていかれるという噂でした。不良少年でお酒を飲んだり、夜、繁華街に集まって演劇運動なんかをしているやつが連れていかれる。そういう話を聞いたんですよ。」と大江氏が自分の高校時代を回想したように、その経験が「不満足」と『個人的な体験』で描かれていた^{バード}鳥の高校時代のモデルになっているのは明らかであろう。

おれはこの仕事をほうりだせなくなっただよ、いままでおれが自分を勇敢だと思ってやってきたいろんなことが、本当は卑怯な無責任なことだったという気がしてきたんだよ。運転手を殴ったりしたこともなあ。おれは無責任は厭になったんだよ。…不満足で暴れている無責任がな。(36 頁)

^{バード}鳥が狂人を探すのを諦めなかったのは、卑怯な無責任さから勇敢な自分を見出したかったからである。言い換えれば、^{バード}鳥は最初から自分を見極めるため、行動しているのであり、それが彼の不満足の本体である。しかし、それも結局、徒労に終わり、最後で「昨日までの苛立たしい不満足から解放されていることで、その工員たちとおなじ静かな大人のひとりであることを」(42 頁) 感じ、彼は「もう、菊比古たちの不満と恐怖の世界に戻ってゆくことはない」(43 頁) と考えた。狂人探しの仕事は一応完遂したものの、友人を見捨てた彼は無責任なままでいるし、自殺に終わった狂人の末路もまるで父親と同じく、「死と存在」の恐怖を解消せずに隠した結末になっている。大人になった ^{バード}鳥は実際、卑怯と勇敢、つまり、卑劣と英雄のモラル問題に答えられず、「あいまい」なままで「自己欺瞞」しただけである。それが、後に『個人的な体験』で家庭という「閉塞状況」に再び問われ、彼が不良少年と殴り合って、蘇った「闘争の喜び」(302 頁) と直接に連結している。

2.2. 赤んぼうの出産前夜における ^{バード}鳥

続いて、大学から卒業し、二十五歳で結婚して家庭生活に入る ^{バード}鳥はこのような状況にやはり不満を抱き、蓋が開いている「檻のなかにいる」と感じ、これから「生まれてくる子供」(294 頁) がそれを閉めるのを恐れていた。そうして、彼はウイスキーに頼ってしまった。結婚した後すぐに ^{バード}鳥は最初のアルコールを口にし、四週間飲み続けたあげく、「戦火にまみれた都市ほどにも荒廃しきった、惨めな醒めた自分を見出し」(295 頁) た彼は大学院を退学し、義父に予備校の教師のポストを探してもらった。 ^{バード}鳥自身も七百時間酔い続けた理由をよく分からなかったが、アフリカ探険史の本にある村に起こった村人の泥酔騒ぎを「この

美しい国の生活には何か欠けるものがあること、絶望的な自暴自棄へ人々を追いかむ根源的な不満があることを示している」(296 頁) という解釈から自分の状態と対照し、「自分自身の生活の内なる何か欠けるものと根源的な不満について徹底して考えてみることを自分が避けている」(296 頁) という思いに至った。この泥酔事件について、鷺只雄は以下のように論述していた。

鳥^{バード}の<泥酔>は「確たる理由」がないとあるが、単純に妻や結婚生活への不満というようなものでは決してない。曾て鳥^{バード}は十代の後半にも〈自暴自棄〉の事件をひき起し、高校を「退学処分」になり、その後殆ど無意味に「不良グループと毎週のように殴り」あう時期をもったことがあるという。その点からすれば鳥^{バード}は明らかに初犯ではないし、発作的な再発であったと言わなければならない。(中略)

ということはそれが外面的、直接的な因果関係によるものではなく、存在のありようそのものにかかわる問い、自分の現在のありかたに対する根源的な不満に発するものであるということである。²¹ (下線は筆者による。)

鷺氏は具体的な「不満」の内容を解説していないが、自分の存在に欠乏を感じたという論点はつまりアイデンティティーを見失ったと言い換えられるのであろう。そして、それが突発的なものではなく、高校時代から引き継いだものだと鷺氏に論じられたが、前節で分析した通り、そもそも「戦後世代」の戦中経験に根付く問題意識が存在しており、そのまま家庭生活に残されてしまった。こうして見ると、結婚と出産によって「監禁状態」が社会から家庭に移行し、個人の問題へ発展したが、根本的な原因は彼自身の不確かなアイデンティティーから離れていないと言っても過言ではない。よって、ウイスキーを飲む「根源的な不満」は「不満足」で語られた鳥^{バード}の無責任で卑怯な自分に対する不満と恐怖そのものの延長であろう。ウイスキーがここで担った役割はこの不満をやわらげて、英雄

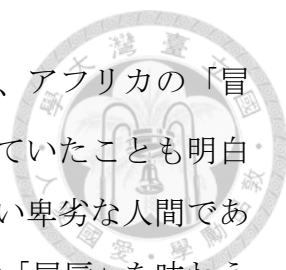
²¹ 鷺只雄「『石原・大江・開高』の文学 大江健三郎「個人的な体験」『国文学 解釈と鑑賞 第42巻11号』(至文堂、1977年)114頁。

になれなかった自分を麻酔するための一種の欺瞞の手助けと読み取れるだろう。後に「障害児」の絶望に出会った後に飲み始めたのも同じ意味を持っていると考えられよう。

このように不安定な主人公は、実は早くも物語の冒頭でアフリカを旅行した後に、「《アフリカの空》という冒険記」(294 頁)を出版する夢を持っていた。アフリカに「最初の情熱いだいた」のは「少年時」(418 頁)だと、その理由をはっきりと言及されていた。不良少年との喧嘩を終え、家に帰って眠った^{バード}鳥は「^{バード}鳥は冒険や死の危険や新しい種族との出会いをつうじて現在の安穩で慢性的に欲求不満な日常生活の彼方にあるものを、かいま見するためにアフリカへ、出発したのだから」(303 頁)と冒険の夢を語っている。本論文の第一章で触れた少年大江氏にとっての「冒険」の意味を思い返すと、戦場で得られる英雄性と同様に、自己を正当化する効果を持っていると思われる。このアフリカ旅行に関する描写も同じく、今現在の日常生活に対する不満(=「あいまい」な自分)を満たす(=英雄性)ために、この野生への「冒険」が少年^{バード}鳥に求められていた。次の引用文にこの性質が更に明らかに見られる。

おれが戦争に行ったことのある人間なら、自分が勇敢なタイプかそうでないか、はっきりした答を持っているんだが、というようなことを^{バード}鳥は度々考えてきたものだった。(中略)アフリカの反・日常生活的な風土で自分を験してみたいと希ってきたのも、それがかれ専用のひとつの戦争でありうるかもしれないと思われたからだった。しかしいま、^{バード}鳥は戦争を考えあわす必要も、アフリカへ旅だつ必要もなしに、自分が信頼されるに足りない、卑劣なタイプであることを知っているという気がした。(379 頁)

すでに大学の附属病院に送られた赤んぼうを見当たらない妻が「内臓が悪い」(372 頁)とだけ知らされて、^{バード}鳥に対して強烈な不信を表し、「責任を重んじる、勇敢なタイプ？」(379 頁)と厳しく詰問をした。それに対して、彼は沈黙して上掲のことを考えた。勇敢と卑劣、すなわち、英雄と卑劣のモラル概念がこの時



の鳥^{バード}の中に依然に存在していたことは明らかである。そして、アフリカの「冒険」は「彼専用の戦争」（＝英雄になれる機会）として望まれていたことも明白に記されているが、その同時に、ここで彼は自分が信頼されない卑劣な人間であることを思い知らされた。そうすると、それを飲み込んだ彼は「屈辱」を味わうことになるのであろう。ストーリーの中で主人公がアフリカへ行きたいと自分から願って話したのはこれが最後となる。岩田英作が「障害を持った子供の誕生によって鳥^{バード}が立たされた場は、もはや、「安穩で慢性的に欲求不満な日常生活」などではない。日常生活の彼方にアフリカを夢見るまでもなく、鳥^{バード}自身に切実に関わってくる問題は、鳥^{バード}にとってももっとも身近な家族の中に生じたからである」²²と指摘したように、鳥^{バード}はアフリカの代わりに、「障害児」という困難に満ちる挑戦を受けさせられたので、「冒険」の夢は意味を持たなくなってしまったのである。そこから彼にとっての課題は、いかに卑劣なモラルから回復し、「威厳」のある人間性を取り戻すことにあるのであろう。

しかし、なぜアフリカなのか。柘植氏はこの点について、以下のように分析した。

大江のアフリカとは、「喝采」でも「われらの時代」でも「日常生活の冒険」でも、アルジェリアとアラブ連合を中心とする北アフリカだった。そこは、白人支配に反抗して解放戦争の行われている戦いの場所であり、つまりアフリカとは、「檻」や「壁」の外にある場所の象徴だった。その後（コンゴ動乱以後）は、中部アフリカが大江の関心の対象となった。「叫び声」や「個人的な体験」のアフリカは中部である。ここにいたって、大江が初期から関心を寄せていた黒人（「飼育」「暗い川 おもい権」等）の故郷のイメージが重ね合わされた。スエズやオランやアルジェが、ケニアやコンゴに変わったのである。つまり、砂と岩のイメージは、密林と猛獣のイメージに変わった。と同時に、アフリカへ行きたいという願望も、外国における政治参加

²² 岩田英作「「個人的な体験」論—多元的宇宙の創出—」『近代文学試論』（広島大学近代文学研究会、1988年）28頁。

への欲求から、大自然への憧れへと移行してきたのだ。

このことから、現実からの逃避を自己欺瞞として退ける大江の誠実さを読みとることもできよう。「個人的な体験」の終章で鳥は^{バード}アフリカ行き的情熱を失ない、日本で生きつづける決心をするが、これが現在の大江のアフリカに対する見方をよく表しているといえる。²³（下線は筆者による。）

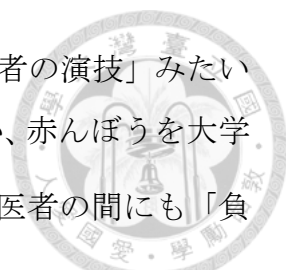
初期作品によく「ここより他の場所」²⁴という表現が用いられ、例えば「奇妙な仕事」における女子学生の「火山」や柘植氏に取り上げられた北アフリカなど、いずれも閉塞的な「監禁状態」から脱出するために期待された「政治的なイメージ」を持つ抜け道であるが、その脱出結局も徒労に終わる。しかし、中期以後の作品に語られたアフリカはただの大自然のイメージに戻り、少年大江氏が森で冒険譚を読むという場面に近づいてきたのではなかろうか。それゆえに、『個人的な体験』の鳥^{バード}が求めるヒロイズムも「戦後」に大江氏が編み出した「世代論」の理屈から、「戦中」にまだ子供であった作家が関心を向けた彼「個人」のアイデンティティーの問題に戻って行くと考えられよう。その変化が「障害児」が誕生した以後、さらに明白に現れており、次節で説明する。

3. ウイスキーにまつわる絶望

障害を持つ赤んぼうが誕生したお知らせを受けた鳥^{バード}は病院という組織に大きなプレッシャーを感じたようで、彼の到来を迎えに来た三人の医者^{バード}を法廷の審問官になぞらえ、診療室の人体解剖図が「かれら独自の法の権威の旗」(306頁)だと考えた。「奇妙な仕事」や「死者の奢り」などで登場した病院という上位に立つ権威の象徴がここでも一貫しており、「戦後世代」の主人公に弱者である自分を察知する機会を与えた。当然、鳥^{バード}はそのように権威的な医者たちに不快感を覚えずにいられない。特に赤んぼうを「現物」と呼んだ院長が「職業の威厳と

²³ 柘植光彦「大江健三郎—戦後世代の文学のキーノート—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974) 216頁。(初出『国文学 解釈と鑑賞 1969年9月号』)

²⁴ 柘植光彦「大江健三郎・主要作品の分析—性的人間」『国文学 解釈と鑑賞第 452 巻』(至文堂、1971年) 108頁。



ともにおこなうにふさわしい」(307頁)というより、「ヤブ医者演技」みたいに恥ずかしく笑ったことに怒りと恐怖を彼が感じた。そのほか、赤んぼうを大学に附属病院に移送するため、救急車に乗り込んだ^{バード}鳥と義眼の医者の間にも「負け犬のように極度に受身な^{バード}鳥の反応が医者の眼からためらいと疑いの影を払拭した。医者は自分の権威をしっかりと把握して、それを前におしだした」(312頁)というやり取りがあった。前にも触れたように、この医者は同じく「戦後世代」であり、彼も力関係に強く関心を示し、自身の権威を細心に配慮していた。例えば、大学の病院を「官僚的」と批判した義眼の医者は自身までも怪物扱いされ、「自分の威厳をうたがいはじめた」(314頁)。一方、^{バード}鳥は「障害児」を迎えた時点で、自分が「怪物の父親」(307頁)を思い込み、「敗北」し、さらなる下位に落ちた「屈辱と羞恥」の渦に陥るしかなかった。

そして、救急車でようやく赤んぼうを目撃した^{バード}鳥は息子が「植物的な存在」(312頁)であると告げられ、「おれの息子はアポリネールのように頭に繃帯をまいてやってきた、おれの見知らぬ暗くて孤独な戦場で負傷して。おれは息子を戦死者のように埋葬してやらねばならない」(313頁)と思い、泣いた。その涙について、栗坪良樹は次のように分析した。

ここに描かれた主人公の「涙」は、まさに甘い涙である。それは「赤ん坊の怪物」を眼前にする以前から、彼の内部に在り続けた「根源的な不満」を、その「異常児」出産のとたんに「センチメンタルでぐにゃぐにゃ」のものにしてしまうことを暗に「受容され正当化され」たかのごとく錯覚した、実に奇妙な涙である。我が子誕生の以前から継続している問題は、我が子の誕生によってご破算になるというものではない、ということを作者は主人公に言い聞かせている。²⁵

「障害児」のことをいきなり戦死者と想像した^{バード}鳥の心境から、彼にとっての

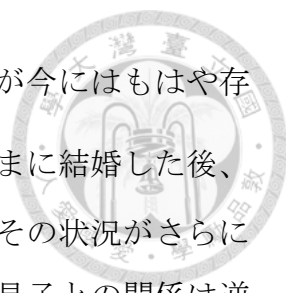
²⁵ 栗坪良樹「『個人的な体験』 堅穴式から、抜け道のある洞穴式へ」『国文学 第16巻第1号』(學燈社、1971年) 134—135頁。

「死の恐怖」は「戦争」に根付いており、そして「障害児」の絶望を一つの戦場と譬えられることがうかがえよう。それは前章で説明した大江氏が述べた「戦後世代」の想像と「障害児」がもたらした「頽廃の感覚」²⁶に基づいた想像なのであろう。そして、栗坪氏が上掲文で解説したように、ここで流した甘い涙は「ぐにゃぐにゃ」のもの、すなわち、「あいまい」な自分が一瞬正当化され、救われた錯覚であり、少年時代からの「根源的な不満」は「障害児」の誕生により解消されたわけではなく、むしろ形を変えて引き継がれていくことが強調された。こうして、^{バード}鳥の中の不満足と絶望は「障害児」をめぐる彼個人の問題になったとうかがえる。

そのような「死の恐怖」と「屈辱」を抱え込んだ彼はまだ回復中の妻に衝撃を与えたくないので、「障害児」のことが発覚されないように、元の病院に戻らずに義父を訪ねて事情を説明しに行った。そこで、^{バード}鳥が敬愛し、畏怖していた義父からウイスキーをもらった。彼の泥酔の過去を詳しく知りながら、アルコールを渡した行動に^{バード}鳥は困惑し、憤慨し、最後は「正当の権利」(323頁)だと自分を説得し、遠慮なく飲める場所を探し始めた。そこで思い出したのは大学のクラスメートの火見子であった。

火見子はロシアの祖母を持ち、「いつまでもその土地になじめない異邦人」(325頁)と思わせる雰囲気が高い、日本社会において弱者であることを免れない女性である。その名前は肥後国の由来、景行天皇が暗い夜に着岸できない時に、遙かに火の光を見て無事陸に着いたので、その地を火(肥)の国と名づけたことから採ったのである。その由来からも察知できるように、彼女は本作において、^{バード}鳥を導く案内人となっている。作中で二人は主に性的な関係によって結びついており、初めて性関係を持ったのも大学の頃で、酒に酔った勢いで、強姦に近い形で火見子が^{バード}鳥に処女を奪われた。その件について、^{バード}鳥ははっきり覚えていないが、火見子にとっては「性的冒険家」(324頁)になる「スタートの儀式」(337頁)であった。そこから、二人には性的暴力の加害者と被害者という図式によっ

²⁶ 大江健三郎「未来へ向けて回想する—自己解釈(二)」『大江健三郎 同時代論集 2』(岩波書店、1980年) 281—282頁。



て両者の力関係が表されていたが、過去の^{バード}鳥の強いイメージが今にはもはや存在しない。「死と存在」に恐怖を覚える^{バード}鳥は「あいまい」なままに結婚した後、妊娠を恐れ、性的な不能に陥った。「障害児」の誕生に伴い、その状況がさらに悪化し、彼はすっかり弱き者になっている。そして、今度、火見子との関係は逆転し、性的救済を乞う^{バード}鳥に、火見子は性のベテランという社会と関わらず、極めて個人的なアイデンティティーを手に入れた。ところが、二人ともが性を追求する以上、権力に無力な「性的人間」にしかねず、社会性を持つ行動的な「政治的人間」にとうていどり着くことはできない。

「性的冒険家」とは「性」を通して「冒険」し、アイデンティティーを認識する方法に長けていると意味するならば、火見子は強姦事件以来、「性的人間」の性質を持っていた。しかし、^{バード}鳥と同じく「戦後世代」の彼女は「政治的」に求めたことがないと考えたら、それこそ間違いだと言えよう。少なくとも、^{バード}鳥によると、火見子は大学生の頃にまだ自殺していなかった夫と一緒にデモに行くほど、政治に強く関心を持っている人間であり、現在はそこまで敏感ではなくなったが、それでも核兵器にずっと注目していたようである。そして、火見子の夫の自殺の理由は彼女自身の説明によれば、「この現実世界にいささかの権利もない」(391 頁)と感じ始めたからである。そこから火見子が夫に対する負い目が浮上するが、それは「性的冒険家」の噂が「彼女の夫の自殺とむすびつける」(324 頁)と^{バード}鳥が聞いたように、彼女が夫を追い詰めた罪悪意識ではなく、「性」を通して主人に上位に立たせ、権利を持つ「政治的人間」にさせることができなかった遺憾が招いた責任感ではなかろうか。すなわち、火見子という人物も、かつては「異邦人」と「被害者」という弱者位置から離脱すべく、「政治的」なアイデンティティーの改善を追求したと考えられる。それが一度夫の自殺によって失敗し、「性的人間」に固まったが、「政治的人間」への欲求が密かに彼女の心にあったはずだと推測できる。ウイスキーを飲みながら、二人が「障害児」をめぐる会話、つまり「核物質の灰」(327 頁)の影響や「多元的な宇宙」(326 頁)みたいな「死と存在」の問題など、いかにも「戦後世代」の意識に繋がる話題からうかがうと、「行動的」、「政治的」になれない二人はアルコールの麻醉に頼ってい

ながら、アイデンティティーの「自己欺瞞」に陥っているとしか言えない。

一方、再び大学病院に戻り、「植物のような赤んぼうの死」(318頁)の意味しか考えていなかった鳥^{バード}は、単に「死の恐怖」と自身の存在意義の揺らぎに怯えていただけであったが、生き続ける赤んぼうを目にした彼は「アフリカの夢を防衛しようとして、植物的存在の重荷、赤んぼうの怪物の重荷をまぬがりたい」(358頁)と願って、自分のエゴイズムに恥じ入った。そして、小児科の担当医に見殺すことを頼んだ鳥^{バード}は自分が「卑劣さへの降り坂の第一歩をふみだした」(359頁)と感じた。前節で論じたように、アフリカの「冒険」はすでに「障害児」の誕生と共に意味をなくしたが、それでもここで鳥^{バード}が赤んぼうを引き受けることを選ばなかったのは、「障害児」を自分を見極める「冒険」と考えず、「監禁状態」を完成し、自分のアイデンティティーの喪失を確定する「死の恐怖」としか捉えていなかったからであろう。しかし、卑劣さと「恥」を感じ取った主人公はとっくにアイデンティティーを悪い方に傾かせた。その後、彼は再び火見子を訪ね、本格的に性的救済を求め、二人が同棲し始めた。その性交渉について、石原千秋は以下のように論及した。

鳥^{バード}と火見子の関係が可能になるということの意味は、この二人が性交を行なえたか否かということだけにあるのではない。その性交が単なる性交ではなく、自己発見のプロセスになり得ていたということの意味するのだ。

27

二人の性交は性的な不能が可能になることだけに意味を持つのではなく、重要なのはその性の交渉を通じて、二人は「自己発見」、つまり、自分のアイデンティティーを獲得できるという点に注目すべきだと石原氏がここで論じた。それでは、その「自己発見」はどのような風に行われたかという、利沢行夫の次の論述を取り上げたい。

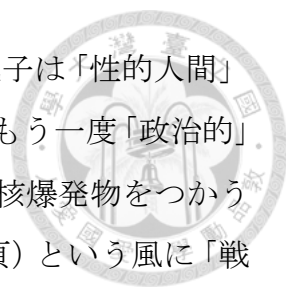
²⁷ 石原千秋「反転する帝国—大江健三郎『叫び声』『個人的な体験』」『テキストはまちがわない』(筑摩書房、2004年)140頁。

赤ん坊の衰弱死を持ち続けるのは「猶予」の期間である。この間に鳥^{バード}は火見子との性の交渉を通してついに選択の能力をかちえるのである。(中略) この猶予から態度決定の期間の部分は、なによりも先ず大江自身にとって満足すべき出来栄えとなったことに女の性に対して殆んど恐怖心ともいえるほどの嫌悪感を持っていた鳥^{バード}が性のヴェテラン火見子を完全に征服することで自己を回復する個所は、作家自身を感動させるのに十分だった。²⁸ (下線は筆者による。)

引用文のように、鳥^{バード}は火見子に性的救済を得ることで、女性を征服し、上位に立つアイデンティティーをある程度回復し、自分を見つめ直す機会を得られた。さらに言えば、火見子も誰かを救うことができたために、夫への責任感の重荷を卸しつつ、絶対的な弱者の位置から離脱し始めた。しかし、その回復はあくまでも二人の間に行われた力関係の調整にすぎない。「性的人間」から離れ、絶望に脅かされる「監禁状況」から脱出するために、両者もほかの方法を求められない。そこで、火見子は鳥^{バード}の夢、アフリカに目を付けた。本来アフリカの地図を見て、「いつか本当にその実用地図を使える日がくることを祈るわ」(382 頁)と嘲弄的であった火見子は性交渉の後にだんだんと態度を変え、アフリカの地図や小説を読み始めた。「鳥^{バード}のアフリカ熱は火見子に移ってしまったようで火見子は地図と小説に夢中だった」(396 頁)と言われるほど、彼女は最終的にアフリカへの旅を望んでいた。

わたしとあなたとの関係は、はじめ単に性的な結びつきにすぎなくて、わたしは、あなたが不安と恥辱感になやまされているあいだの、性的な急場しのぎにすぎなかったわ。ところが、昨日の夜わたしにもアフリカ旅行への情熱がたかまってきているのがはっきりしたの。(418 頁)

²⁸ 利沢行夫「自己救済のイメージ—大江健三郎論 I—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974 年) 194 頁。(初出『群像』1967 年 6 月号)



と、火見子が説いたように、アフリカという「冒険」を、火見子は「性的人間」である弱者の立場から離脱する道を見出した。そこで、彼女はもう一度「政治的」なアイデンティティーを取り戻すことを図ったのであろう。「核爆発物をつかう世界最終戦争が始まることになるかもしれないわね」(396 頁) という風に「戦後世代」の意識を取り返しつつあった火見子に対し、^{バード}鳥は全くの無関心であった。なぜなら、彼には「戦争」の絶望に相当する「障害児」の戦場が待っていたからである。そのような^{バード}鳥にとってアフリカはとうに空っぽの夢であり、卑劣で無責任な不満足はアフリカに行っても満たされることができず、「荒涼として、熱情をそそらないアフリカ」(418 頁) だとしか彼には想像できなかったのである。

4. ウイスキーを拒絶する主人公

最終的に^{バード}鳥はウイスキーを拒絶し、赤んぼうの問題に向き合っていくが、それが実は完全に急激なものではない。その転換について、バルカン半島のある社会主義国の公使館員のデルチェフに関する事件が伏線となったのである。^{バード}鳥が参加した通訳仲間のスラブ語研究会は講師を務めていたデルチェフをめぐるトラブルに困っていた。彼は日本人の少女と一緒に引きこもって、公使館の仕事を放棄した。それを国際問題に発展させず、穏便に解決するため、公使館のほうから研究会に説得を依頼した。誰も引き受けたがらない仕事を「赤んぼうをめぐる家庭の問題は、いかなる国際問題よりも、具体的に重く切実に^{バード}鳥の頸ねっこを押えていた」(403 頁) ために、^{バード}鳥に押し付けた。デルチェフの選択は一見無責任な勤務放棄であるが、岩田氏の以下の論点が作家の本意を解明した。

デルチェフさんは、職場よりも女友達の感情を受け入れることを、その意志において選んでいるのであり、その行為は、責任逃避とは根本的に異なるものである。(中略) この言葉(デルチェフが引用したカフカの言葉、筆者注)のもつ説得力は、自己の責任において選択する、デルチェフさん自身の生き方に支えられている。(中略) デルチェフさんの言葉や生き方の総体に

接することで、逆に子供にたいする責任を逃れようとしている自分の姿が浮き彫りになったためだろう。デルチェフさんは、^{バード}鳥がいまある自己を見つめ直す、一つの契機となっているのである。²⁹



デルチェフと^{バード}鳥の対話の中で、自分の立場をよく理解した上で、「政治的な理由」ではなく、「感情的理由」（406 頁）のために、女友達と一緒にいてあげた。岩田氏の指摘通り、彼は外交官の責任と懲罰を背負いながら、この感情を大事にしていた。その気持ちはまさに長編小説が必要とした「愛情」ではないだろうか。デルチェフの姿勢は自分のためのエゴイズムではなく、「性と政治」両方にも関係なしに、「深刻な窮境にありながらユーモラスな平常心」（407 頁）を持つ「威厳」のある人格だと言えよう。その外国人が^{バード}鳥の「障害児」の絶望を知った後、彼に自分の国の言葉の辞書を送り、「希望」という単語の下にサインしてくれた。それはデルチェフからのメッセージであり、「希望」を抱えて生きていく「威厳」のモデルを暗示していたと読み取れる。そこに到達するには^{バード}鳥のいままでの方法、アフリカの「冒険」でも、火見子の性交渉でも、無論、政治や権力の力でもなく、異なるアプローチで探すしかない。その答えはつまり、デルチェフのように責任と問題に向き合うことである。大江氏の広島経験はここで、その効果を発揮し始めた。

赤んぼうが死んだと思っていた^{バード}鳥は、病院から実は息子が成長しつつ、手術を受けられるようになったと知らせられた。脳外科の「威嚇ではない威厳をもった壮年の教授」（414 頁）に向き合い、彼は今回「職業」からのものではなく、人生が積み上げた「威厳」を持つ人格者の医者バードに責任を問われ、責められた。そして、相変わらずに向き合えなかった^{バード}鳥はやがて赤んぼうを連れ出し、逃避を選ぶ。退院手続きの途中、赤んぼうの名前が要求され、彼は次のように考えた。

あの怪物に人間の名前をあたえる、おそらくその瞬間から、あいつは人間

²⁹ 岩田英作「『個人的な体験』論—多元的宇宙の創出—」『近代文学試論』（広島大学近代文学研究会、1988 年）38 頁。



らしい自己主張をはじめることだろう。名前をつけないままの死と、つけたあとの死とでは、おれにとってあいつの存在自体がちがってくるだろう。

(422 頁)

命名の事件がここで小説の一部として直接に扱われている。「菊比古」という昔の友の名前を借りたが、この時点で、赤んぼうは「障害児」の一人ではなくなり、^{バード}鳥の息子という「個人」の人格が明確に与えられた。そういう意味で、「障害児」の絶望が本格的に避けられない^{バード}鳥専用の挑戦となったのである。そして、アフリカの旅用の貯金もこの退院によって返してくれたので、ここで、^{バード}鳥は再び想像と現実の「冒険」に選択を迫られる。最後は火見子の提案で赴いた、かつての友の本物の菊比古のバーにて決心した。

再会した菊比古は「おれよりずっとしたたかな大人の年齢にたっしているように見え、逆に十五歳のころのままの要素を多分に残しているように見える、ふたつの年齢のあいだの両棲類みたい」(433 頁)と^{バード}鳥に見られた。その描写から分かるように、菊比古は両義的な「あいまい」性を持ち続けていた。狂人探し以来、「脱落したわたしが降下しつづけているあいだ、^{バード}鳥は上昇しつづけた」(435 頁)と菊比古が述べたように、真夜中に逃げ出した後、同性愛者という当時における弱者になった彼と違い、^{バード}鳥は徒労に終わったかもしれないが、仕事を責任をもって完遂し、その後も東京の大学に入り、家庭を作り、実は彼なりの努力がすでに実ったと思われる。そこにまた無責任で卑劣な不満があるとしても、今のタイミングで赤んぼうの絶望を引き受けて、超えていく以外に転換する方法がないのであろう。弱者で「あいまい」なままの菊比古でさえ、自分の選択に責任を背負って生活しているのに、^{バード}鳥には逃避の言い訳がすでに許されない。その後、^{バード}鳥は最後のウイスキーを飲み、「体の奥底で、なにかじつに堅固で巨大なものがむっくりおきあが」(435 頁)り、すぐに吐いた。そうしてアイデンティティーの不満を麻酔する欺瞞の象徴を拒み、彼は以下のように考えた。

おれは赤んぼうの怪物から、恥しらずなことを無数につみ重ねて逃れな

がら、いったいなにをまもろうとしたのか？いったいどのような俺自身をまもりぬくべく試みたのか？（中略）答は、ゼロだ。（435 頁）

その後、「逃げまわって責任を回避しつづける男でなくなりたいだけだ」（437 頁）と宣言した主人公は、「不満足」で狂人の仕事を放棄し、無責任で卑劣な人間になりたくない^{バード}鳥と再び重なった。ここに至り、彼はもう自分が守ろうとしたアイデンティティーを確立できる「冒険」の機会が目の前に与えられていることをようやく認識できた。いままで彼はただ戦場で英雄になり、自分の存在意義を確かめたいだけであったが、「障害児」の問題で「屈辱と恥」を飲み込んだ彼にとって、非現実的な「冒険」や英雄のモラルはもはや正確な回答ではなくなった。柘植氏がこの点について次の指摘をした。

この作品では、“個人的”でありながら、“性的”“牡的”であることから脱出するにはいかにすべきか、という問題が提起される。その答えは、「逃げまわりつづける男であることを止める」という^{バード}鳥の決意となって示される。（中略）大江がここで、“偏光グラス”のパラドックスを、はっきりと捨て去ったということだ。つまり、“引き受ける”あるいは“根づく”という行為は、“個人的”でありながら“牡的”でありうるのだ、という新しい価値観が提示されたわけである。³⁰（下線は筆者による。）

その「個人的」でありながら、「性的」ではなく、日本に根付く「社会性」を持つ新しい価値観は、結末に義父に語った「現実生活を生きるということは、結局、正統的にいきるべく強制されることのようにです」（438 頁）という一句に結ぶ。そういう風に生きようとした彼はデルチェフが贈った辞書に「最初に《忍耐》」という単語を引くと決めた。利沢行夫が『『個人的な体験』の最後の三頁が、作者にとって意味を持つのはその時である。態度決定によって自分の回復を成し得た^{バード}鳥（もはや鳥ではない）の生きる道は、《希望》をもち、しかし《忍耐》す

³⁰ 柘植光彦「大江健三郎・主要作品の分析—性的人間」『国文学 解釈と鑑賞第 452 巻』（至文堂、1971 年）108 頁。

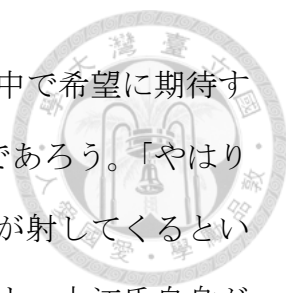
ることによって、正統な人間として生きることである」³¹と分析したように、「正統的な人間」というのは即ち「ヒロシマ」のモデルを指し、その「威厳」ある「正統的な人間」がモットーとした希望の光がここで微かに顔を見せているのではなからうか。「もう^{バード}鳥という子供っぽい渾名に似合わない」(439頁)という、主人公が最後に「あいまい」な名前を脱ぎ捨てたことは希望に向かっている姿勢につながり、初期作品におけるモラルや恐怖のイメージはもうここで無用なものとなったと言えよう。

5. まとめ

本章は大江健三郎の『個人的な体験』について、ウイスキーを区切りに、その主人公のなかにある絶望と希望を分析してきた。物語は全体的に「障害児」の問題を悩む青年を描いているが、彼の行動原理には戦中に「戦争」に対する「死と存在」の恐怖や不安を克服したい「戦後世代」の意識が潜んでいた。それが無責任で卑劣な自分のアイデンティティーに対する「根源的な不満」に導かれたあげく、ウイスキーという「自己欺瞞」の道具に頼ってしまった。同じ「戦後世代」の火見子との性交渉を通して両者の力関係においてバランスが取り戻されるようになったが、それが根本的な解決になれないと見受けられる。

ところが、「障害児」の絶望は実際現実の「冒険」として、彼にアイデンティティーの挽回——「威厳」のある「正統的な人間」への回復——の機会を与えた。デルチェフの愛情と菊比古の生き方を見詰め、それをようやく理解したあと、主人公は^{バード}鳥という「あいまい」な象徴と別れ、想像上の「冒険」と決別し、絶望を受け入れて生きていくことに立向っていくのであろう。こうして、登場人物間の力関係を通して解説していけば、その転換はむしろ必然的な選択であり、初期作品の「監禁状態」や「戦後世代」の問題意識から脱出し、絶望を希望に向わせる方法の示しになったと考えられる。そして、それが第二章で論じた魯迅の「大

³¹ 利沢行夫「自己救済のイメージ—大江健三郎論 I—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』(有精堂、1974年)196頁。(初出『群像』1967年6月号)



きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」に通ずる概念であり、絶望の中で希望に期待することがこの作品の結末において、はっきりと表現されたのであろう。「やはり私は、予定調和的というのでもないけれど、最後には明るい光が射してくるということを無理にでも信じて小説を書いて生きてきたらしい」³²と、大江氏自身が述べたように、『個人的な体験』は大江文学の初期から中期の転換を成し遂げ、愛と希望の光を見つけた長編小説と言えよう。

³² 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（新潮社、2007年）93頁。

結 論



本論文は大江健三郎文学に見られる大きな分岐点を目印に、三つの時期に分けた上で、初期から中期までに発生した最初の転換に着眼し、絶望が希望へ向かう過程と意味を解明するために、小説に登場した人物たちの力関係の推移にアプローチしてみた。具体的な手順として、まず、作家の出発点である「戦後世代」の問題意識を確認したうえ、戦後社会の「監禁状態」をテーマにしたデビュー作の「奇妙な仕事」、初めて 1963 年の出来事を扱った「空の怪物アグイー」および、中期の入り口と見なされる、「正統的に生きる」結末に至った『個人的な体験』の三つの作品を研究対象として考察を進めてきた。結論として次の三点が挙げられる。

1. 力関係の構造に現れる「戦後世代」の問題意識

「戦後世代」という大江氏が唱えた世代論を皮切りに、1930 年代生まれの人々が戦争をめぐる一連の共通経験を第一章で取り上げ、急激に変動する 40—60 年代の「戦後社会」の時代背景と合わせて整理した。戦時、少年の頃の大江氏が感じた「恐怖」は軍国体制および天皇制のもとに作られた権力構造がもたらした「死」と「アイデンティティー」の不安であり、そこから「英雄と卑劣」のモラルを見極め、アイデンティティーを回復できる戦場と「冒険譚」が彼らに望まれていた。しかし、戦争の「敗北」と共に生じた権力の再構築と戦場の消失は「戦後世代」に再びアイデンティティーの揺らぎを起し、二義的な「あいまい」性を与えた。そのような状況の中で、民主主義から権力と対抗する根拠を手に入れたが、朝鮮戦争の挫折と反米運動を経て、脱出できない「監禁状態」に陥った「戦後世代」を考え、大江氏はそこから出発したと見受けられる。

まとめて言えば、大江氏が提出した「戦後世代」の問題意識とは「死と存在」の喪失という「破滅」の恐怖から逃れるために、強者が弱者を制圧、支配する権力構造、すなわち、「監禁状態」の絶望を乗り越えられる正しい生き方の追求だと定義できる。これは初期から中期までの大江氏の小説が構築した文脈の核心となり、答えがまだ見つからなかった初期作品において徒労する結末しか用意

されないものの、解答が現れた中期以後の小説では最後の部分に前向きな意志が伝わってくる場合が多く、転換が行われたと分かった。というのも、登場人物の力関係の推移の分析を通してその現象が明らかに見えてくるのである。

初期短編の「奇妙な仕事」で、絶対的な弱者であり、「性的」象徴となる「あいまい」な「犬の群れ」から権力を持つ組織である病院まで、いくつかの上下関係の「檻」が成立しており、脱出できない「出口なし」の状況が描き出されたとうかがえる。その中で、一人称の主人公「僕」と「女子学生」は「戦後世代」の問題意識を抱えながら、「政治的」な対策に期待を向け、脱出する道を考案し、権力と暴力を振るう「犬殺し」と「肉ブローカー」に屈伏せずにいたが、最後の警察官による強き外力の関係で無駄な結果を招き、日本社会の権力構造に「敗北」し、さらに下位の共犯者の立場に追い込まれてしまい、受動的で無力な「性的人間」のような状態に近づいた。それに対して、「私大生」は「戦後世代」の中の特権階級として設定され、欠落した自身のモラルを英雄のほうに傾かせるため、卑劣な自己欺瞞で権力を求めた。同じく能動的に動いた「犬殺し」は残された「戦中世代」であり、古くて汚い伝統意識を守り、彼らのアイデンティティーを確保するため、犬殺しの行為を自己正当化した。両者は向き合っているようであるが、実は似た者同士であり、どちらも「卑劣的な英雄意識」のもとで行動的な「政治的人間」になろうとすると、更なる強権に追い返され、抵抗できない「性的人間」の枠に入ってしまった始末となったのである。こうして、「戦後世代」の問題意識ははっきりとテーマとして物語に組み込まれながら、解消できないまま、徒勞の結末を結んだと考証できた。

続いて、「空の怪物アグイー」でも権力に対峙する二人の主人公が現れていた。「障害児」の問題が中心となっているが、音楽家Dと語り手「ぼく」は「同化」する前提条件を、家族内における力関係の低下と「戦後世代」の権力に対する確執によって達成した。つまり、「敗北」を喫し、「逃亡兵」に見なされた「屈辱」は二人に「死と存在」の喪失の恐怖を引き起し、弱者であることを自覚させ、「障害児」という問題がもたらした絶望に連結したと捉えた。Dの父親と元妻が権威を驕った態度を表現する一方、映画女優が「性的人間」の無力さを反映したように、周りの人物たちもDと「ぼく」が「戦後世代」の問題意識を抱えていることを示唆しており、そして、朝鮮戦争の時代背景が「アグイー」という想像の下敷

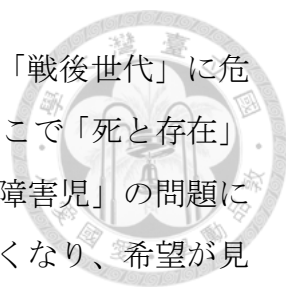
きになったことも「警察」と「犬」の象徴によって明白に見えてきたと分析した。要するに、「空の怪物アグイー」において、「死と存在」の絶望は「戦争」によって醸し出されたが、「障害児」によって浮上したと思われる。二人の主人公がこの課題を抱え、悩んでいくのは物語の内容となったのであった。

次に、『個人的な体験』で「あいまい」なあだ名、^{バード}鳥をつけられた主人公の主な動機は戦中に「戦争」に対する「死と存在」の恐怖を克服したい欲求から来たのであり、朝鮮戦争の想像が溢れる中で菊比古との狂人探しが自分を確かめる機会を得られなかった。無責任で卑劣な自分のアイデンティティーに対する「根源的な不満」を解消できない故に、「社会」と「家庭」の権力構造の「檻」に閉じられた結果、ウイスキーに頼り、自己欺瞞をした。そのような彼が火見子との性交渉を通してアイデンティティーが確定できない「性的人間」の二人の間に行われたバランス調整にすぎず、「政治的」アイデンティティー、または自己正当化できるアフリカの「冒険」＝戦場を求めれば、「監禁状態」の徒労で終わってしまうと読み解いた。

以上、三つの作品の分析によって、「戦後世代」の問題意識が初期から中期までの転換過程において、異なる形であっても、いつも登場人物の中に存在し、互いの力関係を通して一貫して出現していることを判明した。

2. 1963年からの「世代」から「社会性」のある「個人」への転換

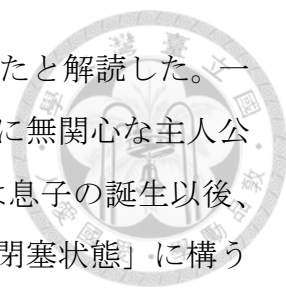
第二章で命名論を用いて大江氏の創作方法を論じ、一人称と代名詞を多用した原因を特定な「個人」ではなく、全体的な「世代」に拘り、読者に「戦後世代」の共感を催すためだと論証した。「奇妙な仕事」はその一例であり、「空の怪物アグイー」も語り手の視点から見れば、同様であるが、Dと「アグイー」の名称は「障害児」の問題が「個人」的なことであると示した。そして、『個人的な体験』ではさらに三人称を使用し、^{バード}鳥や火見子みたいな名前の由来を描写し、「障害児」の名づけの段落で命名の重要性を強調し、「世代」より「個人」を重視する方向性で、初期の手法から離れた。こうして、作品の中心が「世代」から「個人」に移行した過程が読み取れた。この変化の引き金となったのは、1963年に大江氏の「障害児」の長男の誕生、および広島への旅経験であった。



第三章では、先に 1960 年代の時代性に触れ、戦争の予感が「戦後世代」に危険の感覚と恐怖心を与え、狂気を催したことを取り上げた。そこで「死と存在」の絶望が巨大で抽象な怪物と大江氏に形容された。そして、「障害児」の問題に臨んだ大江氏は衝撃を受け、「一個人」としての未来が見えなくなり、希望が見当たらない頹廢感を覚え、「世代」の絶望を「障害児」の絶望と重ねた。こうして、「死と存在」の問題意識が「障害児」の誕生を通して「個人」の内面に向けてさらに大江氏に深く掘り下げられたと考察した。小説では、「空の怪物アグイー」における「アグイー」が怪物と想像されたのもこの絶望の具現であること、そして、ヒステリーの狂気が音楽家 D、および、『個人的な体験』の精神病院の狂人によって表現されていたことを論証した。この絶望の印がどちらの主人公にも強く感じられ、「戦後世代」の問題意識が変質し、「障害児」の困難と結び付いていくことが描写されたと言えるだろう。

やがて、この絶望感から脱却できたきっかけとなったのは、広島への旅であった。当地の住人たちの原爆被爆経験＝「ヒロシマ」を通じて、従来の「戦後世代」の考え方を再検討し、命とアイデンティティーの意味を違う方法で大江氏が捉えた。かつて「英雄と卑劣」のモラルを判断基準とし、自分を見極めようとしたが、「威厳」と「屈辱、恥」の用語を大学で学習した大江氏は、逃亡か自殺かの兵士のジレンマを例に、「政治的力関係」、つまり、あらゆる「権力」による手段ではなく、「恥」と「屈辱」に向き合い、「威厳」のある広島の「正統的人間」の生き方のモデルを確認し、提唱した。その定義とは絶望しすぎず、希望を過度に持たず、屈伏せずに毎日を生きていく方法である。そして、大江氏が解説したように『個人的な体験』のタイトルとは、「個人」のことを大切にすることであるとともに、「社会性」のある生き方でもあったと第四章で論じた。

「空の怪物アグイー」においては D が「アグイー」に感じた葛藤は「戦後世代」の「ぼく」が権力体制に向ける関心と違い、彼「個人」の生命の価値づけのみに注目していたことが明らかであり、こうして、音楽家が自分の人生を一つずつ消して、喪ったものとして「空の世界」に送っていく理由も「アグイー」に対する罪悪感と自分の存在価値を確立するためだったと、解明した。しかし、それは「社会性」を持つ「個人」ではなく、ただ社会から隔離された一人であることを否めない。そのため、最後の自殺は単なる責任逃避であり、「敗北」した「屈辱」の



絶望を「ぼく」に残した同時に、それを越えられる機会を託したと解釈した。一方、『個人的な体験』でも「障害児」の問題で悩み、「核実験」に無関心な主人公は、「戦後世代」のアイデンティティーの不満足を抱いた彼は息子の誕生以後、「障害児」という「個人的」な問題に集中し、「世代」的な「閉塞状態」に構う暇がなくなったように見えた。そのため、あらゆる「戦後世代」の方法、つまり「性的」、または「政治的」な手段も、他の場所にある「冒険」でも、彼を救済することはできなかった。そういう意味において、最後にウイスキーという欺瞞と逃避の象徴を拒絶し、「正統的に生きる」と決めた^{バード}鳥の選択は必然であったと論証した。

このように、「世代」から「個人」に移行する過程において、必ず「障害児」と広島の旅がきっかけとなるのは明らかであり、最終的に「社会性」のある「正統的な人間」に辿り着くと究明した。

3. 問答形式によって構成される転換。

「奇妙な仕事」で犬の「吠え声」と「火山」の夢は「監禁状態」を脱出する道として描かれていたが、権力体制を打破できない以上、ただの逃避になり、徒勞に終わったことにすぎなかった。絶望を乗り越えたい意図は魯迅の「白光」と共通しているものの、そこにある「大きな希望をふくんだ恐怖の悲鳴」の概念、つまり、絶望と向き合って希望を持って前進することを大江氏は表現し尽すことはできなかった。1963年の出来事を経て、「空の怪物アグイー」においては、最後「ぼく」は「アグイー」との決別によって、絶望を乗り越えた意思が表明されていた。子供を脅すと、反撃された「ぼく」は右目を犠牲にし、Dと同じ位置に辿り着き、絶望の象徴である「アグイー」と再会し、別れた。この離別は赤んぼうを殺した罪と「屈辱」に正面から立ち向かい、Dが残した問題から「威厳」のある生き方に進んでいくことを意味している。そのおかげで、28歳の「ぼく」は社会の「あいまい」性を見出し、「危険な感覚」を持って世界に臨もうとしていた。それが「正統的な人間」のモデルの呈示であり、最終的に社会性を取り戻し、「戦後世代」の問題意識に答えようとしたと第三章でそう結論付けた。しかし、その表現方法は初期作品から引き継いだ部分が多く、希望の到達も抽象的すぎで、あまり意識されていないというのが事実であるためにこの短編の位置付

けも揺らぐ結果になったと従来の研究を整理した上で説明した。それに比べ、『個人的な体験』は完全にリアルに描かれた小説であり、取り上げられたのもほとんど具体的な事件であった。

そのような『個人的な体験』で「障害児」の絶望は空想ではなく、現実の「冒険」として鳥の「根源的な不満」に対する選択と回復の機会となったが、彼は「政治的」ではないデルチェフの希望が溢れる愛情と菊比古の責任を背負う生き方を目撃した後、ようやくそれを理解した。こうして、長編小説が表現すべき性質はここで表現された。最後のウイスキーの拒絶は自己欺瞞の否定を意味し、主人公は鳥という「あいまい」な象徴と別れ、想像上の「冒険」＝アフリカと決別し、絶望を受けて生きていく挑戦に立向って行った。彼が「正統的に生きる」と決めたのは明らかに大江氏の「ヒロシマ」の影響を受けており、「監禁状態」の外に脱出するのではなく、日本社会に根付いている「社会性」を手に入れ、絶望の困難を「忍耐」し、向き合っていくことが「死とアイデンティティ」の喪失を克服する最適な回答になったという論述を行った。

この「正統的に生きる」姿勢は、大江氏の友人であるエドワード・サイードの死去のエピソードを例にここで補充する。サイード氏が亡くなった後、その娘から手紙が大江氏に届いた。その内容を、大江氏がいくつの段落を取り上げ、以下のように回想した。

「とても苦しい状況だということを父親のエドワード・サイードは常に認識していたし、それを語ってもいた。しかし、彼には同時に根本的な楽観主義というほかないものがあつた。」と書くんです。「最後は彼は楽観的だった、この窮地を乗り越えることができると信じていた。それが彼の作品を読み返すごとに蘇ってくる」と。それを思い出すたびに私は勇気つけられます。

1

大江氏が広島病院院長の重藤文夫氏から教わった「窮境での「正しい考え始め

¹ 大江健三郎・古井由吉『文学の淵を渡る』（新潮社、2018年）273頁。

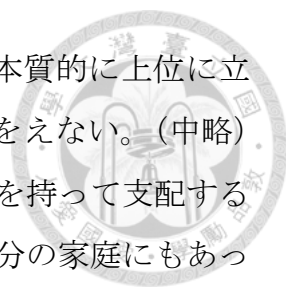
方」²もまさにそのような楽観性であり、絶望を理解した上で向き合い、未来に希望があると信じていくことは初期から中期までの転換が辿り着いた「世代」の「監禁状態」に対する結論と言っても過言ではなかろう。したがって、絶望から希望へ向かう転換は実は一つの間答形式によって構成されており、初期の試行錯誤を重ねてから獲得できた答えだと立論できる。

以上の三点を踏まえれば、大江健三郎文学における初期から中期までの転換は、「戦後世代」の問題意識に対し、「社会性」を持つ「個人」という答えに至るまでの過程であると分かった。権力体制の中に生じた「死とアイデンティティ」の喪失の絶望と正面から向き合い、困難を耐えながら生きていく「正統的な人間」の姿勢を取り、未来に楽観的な期待を捨てずに前進する価値観が大江氏にとっての希望であると言えよう。

本論文は三つの作品に登場した人物の力関係を通して考察を進めて来て、大江文学における絶望と希望の意義を究明した。従来の先行研究では力関係、もしくは権力体制を論及したとしても、中期までの変化をこの切り口で総合的に捉えようとしたものがなかったとうかがえる。しかし、このように分析していくと、「戦後世代」の問題意識をいかに答えていくかという問答形式が一貫して存在し、作品ごとに発展していったことを見出せる。それを踏まえ、大江文学における三作の位置付けも成功し、特に「空の怪物アグイー」と『個人的な体験』の関係を対立、連続ではなく、違うリアリティーの表現手法で同じテーマを扱い、同様な結論に至ったというふうに並立しているという新しい解釈を加えた。このように、本論文は今までの大江文学研究と異なる視線を提供したと考えられるだろう。

ところが、『個人的な体験』で大江氏が到達した希望の形が完成したとは言えない。「正統的な人間」のモデルを得られたとはいえ、権力体制が消えたわけでもなく、上下関係も破られていないので、「正統的に生きる」ことを実践するに必要な具体的な方法も提示されていないと言わざるを得ない。それに対し、1995年の講演で、大江氏が以下のように述べた。

² 大江健三郎「窮境を乗り越える人間の原理」『定義集』（朝日新聞出版、2016年）103頁。



実際に小説を読んで批評してもらおうと、どうも自分を本質的に上位に立たせているところがあったんじゃないか、それを認めざるをえない。(中略) すなわち、家庭における親の上位、子供たちの下位、権力を持って支配する者、それによって支配される者という、よくある構図が自分の家庭にもあったのじゃないかということにすこし気が付き始めているわけです。³

この構図の問題をどう解決すればいいのか、と考える大江氏は次にこう思った。

その対案は何かというと、対等な関係をつくるということのほかないでしょう、単純なことを申しあげますが。横に並んで、対等な関係をつくる。民主主義的な関係といってもいいんですが、お互いにそういう関係をつくるということが、私たちが家庭においても上下関係から解放される方法ではないか？⁴

家族のうちに気付かれた上下関係の問題は本論文で論じたように、中期まで大江氏の小説に潜んでいた。かつて権力と対抗してきた「戦後世代」の主人公「僕」は一見、共生、再生の希望を見つけたと思えるが、実は自分が特権者になり、上位に登っただけであり、それを解決しないと自己否定にもなり得る。そのため、上掲文の通り、大江氏が対等な関係をその対策として考えたのである。中期に入った以後、『人生の親戚』（1989年、『新潮』）が女性を主人公にし、『静かな生活』（1990年、『文芸春秋』）で息子と娘などの「子供世代」を語り手にするようになり、創作手法に各種な変化が見られることから、立ち位置の上下関係、あるいは権力の強弱から言えば、力関係がどう対等、あるいは平等関係に発展していくかが、今後注目すべきところであり、そこに込められた絶望と希望の意味を課題としてさらに研究していきたい。

³ 大江健三郎 「「家族のきずな」と両義性」『あいまいな日本の私』（岩波書店、1995年）81頁。

⁴ 同上、88頁。

参考文献（著者名五十音順）




1. テキスト

- 大江健三郎（1966）「遅れてきた青年」『大江健三郎全作品 4』新潮社
（1996）「奇妙な仕事」『大江健三郎小説 1』新潮社
（1996）「死者の奢り」『大江健三郎小説 1』新潮社
（1996）「不満足」『大江健三郎小説 2』新潮社
（1996）「空の怪物アグイー」『大江健三郎小説 2』新潮社
（1996）「個人的な体験」『大江健三郎小説 2』新潮社

2. 単行本・叢書

- 安藤 始（2006）『大江健三郎の文学』おうふう
石原 千秋（2004）「反転する帝国—大江健三郎『叫び声』『個人的な体験』」
『テキストはまちがわない』筑摩書房
磯田 光一（1968）「解説」『日本の文学 76』中央公論社
（1987）「大江健三郎と江藤淳の登場」『増補改訂戦後日本文学史・
年表』講談社
岩崎稔・小森陽一・成田龍一（2009）「ガイドマップ」『戦後日本スタディーズ
1』紀伊國屋書店
大江健三郎（1958）『死者の奢り』文芸春秋新社
（1965）『ヒロシマ・ノート』岩波書店
（1965）「第一部のためのノート」『厳粛な綱渡り』講談社
（1966）「本当に文学が選ばれねばならないか？」『大江健三郎全作
品 1』新潮社
（1968）『持続する志』文芸春秋社

- 
- (1970) 『遅れてきた青年』 新潮社
- (1980) 「戦後世代のイメージ」『大江健三郎 同時代論集 1』 岩波書店 (初出『週刊朝日』 1959年1月—2月号)
- (1980) 「われらの性の世界」『大江健三郎 同時代論集 1』 岩波書店 (初出『群像』 1959年12月号)
- (1980) 「強権に確執をかもす志」『大江健三郎 同時代論集 1』 岩波書店 (初出『世界』 1961年7月号)
- (1980) 「ぼく自身のなかの戦争」『大江健三郎 同時代論集 1』 岩波書店 (初出『中央公論』 1963年3月号)
- (1980) 「危険の感覚」『大江健三郎 同時代論集 1』 岩波書店 (初出『新潮』 1963年8月号)
- (1980) 「戦後世代と憲法」『大江健三郎 同時代論集 1』 岩波書店 (初出『朝日新聞』 1964年7月16日)
- (1980) 「憲法についての個人的な体験 (講演)」『大江健三郎 同時代論集 1』 岩波書店 (初出『朝日新聞』 1964年7月16日—18日)
- (1980) 「未来へ向けて回想する—自己解釈 (二)」『大江健三郎 同時代論集 2』 岩波書店
- (1981) 「かつてあじわったことのない深甚な恐怖感が鳥をとらえた」『個人的な体験』 新潮社
- (1995) 「癒される者」『あいまいな日本の私』 岩波書店
- (1995) 「「家族のきずな」と両義性」『あいまいな日本の私』 岩波書店
- (2001) 「北京講演二〇〇〇」『鎖国してはならない』 講談社
- (2001) 「きみたちにつたえたい言葉」質問と答え『鎖国してはならない』 講談社



- (2001) 『私という小説家の作り方』 新潮社
- (2007) 『大江健三郎 作家自身を語る』 新潮社
- (2009) 「大江講評」『大江健三郎—從自我到世界』 中央研究院中國文哲研究所
- (2011) 「九条を文学の言葉として」『取り返しのつかないものを取り返すために 大震災と井上ひさし』 岩波書店
- (2016) 「窮境を乗り越える人間の原理」『定義集』 朝日新聞出版 (初出『朝日新聞朝刊』 2008年2月19日)
- (2016) 「不思議だった！という医師」『定義集』 朝日新聞出版 (初出『朝日新聞朝刊』 2010年10月19日)

- 大江健三郎・すばる編集部 (2001) 『大江健三郎・再発見』 集英社
- 大塚 英治 (2006) 『初心者のための「文学」』 角川書店
- 加藤 周一 (1999) 『日本文学史序説 下』 筑摩書房
- 加藤 典弘 (2008) 『文学地図 大江と村上と二十年』 朝日新聞出版
- 北岡 正子 (2006) 『魯迅 救亡の夢のゆくえ 悪魔派詩人論から「狂人日記」まで』 関西大学出版部
- 許 金龍 (2009) 「始自絶望的希望—大江文學中的魯迅影響初探」『大江健三郎—從自我到世界』 中央研究院中國文哲研究所
- 黒古 一夫 (2010) 『黒古一夫書評集 戦争・辺境・文学・人間 大江健三郎から村上春樹まで』 勉誠出版
- 「50年史」編集委員会 (2000) 『JKC50年史』 社団法人ジャパンケンネルクラブ
- スタンダール著・小林正訳 (1957) 『赤と黒 (上)』 新潮社
(1958) 『赤と黒 (下)』 新潮社
- 平野 謙 (1966) 「解説」『大江健三郎全作品6月報』 新潮社
- 藤井 省三 (2011) 『魯迅 東アジアを生きる文学』 岩波新書



- 松原 新一 (1967) 『大江健三郎の世界』 講談社
(1972) 「大江健三郎」『昭和の文学』 有斐閣
- 森岡健二・山口仲美 (1985) 『命名の言語学 ネーミングの諸相』 東海大学出版会
- 山下 政三 (2008) 『鷗外森林太郎と脚気紛争』 日本評論社
- 楊 義 (2015) 「自序點評」『魯迅作品精華(選評本) 第一卷』 三聯書店
- 吉村 公宏 (1995) 『認知意味論の方法 経験と動機の言語学』 人文書院
- 魯迅著・竹内好訳 (1991) 「自序」『魯迅文集 1』 筑摩書房
(1991) 「白光」『魯迅文集 1』 筑摩書房
(1991) 「希望」『魯迅文集 2』 筑摩書房
- 魯迅 (2005) 『魯迅全集 第一卷』 人民文学出版社
- 渡辺 広士 (1972) 「解説」『空の怪物アグイー』 新潮社

3. 機関雑誌・論文

- 秋山駿・栗坪良樹・柘植光彦・山田有策 (1979) 「共同討議 大江健三郎の作品を分析する」『国文学 第24巻第2号』 學燈社
- 荒 正人 (1971) 「『奇妙な仕事』を推す—五月祭賞選後評」『国文学 解釈と鑑賞 第452巻』 至文堂 (初出『東京大学新聞』1957年5月22日号)
- 岩田 英作 (1988) 「「個人的な体験」論—多元的宇宙の創出—」『近代文学試論』 広島大学近代文学研究会
- 大江健三郎 (1971) 「大江健三郎に聞く 戦後世代の心情と論理」『国文学 解釈と鑑賞 第452巻』 至文堂
(2012) 「ビキニからフクシマまで (特集 学会60周年記念シンポジウム論文)」『マス・コミュニケーション研究 80号』 マ

ス・コミュニケーション研究学会

(2015)「半世紀後の『ヒロシマ・ノート』」『早稲田文学 2015年秋』早稲田文学会



勝又 浩 (1978)「作家の出発期と文学活動—大江健三郎」『国文学 解釈と鑑賞 第43巻12号』至文堂

亀井勝一郎・河上徹太郎・河盛好蔵・小林秀雄・中島健蔵・中村光夫・山本健吉 (1971)「第11回新潮文学賞『個人的な体験』選評」『国文学 解釈と鑑賞 第452巻』至文堂

邦高 忠二 (1974)「大江健三郎の反抗と常識—『厳粛な綱渡り』をめぐって—」『日本文学研究資料刊行会編安部公房・大江健三郎』有精堂 (初出『新日本文学』1965年5月号)

栗坪 良樹 (1971)「『個人的な体験』堅穴式から、抜け道のある洞穴式へ」『国文学 第16巻第1号』學燈社

黒古 一夫 (1998)「天皇制—デモクラット大江健三郎の決意」『日本文学研究論文集成45』若草書房 (初出『社会文学3』日本社会文学会、1989年)

小林 由紀 (2005)「大江健三郎文学研究 —父親と天皇—」『台湾日本語文学報 20号』台湾日本語文学会

坂口 周 (2010)「大江健三郎と〈ポップ〉の系譜—1960年代の〈穴〉」『津田塾大学紀要』津田塾大学紀要委員会

鷺 只雄 (1977)「『石原・大江・開高』の文学 大江健三郎『個人的な体験』」『国文学 解釈と鑑賞第42巻11号』至文堂

蘇 明仙 (2000)「『われらの時代』論：戦後認識を中心に」『Comparatio. 4』九州大学大学院比較社会文化研究科比較文化研究会

高橋 由貴 (2012)「記録する機械の限から『広島レンズ』へ—大江健三郎『ヒロシマ・ノート』論—」『日本近代文学第86集』日本

近代文学会



- 柘植 光彦 (1971) 「大江健三郎・主要作品の分析—性的人間」『国文学 解釈と鑑賞第 452 巻』至文堂
- (1974) 「大江健三郎—戦後世代の文学のキーノート—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』有精堂 (初出『国文学 解釈と鑑賞 1969 年 9 月号』)
- 趙 軒求 (2014) 「大江健三郎論—物語内容と物語言説におけるヘテロ的な特性を視座として—」中央大学
- 月村 敏行 (1974) 「世代論の逆説—大江健三郎論—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』有精堂 (初出『文学界』1966 年 4 月号)
- 利沢 行夫 (1974) 「自己救済のイメージ—大江健三郎論 I—」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』有精堂 (初出『群像』1967 年 6 月号)
- 野間 宏 (1974) 「方法の問題」『日本文学研究資料叢書 安部公房・大江健三郎』有精堂 (初出『群像』1958 年 7 月号)
- 馮 香紅 (2012) 「解讀《呐喊》中魯迅的反封建思想」『短編小説 2012 年第 4 期』吉林市文聯
- 三島由紀夫 (1964) 「すばらしい技倆、しかし…—大江健三郎氏の書下し「個人的な体験」」『週刊読書人』1964 年 9 月 14 日号 読書人
- 村上 克尚 (2008) 「動物とファシズム—大江健三郎「奇妙な仕事」論」『日本近代文学第 79 集』日本近代文学会
- 村瀬 良子 (1995) 「大江健三郎の出発点:『奇妙な仕事』の《監禁》状態」『近代文学試論』広島大学近代文学研究会
- 森川 達也 (1979) 「監禁状態の定着—初期作品を中心として—」『国文学 第 24 巻第 2 号』學燈社

山田 博光 (1971) 「大江健三郎・主要作品の分析『個人的な体験』『国文学
解釈と鑑賞第 452 巻』至文堂



4. 新聞・辞書・インターネット

大江健三郎 (1965) 「僕らはいまや少数派 戦後の蜜月育ち」『朝日新聞朝刊』
1965 年 3 月 31 日 8 面

(1966) 「希望訪問 戦後世代の旗手 風に向かって進む魅力」『読
売新聞朝刊』1966 年 9 月 25 日 18 面

(2005) 「大江健三郎 Interview long Version 2005 年 9 月号」
(<https://ddnavi.com/interview/23089/a/>、ダ・ヴィン
チニュース 2005 年 9 月 1 日掲載、2018 年 6 月 20 日閲覧)

(2010) 「大江健三郎さん「ヒロシマ」を語る」『中国新聞朝刊』2010
年 10 月 10 日 7 面

大江健三郎講演・翁家慧訳 (2009) 「真正的小説は写给我们的亲密的信」『文匯
報』2009 年 1 月 22 日第 10 版

奥野 健男 (1964) 「精神の自由と社会 “怪物赤ん坊” を通じて」『読売新聞
夕刊』1964 年 9 月 10 日 9 面

開高 健 (1959) 「変わらぬ発想法」『読売新聞夕刊』1959 年 8 月 6 日

中條 忍 (1988) 「項目 魅せられたる魂」『日本大百科全書』小学館
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編

(2001) 『日本国語大辞典 第二版 第七巻』小学館

(2001) 『日本国語大辞典 第二版 第八巻』小学館

文部科学省 (1981) 「小学校令改正 (抄) (昭和十六年三月一日勅令 第四百十
号) 国民学校令」『学制百年史 資料編』文部科学省

松原 新一 (1967) 「大江文学の魅力 戦後世代の渴望と象徴」『読売新聞朝刊』
1967 年 10 月 8 日 18 面